

平成16年度
海洋及び沿岸域のゴミ問題に関する調査研究
報告書

平成17年3月

シップ・アンド・オーシャン財団
海洋政策研究所

まえがき

四面環海である日本は、海岸線の57%が人が親しみ愛する自然海岸であり、25%が岩場や岩礁、崖等で形作られ美しい景観を呈している。

しかしながら、近年の海岸は海洋ゴミの放置、不法投棄、他国や河川からの流入等によりあらゆる種類のゴミが漂着、散乱し、自然景観を損ない、海を訪れた人々に失望感を与え憩いの場を奪っている。そればかりか、海洋生態系や漁業資源等にも大きな影響を与えている。

海洋ゴミを無くするという事は、世界にとっても放置することができない、今後の海洋環境の向上にとっても重要な問題であるが、その実現には多額の費用を要し、必ずしも恒常的な活動ができないという状況である。

全国の海岸線を持つ地域では、自治体、漁協、環境ボランティア、市民等が、環境を向上させ恒常的に海岸の美化活動を継続させようと努力している人々にとって、清掃活動と共に海洋ゴミの処理等、海岸の清掃費用は大きなアキレス腱となっている。

財団は、このような海岸ゴミの状況に鑑み、自治体、漁協、環境ボランティア、市民等、地域の人々が相互に協力しあい、海岸の美化活動を恒常的に続けるための活動システムや海洋ゴミの処理技術について調査研究を進めてきたが、平成14年度は、地域にマッチングした「実践的循環型社会活動システム」を立案し、平成15年度には全国各所で「地域の海洋環境貢献活動(健康な海づくり)プロジェクト」を実践し、平成16年度は、プロジェクトの広がりという観点から既活動地域の周辺地域を対象とした活動を進め、地域主導で継続的な活動の実施を図ると共に、本年2月25日には、本プロジェクトに直接携わってきた地域の方々が集まり、お互いの情報交換やネットワークによりゴミ問題の社会活動システムの構築を目的に、「ゴミ問題に取り組む地域社会」一循環型の継続的活動を目指して一題して、交流会議を開催した。

また、ビニール・プラスチック等が混在する海草・藻等の自然系海洋ゴミの処理システムについて調査を行った。

本報告書は、その成果をとりまとめたものであり、これが全国各地域において一つの実践的なアクションプログラムとして、広域的に展開できる一助となればと期待するものである

なお、本調査研究は、競艇の交付金による日本財団の助成金を受けて実施されたものである。

平成17年3月

(財)シップ・アンド・オーシャン財団

会 長 秋 山 昌 廣

平成16年度「海洋及び沿岸域のゴミ問題に関する調査研究」

研究担当者 寺 島 紘 士 SOF 海洋政策研究所 所 長
菅 原 一 美 SOF 海洋政策研究所 研究員

平成16年度

「海洋及び沿岸域のゴミ問題に関する調査研究」事業について

【地域の海洋環境貢献活動プロジェクト（「健康な海づくり」プロジェクト）】

はじめに

SOF海洋政策研究所では、日本財団の助成により平成14年度から「海洋及び沿岸域のゴミ問題に関する調査研究」事業として海のゴミ問題解決のためのプロジェクトを開始した。

このプロジェクトは、海浜のゴミ対策に苦勞している地域の方々と協力して、海浜清掃活動に環境チケット(地域通貨の一種)を取り入れ、地域経済の活性化も視野に入れた実践を伴う循環型プロジェクトである。

また、海洋環境教育プログラムを通じて、人々（特に子供たち）の海洋のゴミ問題への関心を促し、健康できれいな海を取り戻すことを目的として、SOF海洋政策研究所が提案し、実践している。

1. 海洋ゴミ問題についての基本認識と取り組みについて

海洋をめぐる環境問題解決のためには、各コミュニティでの地道で実践的な取り組み無しには問題の解決ができないと考える。

その際、最も大事なことは、その取り組みが地域で循環し継続的に推進されることである。

そのためには、個々の地域社会を構成する当事者（行政、企業、NPO、地域住民など）が連携して地域に密着した活動を行うことが必要である。

この様な社会活動システム作りがまず必要となるが、SOF海洋政策研究所では、その様な地域社会における社会活動システムモデルを開発し、それを地域のニーズに合わせて具体

的に実践するプロジェクトを展開しています。

2. モデルの特色

- 1) 海洋環境貢献活動（海浜清掃活動）と環境チケット（地域通貨の一種）の組み合わせ
- 2) 環境チケットの適用例として、子供たちへの「海洋環境教育」に工夫を凝らしたプログラム、すなわち
 - ①海の工作教室 と
 - ②海の生物工作教室を実施している。

本「モデル」は、海浜清掃活動や実践を伴う海洋環境教育プログラムを通じて、海洋のゴミ問題への関心を促すことを目的として、SOF海洋政策研究所が提案している。

3. プロジェクトの内容

1) 海洋環境貢献活動

海岸で清掃を行いゴミの種類や量、ゴミはどこから来るのか等を教えると共に、海の工作教室の材料として海浜で貝殻や木片等を集める。

環境貢献活動として、海に限らず河川や道路、公園、商店街等での環境保全活動を取り入れている地域もある。

2) 環境チケット

地域の環境貢献活動事務局が発行する環境チケットを、海浜清掃の参加者に配布し、環境チケットで海の工作教室や海の生物工作教室に参加する資格を与える仕組みである。

（環境教育と環境チケットを結びつける仕組みは全国でも珍しい試みである。）

これまで活動を実施した地域では、地域のイベントで使える1日限り有効のチケットや、商店、公共施設、レジャー施設等で割引が得られ、また、活動の貢献度に応じて金融機関の金利の上乗せサービスや表彰制度を取り入れている地域もある。

3) 2つの工作教室

工作教室には、海浜の貝殻、木片等の漂流物と砂、小石、植物種子・葉等を用いて木台に絵を書いたり工作を行う「海の工作教室」と、海水魚（ヒラメ）の稚魚をペットボトルで育てるミニ水族館を作る「海の生物工作教室」がある。

ミニ水族館は、水道水と塩で作った海水と水浄化機能を有する石を2リットルのPETボトルに入れ、海水魚（ヒラメ等）を育てるもので、餌は人工配合飼料を与えている。このミニ水族館は、特別な装置や手入れ等は不要で、上手に飼うと数ヶ月は水を換えずに飼うことができる。

SOF海洋政策研究所では、本プロジェクトを通じて海洋環境保護に対する市民やボランティア組織、地元商工業者、自治体等の積極的な参加を促し、海洋環境に対する地域社会による自発的で持続可能な取り組みを日本全国に広めたいと考えている。

日本各地で地域社会が官民一体となった海洋環境問題の解決のための活動を継続的にを行い、それを発展させることにより、日本の美しい海岸を取り戻すことを期待する。

目 次

まえがき
「地域の海洋環境貢献活動プロジェクト」(健康な海づくり)プロジェクトについて
1. はじめに
2. 事業の概要
3. 事業の計画の内容
4. 海岸清掃等に係わる社会活動システムの構築について
4. 1 地域の海洋環境貢献活動プロジェクト
4. 1. 1 地域の海洋環境貢献活動プロジェクトの概要
1)海洋ゴミ問題についての基本認識とプロジェクトの概要
2)活動プロジェクトのコンセプト
3)活動プロジェクトの特色
4)活動プロジェクト実施の効果
5)活動プロジェクトの内容
①海洋環境貢献活動
②環境チケット
③工作教室
4. 1. 2 地域の海洋環境貢献活動プロジェクトの実施について
1)活動プロジェクトの実施要領
2)環境チケットの活用例について
3)活動拠点の選定
4)活動プロジェクトの実施例
4. 1. 3 海洋環境貢献活動プロジェクトの今後
4. 2 「ゴミ問題に取り組む地域社会」—循環型の継続的活動を目指して—交流会議
4. 2. 1 会議の開催日時、場所等
4. 2. 2 趣旨・目的
4. 2. 3 開会 寺島紘士 SOF海洋政策研究所所長
4. 2. 4 挨拶 曾野綾子 日本財団会長
4. 2. 5 講演
1)海洋ゴミと海守の活動 山田吉彦 日本財団海洋グループ長

2)海洋環境と環境チケット 森野栄一 ゲゼル研究会代表
4. 2. 6 地域の海洋環境貢献活動の事例発表
1)子ども地域通貨「タラ」の活動について
梅田敏文 北海道稚内市教育委員会子ども課係長	
2)酒田港女みなと会議の活動から
小山恵子 山形県酒田市 酒田港女みなと会議事務局長	
3)気仙沼市環境貢献活動:エコポイント活動
佐々木正和 宮城県気仙沼市 気仙沼商工会議所 中小企業相談所 所長	
4)新島の海洋環境貢献活動について
前田宗佑 東京都新島村産業観光課課長	
5)多屋区 530 運動、まるっとヘルシー多屋海岸の活動について
鯉江正雄 愛知県常滑市観光協会、(有)マリナーズ代表	
6)日間賀島「海の日イベント」について
杉浦明巳 愛知県半田市 レッツチタ代表	
7)加世田市、枕崎市の海洋環境貢献活動について
菊野憲一郎 鹿児島県加世田市 アトリエ熊、タノカンの家代表	
8)「来れば来るほど美くなる宮古島の海辺」海浜清掃 ECO パカンスの可能性について
猪澤也寸志 沖縄県平良市〈宮古島〉エコガイドコンソーシアム代表	
9)九州・海ネットワーク 2005(鹿屋市、宇土市、伊万里市)の活動について
下津公一郎 鹿児島県鹿児島市 NPOさつま代表	
4. 2. 7 パネルディスカッション(テーマ:地域活動の広がりへの期待)
・コーディネーター 大塚万紗子(IOI日本事務局長、文部科学省科学技術審議会委員)	
・パネリスト 森野栄一、鯉江正雄、下津公一郎、小山恵子、猪澤也寸志	
4. 2. 8 会議のまとめ
5. 海洋ゴミに関する技術的取り組み
5. 1 海洋ゴミ集積技術について
5. 1. 1 岩礁域回収システムイメージ
5. 1. 2 海洋ゴミ集積技術の今後の課題
5. 2 海洋ゴミ処理技術について
5. 2. 1 人工系海洋ゴミの処理技術について
5. 2. 2 自然系海洋ゴミの処理技術について

5.3	海岸清掃に関する社会的運用システムについて.....
6.	ま と め.....
Appendix	“健康な海づくり”プロジェクトについて.....

1. はじめに

近年、沿岸域、特に人々が最も親しみ利用している海岸には、ゴミの放置、不法投棄、河川からの流入等によりあらゆる種類のゴミが漂着・散乱し、自然の景観や訪れた人々のやすらぎを奪い、景観だけでなく海洋生態系、漁業資源等にも大きな影響を与えている。

このため、毎年全国各地で地方自治体、漁協、環境ボランティア等が、ゴミ清掃活動をしているが、恒常的な清掃システムでないため問題化しているのが現状である。

本事業は、海岸、海浜に、漂着、散乱している海洋ゴミ問題に対して、国や民間を越えた社会活動システムの構築という観点から地域主導で取り組む社会システムづくりを目的に始めたものである。

2. 事業の概要

海洋のゴミ問題を解決するには、社会や個人レベルでの意識改革、陸域と海域が連携した管理体制の一元化、行政、企業、NPO、地域住民の連携等、地域に密着した海岸清掃等に係わる循環型社会活動システムの構築が必要であると考え、平成14年度には海洋ゴミ清掃システムを策定し、主に常滑市で実証活動を行った。平成15年度は、海洋ゴミ清掃活動を継続的に行う循環型社会活動システム「地域の海洋環境貢献活動プロジェクト」として、各地域（稚内、気仙沼、常滑、加世田、宮古島等）において地域のNPO、民間組織等と協働で活動を実施した。

今年度は、平成15年度の活動地域に加え、山形県酒田市、愛知県幡豆町、愛知県日間賀島、鹿児島県鹿屋市、熊本県宇土市、佐賀県伊万里市、鹿児島県枕崎市、沖縄県平良市（宮古島）等で活動を実施した。

また、本事業で実施してきた「地域の海洋環境貢献活動プロジェクト」に直接携わった地域の方々が一堂に会し、お互いの情報交換やネットワーク化を目指して、平成17年2月25日、日本財団ビルにおいて「ゴミ問題に取り組む地域社会」―循環型の継続的活動を目指して―と題し交流会議を開催した。

3. 事業計画の内容

3.1 海岸清掃等に係わる社会活動システムの構築

社会活動システムの地域拡張策として、平成14、15年度に実施した地域（北海道稚内市、愛知県常滑市、宮城県気仙沼市、鹿児島県加世田市、沖縄県平良市（宮古島））に加えて、今年度は、山形県酒田市、東京都新島村、愛知県日間賀島、鹿児島県鹿屋市、宇土市、伊万里市、枕崎市等で、プロジェクトの説明会を開催すると共に、活動を実施した。

また、3年間の活動に直接携わってきた各地域の方々が集まり、お互いの情報交換や活動のネットワー

ク作りと地域におけるゴミ問題社会活動システムの構築を目指し、「ゴミ問題に取り組む地域社会」一循環型の継続的活動を目指して一と題して、交流会議を開催した。

3.2 海洋ゴミの集積・処理に関する社会的運用システムの構築

平成15年度に実施した国内外の海洋ゴミ集積技術及び海洋ゴミ処理技術調査を基に、自然系海洋ゴミの処理技術について、処理装置を試作し実験を行った。

4. 海岸清掃等に係わる社会活動システムの構築について

4.1 地域の海洋環境貢献活動プロジェクト

4.1.1 地域の海洋環境貢献活動プロジェクトの概要

本プロジェクトは、海浜のゴミ対策に苦勞している地域の方々と協力して、海浜清掃活動に環境チケット(地域通貨の一種)を取り入れ、地域経済の活性化も視野に入れた実践を伴う循環型プロジェクトである。

また、海洋環境教育プログラムを通じて、人々(特に子供たち)の海洋のゴミ問題への関心を促し、健康できれいな海を取り戻すことを目的として、SOF 海洋政策研究所が提案し実践している。

1) 海洋ゴミ問題についての基本認識とプロジェクトの概要

海洋をめぐる環境問題解決のためには、国際的な取り組みが必要であることは論を待たないが、各コミュニティでの地道で実践的な取り組み無しには問題の解決ができないと考える。

その際、最も大事なことは、その取り組みが「継続的」に推進されることである。そのためには、個別の地域社会を構成する当事者(行政、企業、NPO、地域住民など)が連携して地域に密着した活動を行うことが必要である。

このような継続性を持った社会活動システム作りがまず必要となるが、平成14年度に海浜清掃等の海洋環境貢献活動に地域通貨*の一種の環境チケットを取り入れた「地域の海洋環境貢献活動プロジェクト」(図4.1)構想を策定した。

* 地域通貨：環境保全や福祉・教育等、お金の換算しにくい活動・サービス等に関して、地域社会が発行するチケット等を、通常の貨幣に代わり活用する仕組み)

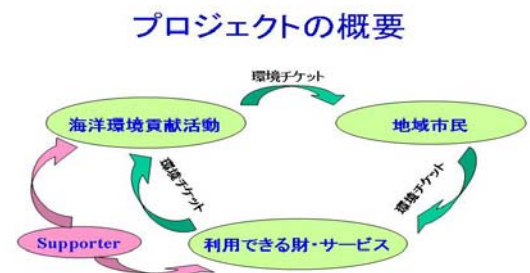


図4.1 プロジェクトの概要

2) 活動プロジェクトのコンセプト

地域の海洋環境貢献活動プロジェクトのコンセプトを図4.2に示す。

ここで、「海洋環境貢献活動」とは、主として海浜清掃活動であるが、その他、河川・河口の清掃、海浜の植生活動、海面・海底の清掃活動等も地域によっては活動に含まれる。

この、海洋環境貢献活動を行う「地域市民」は、海洋環境を守る意識のある人々で誰でも自由に参加できることとし、海洋環境貢献活動を行ったお礼として「環境チケット」が与えられる。

「環境チケット」は、地域の環境がきれいになったお礼として商工業・観光業者・自治体等が協力し、地域商店や公共施設、レジャー施設の割引、地域銀行の預金金利の上乗せ等の特典が付加される仕組みである。

本プロジェクトでは、初めてプロジェクトを実施する時に環境チケットの使い方を知らうため、海浜清掃参加への特典(メリット)として海の工作教室を開催した。

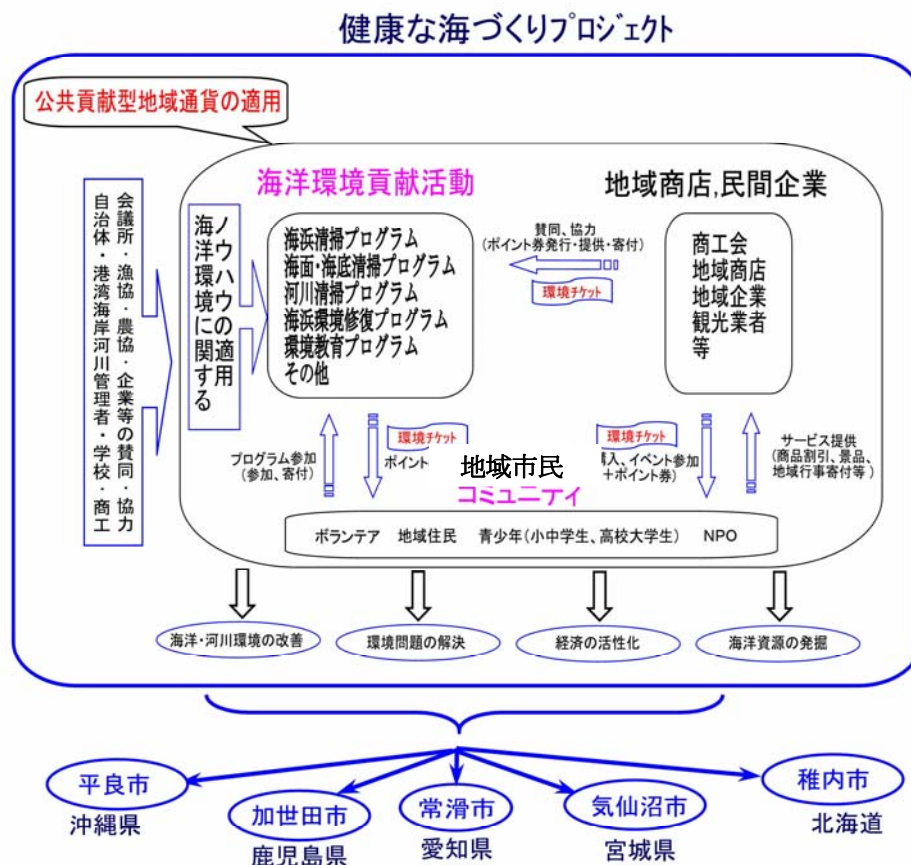


図4.2 地域の海洋環境貢献活動プロジェクトのコンセプト

3) 活動プロジェクト特色

- ①フィールド重視・問題解決型モデルである。
- ②官民協働の地域パートナーシップが創出できる。
- ③海浜清掃、海洋環境教室、漂着物・海の植物・生物等を使った海の工作教室を導入した。
- ④海洋環境貢献活動に地域通貨の一種である環境チケットを導入した。

4) 活動プロジェクト実施の効果

- ①継続的な地域社会活動が可能になる。
- ②海洋環境が改善される。
- ③地域社会の環境意識が向上する。
- ④海洋資源(観光、レジャー、いやし効果等)が創り出される。
- ⑤環境チケットの導入により商店等の集客効果等により地域経済が活性化する。

5) 活動プロジェクトの内容

①海洋環境貢献活動

海岸で清掃を行いゴミの種類や量、ゴミはどこから来るのか等を教えると共に、海の工作教室の材料として海浜で貝殻や木片等を集める。

環境貢献活動として、海に限らず河川や道路、公園等での清掃、整備等の環境保全活動を取り入れることもできる。

写真4.1、写真4.2に海浜清掃活動の状況等を示す。



写真4.1 海浜清掃活動の様子

(愛知県常滑市多屋海岸)



写真4.2 集めた海洋ゴミ

(愛知県常滑市多屋海岸)

②環境チケット

地域の活動事務局(サポーター、既存又は新設)が発行する環境チケットを、海浜清掃の参加者に配布し、環境チケットで海の工作教室や海の生物工作教室、海洋環境教室等に参加する資格を与える仕組みである。

平成14年度から今年度まで、活動プロジェクトを実施した地域では、工作教室の他、地域のイベントでも使える1日限り有効のチケットや、商店、公共施設、レジャー施設等で割引や、地元金融機関の定期預金で優遇金利等の特典が得られるシステムを取り入れている地域もある。

図4.2～図4.13に、本活動プロジェクトで使われた環境チケットの例を示す。



図4.2 常滑市の環境チケット

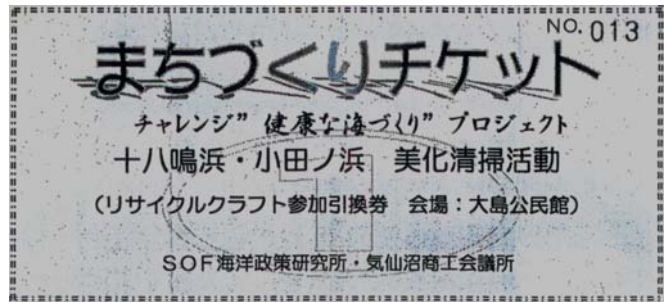


図4.3 気仙沼大島の環境チケット



図4.4 気仙沼市の環境チケット



図4.6 常滑市の環境チケット



図4.5 鹿児島県加世田市の環境チケット



図4.7 稚内市の環境チケット

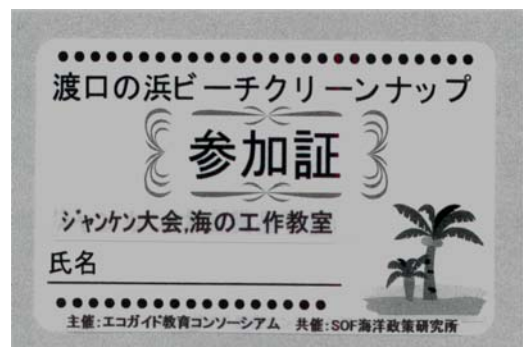


図4.8 宮古島平良市の環境チケット



図 4. 9 新島の環境チケット

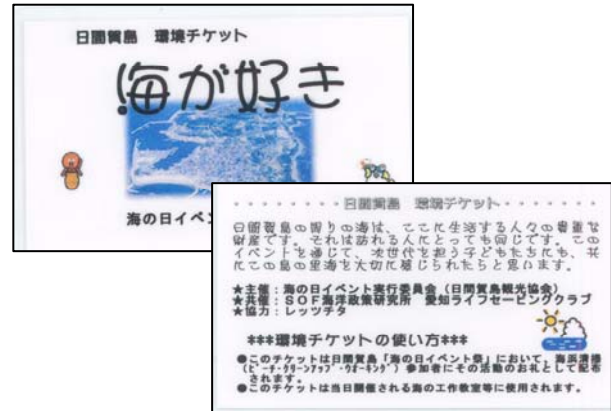


図 4. 10 日間賀島の環境チケット



図 4. 10 鹿屋市の環境チケット



図 4. 11 宇土市の環境チケット



図 4. 12 伊万里市の環境チケット



図 4. 13 枕崎市の環境チケット

③工作教室

工作教室には、海浜の貝殻、木片等の漂流物と砂、小石、植物種子・葉等を用いて木台に絵を描いたり工作を行う「海の工作教室」と、海水魚（ヒラメ等）の稚魚をペットボトルで育てるミニ水族館を作る「海の生物工作教室」等が開発されている。

海の工作教室は、地域の海浜清掃活動を行ったときに、海洋ゴミと一緒に貝殻やきれいな小石、木片、枝等を集めて工作材料にする様になっている。地域によっては杉や檜等の間伐材を2cm～3cmの厚さに輪切りした木材を工作ベースとして利用している。

工作を始める前に、集めた海洋ゴミがどこから発生し、どの様にして海岸に流れ着くか、海洋ゴミの海洋環境に与える影響等について説明を行っている。

海の工作材料や工作用の道具等はできるだけ地域で準備することを推奨しているが、初めての場合や、海浜で拾った材料だけでは種類、数量とも少ないので、希望によっては活動事務局が材料（数100種類をストックしている。）を用意している。

写真4.3に海の工作教室の様子を、写真4.4に海の工作材料を、写真4.5に海の工作材料（工作ベース）を、写真4.6に海の工作教室作品例を示す。



写真4.3 海の工作教室



写真4.4 海の工作材料



写真4.5 海の工作材料(工作ベース)



写真4.6 海の工作教室の作品例

海の生物工作教室で作るミニ水族館は、水道水と塩で作った海水と浄化する多孔質の石を、2リットルのPETボトルに入れ、海水魚（ヒラメ等）を育てるもので、餌は人工配合飼料を与えている。

このミニ水族館は、海の生物を育てることを通じて、海と生物の関わりや命や水の尊さを教えることを目的に開発したもので、育てるには特別な装置や手入れ等は不要で上手に飼うと数ヶ月は水を換えずに海水魚を飼うことができ、ある程度成長したら海に戻す事を推奨している。海の生物工作教室の様子を写真4.3に、海水魚（ヒラメの稚魚）を入れたPETボトルを写真4.4に示す。



写真4.7 ミニ水族館製作の様子



写真4.8 PETボトルミニ水族館



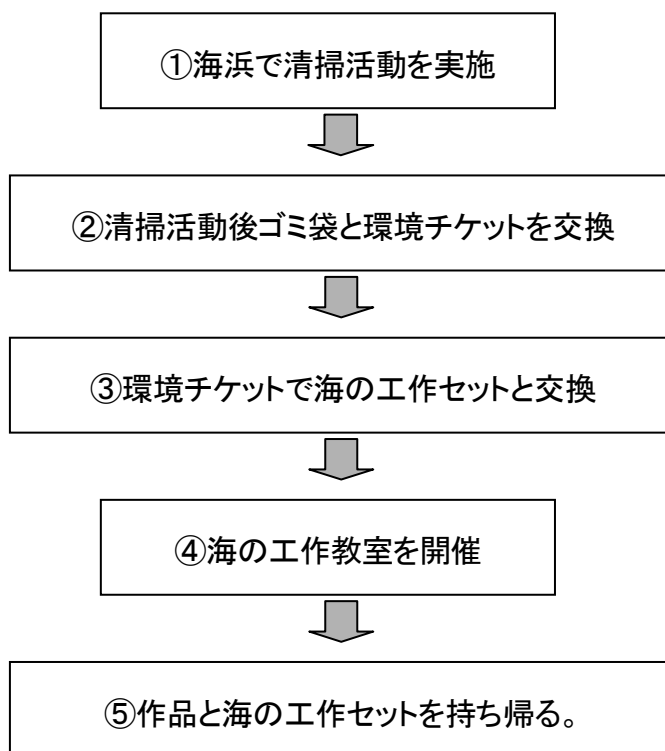
写真4.9 ミニ水族館(ヒラメ稚魚)



写真4.10 ミニ水族館(ヒラメ稚魚)

4.1.2 地域の海洋環境貢献活動プロジェクトの実施について

1) 活動プロジェクトの実施要領



- ①海浜清掃の前に、清掃の要領、注意事項等について説明する。
- ②海浜清掃後に、参加者にゴミ袋と環境チケットを交換する。
- ③受付で環境チケットと海の工作セットと交換し、海の工作教室に参加できる。
- ④海の工作セットを使った工作教室では、地域の航空写真や衛星画像のパネルを使って、山から川、そして海との関係を説明し、川に捨てたゴミが海に流れ、海岸に漂着することを現場で説明して、子供たちにゴミを捨てないことの大切さを教える。
- ⑤海の工作教室で製作した作品と海の工作セットは各自持ち帰る。海の工作セットは、自分で海、山、川等から自然物を集め、工作を行う。

2) 環境チケットの活用例について

図4.9に気仙沼市の環境チケットの運用システムを、図4.10に加世田市の環境チケットの運用システムを示す。

気仙沼市では、商工会議所が環境チケットの運用主体となって海域、陸域を合わせた環境貢献活動を推進し、町の商店等で商品の割引や地方銀行の預金金利の上乗せ等の優遇等の特典も行っている。

加世田市では、同市で定期的に行っている砂像を展示する砂の祭典イベントの出店で、環境チケットにより商品の割引が得られるシステムとなっている。

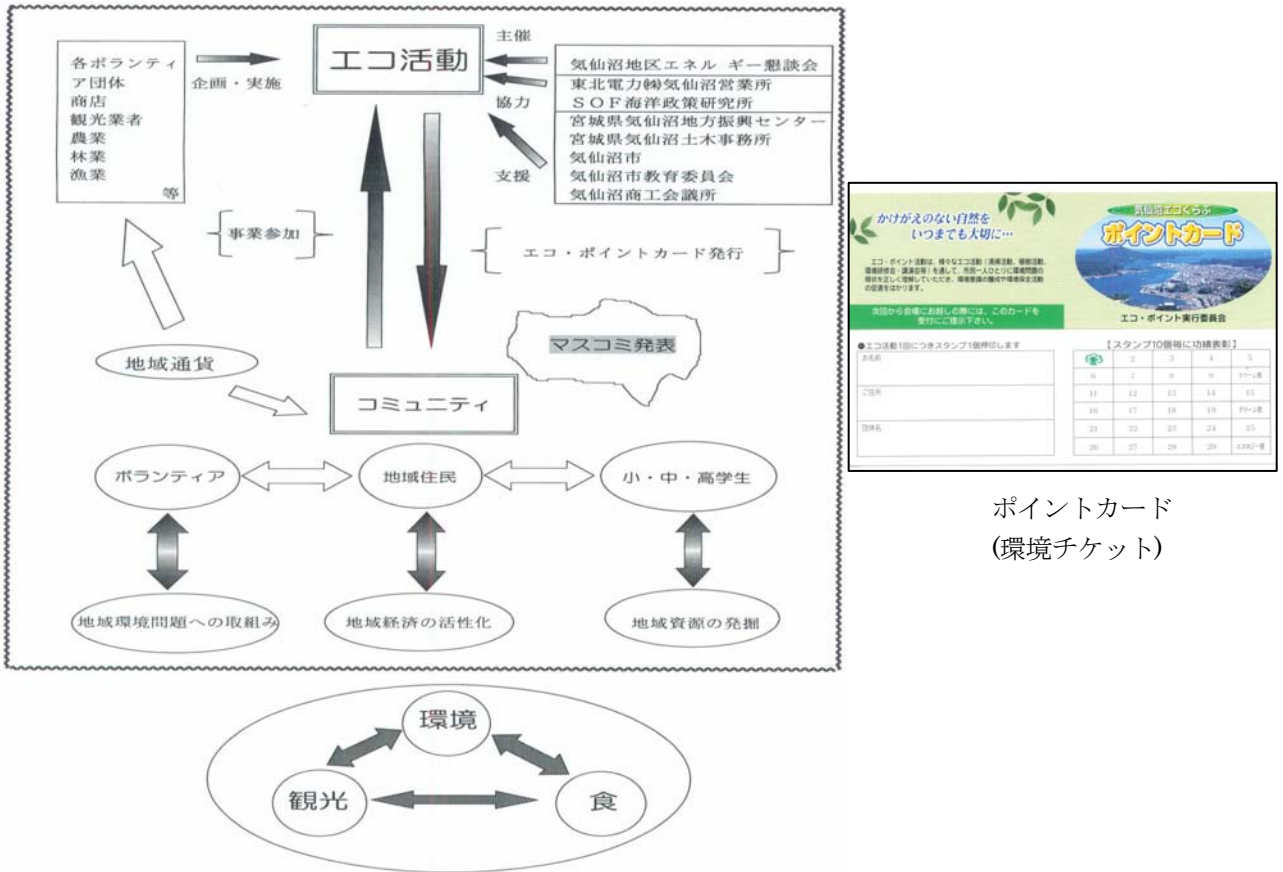


図 4.9 気仙沼市の環境チケット運用システム

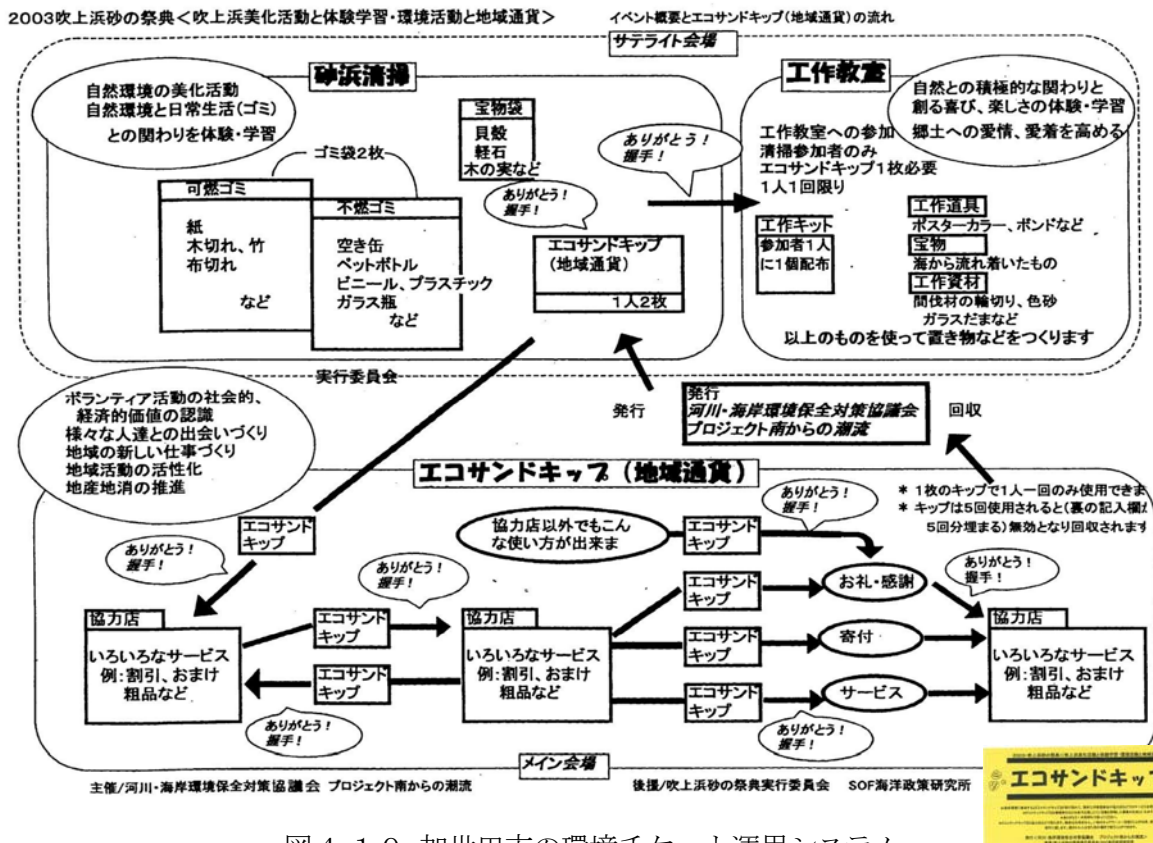
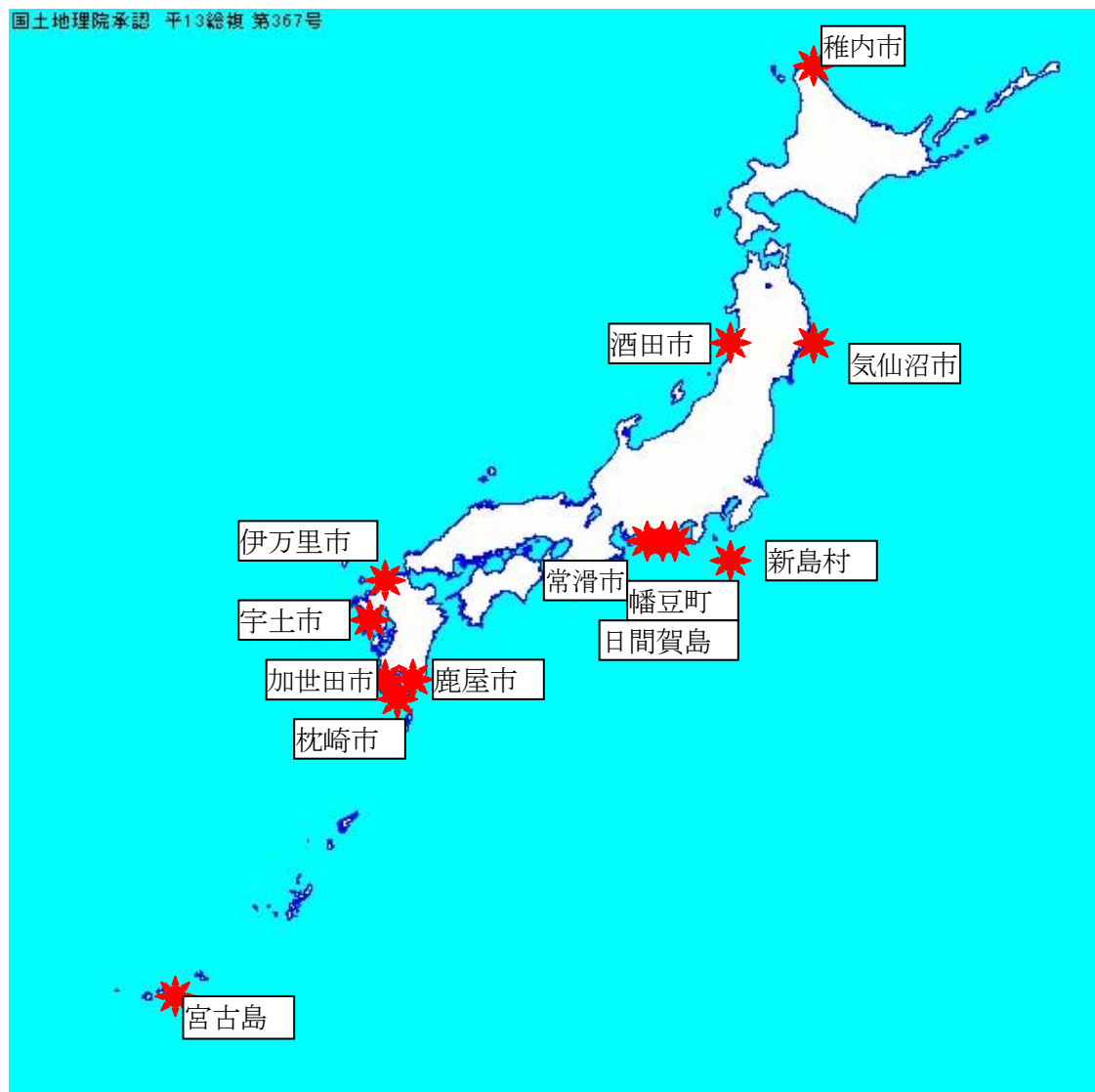


図 4.10 加世田市の環境チケット運用システム

平成14年度にプロジェクトの全体構成の策定を行い、愛知県常滑市多屋海岸においてその実証活動を行った。平成15年度は、海域毎に特徴のある4ヶ所（稚内市、気仙沼市、加世田市、平良市（宮古島））の地域を選定し、「海洋環境貢献活動プロジェクト」を実施、今年度は、日本海側の酒田市と離島地域の東京都新島村、愛知県日間賀島、愛知県幡豆町等で活動を実施すると共に、九州地区では、3ヶ所（鹿屋市、宇土市、伊万里市）においてプロジェクトの説明会の開催と活動を実施し、その後、枕崎市で活動プロジェクトの普及活動を行った。

図4.10に平成14年度から今年度までの3カ年間に実施した活動プロジェクト実施位置を、表4.1に活動拠点の選定条件及び特徴を、表4.2に活動プロジェクト実施場所、主催者、参加人数等を、表4.3に活動プロジェクト説明会開催場所及び参加人数等を示す。



★ 活動プロジェクト実施地域

図4.11 環境貢献活動プロジェクトを実施した活動拠点

表 4.1 活動拠点の選定条件及び特徴

地域			地域の特徴																	
海 域	広域	市町村	地域の特性	海岸のゴミの状態	地域の役割	組織化度合	環境チケット適用の関心度	活動の共通項、連携(ネットワーク)、関心度										活動の取組み状況 (新聞等報道等広報活動)		
								海洋環境	地域通貨	砂丘	鳴砂	リアス式海岸	集積処理技術	川→海	海外ゴミ	観光	教育		地域経済活性化	
オホーツク海	北海道	北海道 稚内市	・漁業 ・コンブ(海草) ・地域通貨 ・教育 ・観光	・船舶、中国、韓国からのゴミ漂着 ・海草漂着(コンブ、アマモ等)	・北海道地域の活動拠点 ・海草ゴミリサイクル技術の実証	・教育委員会、環境NPO、観光協会、自治体、信用金庫、漁協	・子供通貨タラとの協働(環境→地域通貨興味大)	○	○						○	○	○	○	○	・説明会実施 ・子供通貨タラと協働 ・日刊宗谷
日本海側	東北	山形県 酒田市	・観光 ・川と海と港 ・文化、歴史	・日本海のゴミ ・波の荒い海 ・大陸からのゴミ	・地域文化、環境を守る活動拠点 ・日本海側の活動拠点	・地域NPO、自治体港湾組織	・今後の課題	○						○	○	○	○	○		・説明会実施 ・地元港湾事務所協力
太平洋側	関東	宮城県 気仙沼市 (三陸海岸)	・漁業 ・川と海 ・鳴き砂の浜 ・三陸リアス式海岸 ・観光	・河川からのゴミ漂着(葦、ヨシ、雑草海草等) ・リアス式海岸の海洋ゴミ堆積(崖、岩礁等危険地帯)	・太平洋側東北地域の活動拠点 ・海洋ゴミ集積技術の実証	・商工会議所、観光協会、自治体、教育委員会、環境NPO	・市全体で環境チケット適用(ポイント制度)(海浜、商店街、道路等の清掃・整備)	○	○			○			○					・地元組織の立上(商工会議所中心、自治体、電力協力) ・河北新報、電気新聞、毎日新聞
		東京都 新島村	・漁業 ・島嶼のゴミ ・観光	・海外のゴミ ・本州からのゴミ(台風時の河川からの材木等)	・島嶼の活動拠点 ・地域経済振興	・自治体主導 ・教育関係者	・今後の課題	○						○	○	○	○	○		・地元組織の立上(自治体の主導、協力)
	中部	愛知県 常滑市	・観光 ・地域通貨 ・愛知博 ・中部国際空港 ・競艇場	・河川からのゴミ漂着 ・観光客のゴミ ・海藻漂着	・プロジェクトの骨格作り ・中部地域の活動拠点 ・地域通貨組織・海洋教育(カウチサーフィン) ・指導的地域	・環境コンサルタント ・地域通貨組織 ・商工会議所、観光協会、大学、ライフェビング協会、自治体	・海洋環境教室+海の工作教室の創設 ・LETチタと連携 ・公共施設への適用 ・民宿で適用企画中	○	○	△										・説明会実施 ・知多半島、島嶼等周辺地域への広がり ・中日新聞、日本経済新聞
		愛知県 幡豆町	・観光 ・イベント(はずストンカップ)	・観光客のゴミ ・河川からのゴミ漂着	・地域文化、環境を守る ・地域経済振興	・自治体主導 ・観光協会、商工会	・今後の課題	○							○					
東シナ海	九州	鹿児島県 加世田市	・砂丘 ・砂像の祭典 ・きれいな砂浜、観光	・船舶、中国、韓国からのゴミ漂着 ・河川からのゴミ	・九州地域の活動拠点	・商工会議所、環境NPO、自治体、大学	・砂像イベント等で適用 ・市商工会展開準備	○	○	○										・イベントと協働 ・南日本新聞 ・九州海ネットワーク協力
		鹿児島県 鹿屋市	・きれいな砂浜 ・観光	・河川からのゴミ	・大隅半島地域の活動拠点	・自治体主導 ・商工会議所、環境NPO	・今後の課題(試行中)	○	○	○										・説明会、活動試行実施 ・九州海ネットワーク協力
		鹿児島県 枕崎市	・きれいな砂浜 ・観光	・船舶、中国、韓国からのゴミ漂着 ・河川からのゴミ	・加世田活動拠点の協力	・商工会議所、環境NPO、自治体、大学	・自治体商工観光課主導	○	△						○					・説明会、活動試行実施 ・九州海ネットワーク協力
		熊本県 宇土市	・きれいな砂浜 ・観光	・河川からのゴミ ・観光客のゴミ	・熊本地域の活動拠点	・環境NPO、自治体	・民間マリーナ主導	○	△						△	○				
	佐賀県 伊万里市	・きれいな砂浜 ・観光、歴史	・河川からのゴミ	・佐賀地域の活動拠点	・自治体、環境NPO	・公営マリーナ主導	○	△						○						・説明会、活動試行実施 ・九州海ネットワーク協力
沖縄	沖縄県 伊良部町、平良市	・観光 ・きれいな砂浜 ・地域通貨	・船舶、中国、韓国からのゴミ漂着 ・観光客のゴミ・海藻漂着	・沖縄・南西諸島の活動拠点	・環境NPO、観光協会、商工会議所、自治体	・エコツーリズムへの適用(観光振興、島嶼商店、企業、漁協間の連携)	○	○	○						△	◎	○	○	○	・説明会実施 ・宮古新報、宮古毎日新聞 ・宮古テレビ

表4.2-1 活動プロジェクトの実施場所、実施日、参加人数等

(2002年7月～2004年2月)

活動のタイトル	実施日	参加人数 (名)	主催者
1. 多屋区530運動 (愛知県常滑市多屋海岸)	2002年 7月7日	160	常滑市多屋区
2. 海辺の漂流教室 (愛知県常滑市多屋海岸)	2002年 7月14日	120	常滑市青年会議所
3. SKI(ショーコスギ塾) (愛知県常滑市多屋海岸)	2002年 7月20日	60	SKI/ショーコスギ塾
4. まるっとヘルシー多屋海岸 (愛知県常滑市多屋海岸)	2002年 7月21日	500	常滑市多屋観光協会
5. 海とふれあうフェスティバル (愛知県常滑市多屋海岸)	2002年 7月21日	200	常滑競艇場
6. こどもエコクラブ「はまっこクラブ」 (愛知県常滑市多屋海岸)	2002年 7月29日	15	はまっこクラブ
7. 常滑ガールスカウト愛知県第16団 (愛知県常滑市多屋海岸)	2002年 9月1日	60	常滑ガールスカウト
8. 名古屋歯科医療専門学校 (愛知県常滑市多屋海岸)	2002年 9月3日	65	名古屋歯科医療専門学校
9. 親子で挑戦 ネイチャークラブ (愛知県常滑市多屋海岸)	2002年 10月21日	113	常滑市生涯学習課
10. 小田浜の環境を守り自然に親 しむ会(宮城県気仙沼市)	2002年 10月26日	50	十八鳴浜の環境を守り自然に 親しむ集い実行委員会
11. 青く豊かで、美しい海辺をめ ざして(常滑市多屋海岸)	2002年 12月1日	25	愛知県農林水産部
12. 吹上浜美化活動と体験学習 (鹿児島県加世田市)	2003年 5月3～5日	230	吹上浜砂の祭典実行委員会
13. 多屋区530運動 (愛知県常滑市多屋海岸)	2003年 7月6日	160	常滑市多屋区
14. まるっとヘルシー多屋海岸 (愛知県常滑市多屋海岸)	2003年 7月20日	400	常滑市多屋観光協会
15. 稚内市・太田市フレンドシップ 2003(北海道稚内市)	2003年 8月23日	200	稚内市
16. 宮古島エコバカンス2004 (沖縄県伊良部町)	2004年 2月28日	80	宮古エコガイド教育コンソーシ アム

小計 2,438 名

表4.2-2 活動プロジェクトの実施場所、実施日、参加人数等

(2004年6月～2005年2月)

活動のタイトル	実施日	参加人数 (名)	主催者
17. 宮古島エコバカンス2004 (沖縄県伊良部町)	2004年 6月12日	120	宮古エコガイド教育コンソーシアム
18. 発見！酒田みなとの探検隊 (山形県酒田市)	2004年 7月11日	78	酒田港女みなと会議
19. はずストーンカップチャレンジ レース(愛知県幡豆町)	2004年 8月8日	300	幡豆町観光協会、商工会
20. まるっとヘルシー多屋海岸 (愛知県常滑市多屋海岸)	2004年 7月18日	200	常滑市多屋観光協会
21. 日間賀島海の日イベント (愛知県日間賀島東浜サンライズビーチ)	2004年 7月18日	200	日間賀島観光協会
22. 新島の海洋環境貢献活動 (東京都新島前浜海岸)	2004年 11月20日	129	新島村産業観光課
23. 鹿屋市の海洋環境貢献活動 (鹿児島県鹿屋市浜田海岸)	2005年 1月22日	15	九州・海ネットワーク実行委員会
24. 宇土市の海洋環境貢献活動 (熊本県宇土市赤瀬海岸)	2005年 1月23日	30	九州・海ネットワーク実行委員会
25. 伊万里市の海洋環境貢献活動 (佐賀県伊万里市伊万里マリーナ脇)	2005年 1月29日	15	九州・海ネットワーク実行委員会
26. 枕崎市の海洋環境貢献活動 (鹿児島県枕崎市恵比寿海岸)	2005年 1月29日	50	九州・海ネットワーク実行委員会

小計 1,137名

2003年7月～2005年1月までの活動参加人数 合計3,575名

表4.3 活動プロジェクトの説明会開催場所等

説明会開催場所	実施日	参加人数 (名)	主な参加者
1. 京都府網野町、宮津市	2003年 5月22日～23日	15	琴引浜の鳴り砂を守る会及び 天の橋立観光協会
2. 沖縄県宮古島	2003年 6月11日～13日	30	平良市、沖縄県宮古支庁 宮古商工会議所、伊良部町漁 協
3. 北海道稚内市	2003年 6月17日～18日	10	稚内市教育委員会他
4. 韓国、ソウル市	2003年 6月26日～28日	14	韓国海洋水産開発院、韓国海 洋研究院、韓国海洋少年団他
5. 韓国、天安市、釜山市 (韓国の海洋環境保全 活動強化のための 2003年ワークショップ)	2003年 11月13日～16日	30	韓国海洋水産開発院、韓国海 洋研究院、海を愛する市民団 体、ゴミ問題解決のための市民 協議会、韓国海洋救助団他
6. 東京(主催:BG財団: 日本財団ビル)	2004年 2月 5日	60	全国44都道府県市町村教育 委員会教育長他
7. 山形県酒田市 (山形県沿岸域総合利用 推進会議、沿岸域活用 研修会)	2004年 3月 15日	30	庄内総合支庁、鶴岡市、酒田 市、温海町、地域プロジェクト検討 会、酒田港湾事務所、山形水産 試験場他
8. 鹿児島県鹿屋市 市民会館	2005年 1月 22日	15	九州・海ネットワーク実行委員会 鹿屋市、枕崎市
9. 熊本県宇土市 宇土マリーナ	2005年 1月 23日	30	九州・海ネットワーク実行委員会 宇土市
10. 佐賀県伊万里市 伊万里マリーナ	2005年 1月 29日	15	九州・海ネットワーク実行委員会 伊万里市

4) 活動プロジェクトの実施例

平成14年度～平成16年度に実施した活動プロジェクトの例を写真4.11～写真4.22に示す。
図4.11～図4.14に、活動プロジェクト実施後に新聞等の報道に掲載された記事を示す。



清掃作業



清掃作業



ゴミの収集

写真4.11
ショーコスギ塾
実施日：平成14年7月20日（土）
場 所：愛知県常滑市多屋海岸



環境チケットと工作材料の交換



海の工作教室



海の工作教室



海の工作教室



海の工作教室の作品



海浜清掃作業中

写真4.12
小田浜の環境を守り自然に親しむ会
実施日：平成14年10月26日（土）
場 所：宮城県気仙沼大島小田浜



海の工作教室



収集した海洋ゴミ



海の工作教室



海の工作教室終了



海浜清掃終了



海の工作教室



海の工作教室の作品



吹上浜清掃会場

写真4.13
吹上浜美化活動と体験学習
実施日：平成15年5月3日～5日
場 所：鹿児島県加世田市吹上浜



海の工作教室



集積された海洋ゴミ



海の工作ツール、工作材料の交換



海の工作教室の作品



ゴミと環境チケットを交換



海の工作教室開始



終了後の記念写真



北海道稚内、利尻島

写真4.14
稚内市・太田市フレンドシップ 2003
実施日：平成15年8月23日（土）
場 所：北海道稚内市坂の下海岸



海の工作教室



海浜清掃中



海岸のゴミ



海の生物工作教室



海浜清掃中



海の工作材料



海の工作教室の作品



沖縄宮古島の海

写真4.15
宮古島エコパカンス 2004
実施日：平成16年2月28日（土）
場 所：沖縄県伊良部島渡口の浜



海の工作材料



海洋ゴミ清掃作業中



海浜清掃の看板



海の工作教室作製中



海浜清掃終了



海の工作教室



海の生物工作の作品



北緑地公園の会場（雨で海浜清掃中止）

写真4.16
発見！酒田みなとの探検隊
実施日：平成16年7月11日（日）
場 所：酒田北港緑地公園



海の生物工作教室



海の工作教室の説明



海の工作教室



海の工作教室の作品



海の工作教室の材料確保



海の工作教室



活動の了記念写真



海浜清掃の説明

写真4.17
日間賀島海の日イベント
実施日：平成16年7月18日（日）
場 所：日間賀島東浜サンライズビーチ



海の工作教室



海浜清掃



海の工作教室の材料確保



海の工作教室の作品



海の工作教室の受付



海の工作教室



海の工作教室の作品



海浜清掃開始



海浜清掃



清掃後の海洋ゴミ

写真4.18
新島の海洋環境貢献活動
実施日：平成16年11月20日（土）
場 所：新島前浜海岸



海の生物工作教室の説明



海の工作教室



海の工作教室



海の生物工作教室



海の工作教室の作品

写真4.19
鹿屋市の海洋環境貢献活動
実施日：平成17年1月22日(土)
場 所：鹿屋市浜田海岸



鹿屋市浜田海岸



海浜清掃



宇土市赤瀬海岸



海の工作教室



海の工作教室



海の工作教室



海浜清掃中

海の工

写真4.21
伊万里市の海洋環境貢献活動
実施日：平成17年1月29日(土)
場 所：伊万里市伊万里マリーナ脇



伊万里マリーナ脇の海岸



伊万里マリーナ脇の海岸



枕崎恵比寿海岸



恵比寿海岸のコミ



海の工作教室



海の工作教室



海の工作教室



海の工作教室

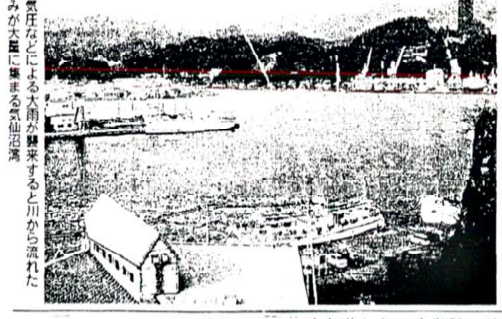
環境対策で財団の支援受諾

気仙沼商議所

海のごみを調査研究 清掃システムなど構築

気仙沼商工会議所は、シニア・アンド・オーシャン財団（本拠地：東京、秋田県松島町）から行方不明だった「海洋及び沿岸域のごみ問題に関する調査研究」事業を受諾し、十五日の常務委員会で報告した。同事業は海のごみ問題を各関係団体と協力しながら調査研究し、海のごみが白濁の原因や生態系、経済に与える影響を明らかにし、財団が解決の糸口をつかち、今年一月、気仙沼を訪れていた財団の海洋政策研究所員が、気仙沼による大雨で大川から気仙沼湾に流出したごみを巡り、気仙沼工業団地に事業の受け入れを打診していた。

海のごみ問題解決に向けた調査は、海と陸域の両面一元化をはじめ、自治体や住民、民間非営利団体（NPO）、企業などの連携が必要となる。財団活動をおもな活動として、ボランティア活動と経済活動を併行して実施する。財団の活動は、海のごみ問題の解決に貢献する。事業は本年度から、四年にわたって継続され、①沿岸域における海のごみの実態調査、②海のごみ管理システムの構築、③海のごみ問題の啓発活動などを実施する。事業の一元化を促進する活動のソフト開発と事業化を進める。



低気圧などによる大雨が降ると川から流れたごみが大量に漂着する気仙沼湾

調査研究は、海のごみが沿岸域などにかかる社会調査し、可能な範囲から実態を把握し、陸域から海域に流れるごみを回収する方法なども検討されている。気仙沼商工会議所の調査研究は、財団の調査研究を支援し、海のごみ問題の解決に貢献する。気仙沼市を含めて全国に力を合わせて事業が推進されることを目指している。

また、気仙沼市の海岸清掃活動も、気仙沼商工会議所から相談を受け、本年度の重要事項に格上げされた。船舶や陸域にも目を向け、海のごみ問題の解決に貢献する。調査研究は、海のごみ問題の解決に貢献する。気仙沼市を含めて全国に力を合わせて事業が推進されることを目指している。



三陸河北新報社
気仙沼支社
〒986-0037 気仙沼市東町1-1
TEL 0226-23-1254
FAX 0226-23-6758
Eメール k.kahoku@chive.ocn.ne.jp
本社
〒986-0827 石巻市下町4-42
TEL 0225-96-0321
FAX 0225-21-1888
©三陸河北新報社 2002

眼鏡の真価は
レンズで
問われます

日本業界 唯一のメガネ
株式会社
武華園堂
WAKUEN DOH
田中前通 24-4188

図4.11 宮城県気仙沼市の報道記事

子どもたちに「自然の教材」

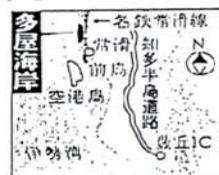
常滑で海洋教育「開校」

中部国際空港(愛知県常滑市)の建設現場を
周りに愛知半島の海岸で、子ども向けに海
洋教育の施設を設ける構想が進んでいる。地引
養魚やカッターなどの体験を通じて海の楽し
さや危険を知らせるだけでなく、活海の現状も
教え、海洋環境を守る大切さを肌で感じてもら
うという計画だ。

GW明けから



常滑市の海岸に、中部国際空港(建設現場)の周りに愛知半島の海岸で、子ども向けに海洋教育の施設を設ける構想が進んでいる。地引養魚やカッターなどの体験を通じて海の楽しさや危険を知らせるだけでなく、活海の現状も教え、海洋環境を守る大切さを肌で感じてもらうという計画だ。



地引き網や ボート体験 ごみ問題にも目

中部国際空港(建設現場)の周りに愛知半島の海岸で、子ども向けに海洋教育の施設を設ける構想が進んでいる。地引養魚やカッターなどの体験を通じて海の楽しさや危険を知らせるだけでなく、活海の現状も教え、海洋環境を守る大切さを肌で感じてもらうという計画だ。

中部国際空港(建設現場)の周りに愛知半島の海岸で、子ども向けに海洋教育の施設を設ける構想が進んでいる。地引養魚やカッターなどの体験を通じて海の楽しさや危険を知らせるだけでなく、活海の現状も教え、海洋環境を守る大切さを肌で感じてもらうという計画だ。

図4.12 愛知県常滑市の報道記事



多摩海岸を清掃する常滑市民ら

地域通貨で海岸浄化

プラスチックや空き缶などごみの漂着に悩む各地の沿岸自治体で、地域通貨を使い、海岸をきれいにする活動の計画が動き出した。海岸を清掃すると地域通貨がもらえる

商工会や観光協会

仕組みで、地元の活性化を狙う商工会などが企画。ほかの地域と通貨の共同利用も模索しており、関係者は「日本中の海岸をきれいになれば」と期待している。

協力者に配布

民宿や遊園地の割引券に

愛知県常滑市の多摩海岸では昨年七月から計八回、地元の小学生と親が浜辺に落ちている空き缶

やペットボトルを拾い集め、海岸の清掃をしてもらう。清掃後に青年会などが開く貝殻や木の葉を使った工作教室が好評で、これまでに延べ千人以上が参加した。今年四月からは、地元の商工会議所や観光協会が協力。参加者に水族館や民宿、遊園地で使える地域通貨「ブルーチケット」を渡す。主催者の一人、鯉江正雄さん(49)は「参加者へのささやかなお返し。環境保全を目標に地元にも一体感が生まれてきている」と話す。

多摩海岸での取り組みを参考に、宮城県気仙沼市も昨年十月、地元の商工会が工作教室付きの清掃を実施。定期的に清掃を行い、海の美化に協力してくれた人に観光施設などで使える割引チケットを配る準備を進めている。気仙沼商工会議所の佐々木正和振興課長(49)は「産業の活性化にもつながり、ゆくゆくは常滑のチケットとも交換できれば」と話す。

こうしたアイデアに乗って定着しない地域通貨の利用を広げようとする試みもある。山形県鶴岡市の特定非営利活動法人「庄内市民活動センター」はサービスマネジメント型の地域通貨「もっけ」を一年前に導入。しかし、参加者は同市の人口約十万人のわずか〇・二%にとどまっていた。代表の仲川昌夫さん(50)は「問題解決型の通貨が成功しやすいとの話があり、定期的に環境イベントに取り組むことで、もっけを知らなかった人にもアピールしたい」と狙いを語る。

地域通貨を研究している経済評論家、森野栄一さん(54)は「海をきれいにする」という同じテーマを掲げる各地域が、通貨の互換性まで検討している点が興味深い。忘れられがちな海のごみという着眼点も面白い、この方式で日本に美しい海岸を取り戻せるか注目したい」と話している。

図4.13 活動プロジェクトの紹介記事



地域通貨「エコサンドキップ」を手に工作教室に参加する子供たち 4日午前、加世田市の新川海岸

加世田市で開かれてい
る吹上浜砂の祭典(同美
行委員会、南日本新聞社
など主催)で、地域通貨
を環境美化に生かす取
組みが行われ、親子連れ

清掃すれば「地域通貨」

砂の祭典 家族連れらに人気

工作教室、飲食サービス利用できます

でにぎわっている。
新川海岸でのイベント
「吹上浜美化活動と体験
学習」。砂浜清掃に参加
すると期間中有効な地域
通貨「エコサンドキップ」
がもらえ、工作教室への
参加資格や会場内の飲食
店でサービスを受けられ
る。いずれも加世田市で
活動する「河川・海岸環
境保全対策協議会」と「N
PO南からの潮流」が財
団法人「シップ・アンド
・オーシャン財団海洋政
策研究所」(東京)の協
力で実施した。
清掃は午前九時と午後
一時の二回で一時間程
度。参加できる工作教室
は輪切りにした間伐材を

素材にビーズなどで飾り
を作る。また、協力店で
は飲食物の一割引や物品
サービスがある。
祭典最終日の五日は
「子供まつり」としてキ
ャラクターショーやゲー
ムのほか光と音、炎の織
りなす「ファイナルファ
ンタジー」(午後八時半
から)がフィナーレを飾
る。

図4.14 鹿児島県加世田市の紹介記事

東北原子力懇談会の地域組織「気仙沼地区エネルギー懇談会」(宮城県気仙沼市、会長＝白井賢志・気仙沼商工会議所会頭)は、地域の環境保全推進に向け、今年度の新事業として「エコ・ポイント活動」を展開する。同活動が、清掃活動の成果を環境保全活動の参加者に対して「エコ・ポイントカード」を配布、スタンプを押印し、その功績をたたえようとするもの。市民一人ひとりが環境問題の現状を理解して、環境意識の醸成や活動の促進を図るのが狙いだ。こうした環境保全活動に「エコ・ポイント」を導入するのは、東北地域では初めての試みであり、今がその活動成果が期待される。

同会の理事長、佐藤弘夫は、エコ・ポイント活動は、地域の環境保全活動の推進、市民一人ひとりが環境問題の現状を理解して、環境意識の醸成や活動の促進を図るのが狙いだ。こうした環境保全活動に「エコ・ポイント」を導入するのは、東北地域では初めての試みであり、今がその活動成果が期待される。

「エコ・ポイント」を評価

東北原子力懇・気仙沼が新事業

④活動実施後、それぞれ、第一号とする予定。将来は、このポイントを、換料していく。写真」を配布し、活動の証としてスタンプ(活動に「エコ・ポイント」を押し印する)一定のポイント(10ポイント、20ポイント、30ポイント)を達成した人はその功績をたたえ、地元紙に氏名を掲載する。

市民の環境保全意識高揚へ



エコ・ポイント実行委員会

今回の取り組みは、気仙沼地域の環境保全活動の推進、市民一人ひとりが環境問題の現状を理解して、環境意識の醸成や活動の促進を図るのが狙いだ。こうした環境保全活動に「エコ・ポイント」を導入するのは、東北地域では初めての試みであり、今がその活動成果が期待される。

図4.15 宮城県気仙沼市の紹介記事

海洋教育の理解求め

B&G全国教育長会議



基調講演を行う土井正三氏

B&G財団が主催する取り巻く問題や、B&Gネットワーク推進事業の財団が推進する「海洋教育」の一環として行われている「育事業」等への理解を導く「B&G全国教育長会議」が、2月28日、東京都府県単位で組織する「B&G全国教育長会議」代表として各市町村の28人の教育長をはじめ、教育関係者が、2月28日、8都道府県単位で組織する「B&G全国教育長会議」代表として各市町村の28人の教育長をはじめ、教育関係者が、2月28日、8

行政に携わる40人が参加した。「地域の海洋環境実態調査プロジェクト」をテーマとする。1月5日は、B&G財団の植田功一理事長が、B&G全国教育長会議の小林一征会長のあいさつに続き、B&G財団の理念と新規事業を説明したVTRが流された。そして、海洋センターの現状と新たなソフト事業の取り組みについて、パネリストとして、土井正三氏、元プロ野球監督の土井正三氏が「青少年の育成に対するスポーツの役割」をテーマに講演を行った。土井氏は自分の子ども時代や、野球との出会い、巨匠会、コーチ監督の経験は、半生を振り返りながら、現代の子ども達に期待するものなど、教育者として、親も厳格な物を使う。絵を描いたり物を作ったりする「海の工作教室

研究所の菅原一善部長が「地域の海洋環境実態調査プロジェクト」をテーマとする。1月5日は、B&G財団の植田功一理事長が、B&G全国教育長会議の小林一征会長のあいさつに続き、B&G財団の理念と新規事業を説明したVTRが流された。そして、海洋センターの現状と新たなソフト事業の取り組みについて、パネリストとして、土井正三氏、元プロ野球監督の土井正三氏が「青少年の育成に対するスポーツの役割」をテーマに講演を行った。土井氏は自分の子ども時代や、野球との出会い、巨匠会、コーチ監督の経験は、半生を振り返りながら、現代の子ども達に期待するものなど、教育者として、親も厳格な物を使う。絵を描いたり物を作ったりする「海の工作教室



パネルディスカッションで意見交換

と、ヒラメの稚魚をベイトボトルで育てるミニ水族館を作る「海の生物工作教室」を実施している。ミニ水族館は特別な装置を手入れは不要で、上手に飼えば、水を換えず数か月は持つという。そして、自らの経験から「学校教育に水辺の活動を取り入れるには、何をテーマに、パネルディスカッションの場が設けられた。コーディネーターは、鹿児島大学の柳敏博教授、パネラーにはB&G全国教育長会議会長で岡山県倉敷市の小

も出された。パネルディスカッションが終了し、休憩をはさんでからは分科会となり、分科会Aは「高齢者の健康支援について」、分科会Bは「水辺活動の導入について」、分科会Cは「海洋センターの利便性向上について」、分科会Dは「現代の青少年が抱える心と身体の問題と課題について」といったように、それぞれのテーマについて意見交換がなされた。その中で、「高齢者の健康支援について」では、「自宅に引きこもって参加しない人、どうすれば参加させることができるか」という問題があげられたが、それに對し、「勝敗がくつもの議論がなされるので、優秀な現場を見た実践が大大会を行ったら成功しそうだ」といったアドバイスなども出された。こうした1日間に渡って行われた議論は、勇躍、ここで出された意見や提案を、各教育長はそれぞれの自治体で持ち帰り、今後の取り組みに生かしていくことになる。

図4.16 全国教育長会議の紹介記事

日刊宗谷

天気予報

今日 (24日) 東のち南西の風、曇り時々晴れ。波の高さ一メートル(降水確率30%最低16度最高19度)

明日 (25日) 南又は南東の風、晴れ時々曇り。波の高さ一メートル(降水確率10%最低15度最高20度)

明後日 (26日) 南西の風、晴れ時々曇り。波の高さ一・五メートル(降水確率20%最低16度最高21度)



ゴミ拾いを行う稚内市と太田市の青少年ら

海を大切に

遠来の群馬
県の青少年
西小中生と清掃

二十一日に「フレンドシップ2003」で来稚した群馬県太田市の青少年と稚内市の西小中の児童・生徒らが二十三日、エコ交流として坂の下の水浴場の海岸清掃や漂流物を使った工作教室を行った。

この取組みは、SOF海洋政策研究所(シップ

が楽しみにしていた工作教室。石や流木など自然の漂流物、貝殻等を使った壁掛け、ペットボトルで魚を育てるミニ水族館作りの作業に取組んだ。

同所では、海洋をめぐる環境問題解決に向けて、「海洋環境貢献活動プロジェクト」として海浜清掃実施などを訴え続けている。道内で同プロジェクトを実施するのは稚内市が初。今回のプロジェクトでは、参加した子ども達に稚内市教委が発行している子ども通貨「タラ」を配付し、それを持っていく子ども達に海の工作教室や海の生物工作教室に参加する資格を与える仕組みで、このような取組みは全国でも珍しいという。また、工作教室の中で作ったミニ水族館は、水道水と塩で作った海水と浄化する石をペットボトルに入れ、ヒラメの稚魚を育てるといった。この試みも全国でも初めて、今後、この工作教室を進めていくうえで稚内市が他の地域へのモデル

図4.17 北海道稚内市の紹介記事

清掃、工作教室楽しむ

海兵清掃 エコバカンス 親子連れら80人が

【伊良部】エコガイドと時を過ごした。教育コンソーシアム(猪澤也寸志代表)主催の「第一回海兵清掃エコバカンス」(共催・シッパ&オーシャン海洋政策研究所)が二十八日午後、伊良部町の渡口の浜で行われた。宮古本島、伊良部島から親子連れなど計八十人が参加し、海浜のゴミ拾いや貝殻を使った工作教室などで楽しいひとときを過ごした。

エコバカンスは、「自然の美しさに感動した観光客が感謝を込めてゴミを拾い、その奉仕に感謝する地元企業などが多彩な特典を協賛する。感謝の循環による環境活動」を旨としている。海浜清掃と海の工作教室など子ども達への海洋環境教育を組み合わせた健康な海づくりプロジェクトを全国各地で展開する同研究所の協力で実施した。次回は四月中旬に下地町前浜で行うなど、今後は二カ月に一回のペースで実施していくという。猪澤代表は「海で遊び、潮風に癒される中で気楽にゴミを拾うことが理想。民間貝殻などを使った工作に取り組み参加者らに伊良部町渡口の浜前の渡口の浜食堂



主体で実施し、環境問題にもつなげたい」と話しを考えたから地域活性化

図4.18 沖縄県平良市の紹介記事

鹿児島

鹿児島総局
TEL 099-222-3151
FAX 099-227-0424
鹿児島市東平石町3-43

鹿屋支局
0994-44-1161

薩摩川内支局
0996-23-3058

名瀬支局
0997-52-0377

指宿支局
0993-22-3427

加治木支局
0995-48-5899

鹿児島アサヒコム
http://mytown.asahi.com/kagoshima/
購読・配達のご用は(7~21時)
0120-33-0843
広告へのご用は
朝日広告社 253-0515
オリコミのご用は
鹿児島 221-5166
FAX 227-1077



清掃活動を通じ 海洋の環境学ぶ 枕崎の児童ら

枕崎市の恵比須海岸と一市の小学生ら約70人が近くの児童館で29日、同海の環境を学んだ。海の

美化活動などを通して、地球環境に関心を持つてもらおうと、海のゴミ問題や海洋環境の調査研究をしているシップ・アンド・オーシャン財団(本部・東京)に委託された加世田市津貫田神の建築士、菊野憲一郎さん(56)が指導した。

小学生らはまず、海岸の清掃をしながら、工作の材料になる貝殻や軽石、波に洗われて丸くなったガラスなどを拾い集めた。同級生ら3人

海岸の清掃をする小学生ら。枕崎市の恵比須海岸で。

と来た別府小5年の白沢優さん(11)は「いろんなゴミがあつて汚れていたら、ゴミを捨てないよう気を付けたい。きれいな貝殻を拾つたので工作が楽しみです」と話した。

このあと児童館に戻り、拾つた材料と、財団提供の松ぼっくりや小豆、ビーズなどを一緒にして魚や人の顔など思い思いの作品に取り組んだ。

帰りには、一人一人におみやげとして、瓶の中に小魚が入つた循環型の「ミニ水族館」が配られた。

地で、選挙演説と言えは、一店を開き、同市長田町に型店舗や安売りの店が進出、毎回選ぶのが楽しみ

図4. 19 鹿児島県枕崎市の紹介記事

4. 1. 3 海洋環境貢献活動プロジェクトの今後

平成14年度に開始した「地域の海洋環境貢献活動プロジェクト」は、今年度まで約3,600名の小中学生・幼稚園生とその父兄を中心に、地域の方々が参加して頂いた。

地域の方々が主体となり、計画の立案や実施等、多くの方々の協力で海浜清掃の実施、清掃の参加者への環境チケットの配布、そのチケットで海の工作セットを用いた海の工作教室を開催し、参加者には大変好評であった。

今年度は、プロジェクトを実施しようとする地域にある工作材料を集めると共に、他の地域で集めた材料を組み合わせ、工作教室の始めに活動を実施してきた他の地域の環境、歴史等の説明を行った。また、一度活動を実施した地域が周辺地域の活動拠点となり、独自で活動プロジェクトが開催できる様、工作教室の道具一式をパッケージ化して拠点地域に貸し出すことを試みた。

海浜清掃と海の工作教室を組み合わせることで、参加者に山と川と海とゴミの関係を分かりやすく説明し、ゴミがどこからくるのか、また日常生活で海を汚さないためにはどうしたらよいかを考える場を、子供達を中心に実践活動を通じて提供してきた。

海の工作教室を活用した海浜清掃プログラムは、一般の人に海に興味を持たせ、地域に海洋環境への貢献活動を広めるための有効なプログラムであった。

本活動プロジェクトで取り入れた環境チケットは、近年各地で運用している「地域通貨」の様に、画一的な決まりを求めず地域で取り入れ安い形態とし、その運用は地域の主体性に任せることとし、既に運用している地域通貨と協働する事も可能である。

本活動プロジェクトが地域で広がるためには、有力な事務局が必要であるが、事務局は地元の生活に密着している商工会や観光協会が主体となり、自治体がそれをサポートし地元の人材を育てることが望ましい。特に最近では、地域の環境を大切に守ろうとするNPO組織が立ち上がっており、その方々が既存の組織と協力し合い、非常に良い関係を作り上げている。

また、事務局に過大な負担を求める様なシステムは、活動を継続的に長く進めることが難しく、環境チケットの利用範囲も、最初は海や海に関係する物やサービスの利用に限定し、徐々に他の分野に広げた方が、海洋に対する意識高揚に役立つと思われる。

海洋環境貢献活動プロジェクトが地方のメディアや新聞などで話題になり、工作教室以外にも、四季を通じて楽しめる海や海辺を活用したプログラムを開発することで、海に対する意識が高まり、継続的な活動につながると思われる。

今後、3年間で構築してきた地域の拠点を大事に育て、更に周辺地域への活動の広がりを期待して、活動拠点地域間のネットワークを構築すると共に、お互いの情報交換を行うための連絡拠点作りを行い、海洋ゴミ問題解決のための海洋環境を守る社会活動システムの普及を図ることと致したい。

4. 2 「ゴミ問題に取り組む地域社会」—循環型の継続的活動を目指して—交流会議

4.2.1 会議の開催日時、場所等

- 1) 開催日時：平成17年 2月25日（金）9：45～17：10
- 2) 主催：（財）シップ・アンド・オーシャン財団 海洋政策研究所
- 3) 共催：日本財団
- 4) 後援：国土交通省、海上保安庁、環境省、水産庁、海守
- 5) 場所：日本財団ビル2階大会議室 東京都港区赤坂 1-2-2

4.2.2 趣旨・目的

四面環海である日本は、海岸線の約57%が人々が親しみ愛する自然海岸であり、岩場や岩礁、崖、砂浜等で形作られた美しい景観を呈している。

しかしながら、その海岸はゴミの放置、不法投棄、河川からの流入や漂着ゴミ等によりあらゆる種類のゴミが散乱し、自然景観を損ない、海を訪れた人々に失望感を与え、憩いの場を奪っている。そればかりか、海洋生態系や漁業資源等にも大きな影響を与えている。

海洋ゴミ問題は、放置することができない重要な問題ではありますが、その解決には多大な費用・労力・時間が必要であると共に、人々の海洋ゴミに対する意識の向上が必要とされている。

（財）シップ・アンド・オーシャン財団では、競艇交付金による日本財団の支援を受けて、自治体、環境ボランティア、一般市民等、地域の人々が相互に協力しあい、四季を通した海岸の清掃活動を恒常的に続けるための活動システム（環境チケットを取り入れた地域社会活動と海洋環境教育を組み合わせた地域の海洋環境貢献活動プロジェクト）の調査研究を進めてきた。

この度、上記プロジェクトに直接携わってきた地域の方々が一堂に会し、お互いの情報交換や活動のネットワーク作りについて討論を行い、地域におけるゴミ問題社会活動システムの構築を目指し討論を行う。



交流会議発表メンバー

杉浦明巳 下津公一郎 森野栄一 大塚万紗子 猪澤也寸志 梅田敏文
 菊野憲一郎 小山恵子 寺島紘士 前田宗佑 鯉江正雄 菅原一美

子ども地域通貨「タラ」の活動について：梅田敏文



新島の海洋環境貢献活動：前田宗佑



加世田、枕崎市の海洋環境貢献活動：森野栄一



女みなと会議「発見！酒田みなとの探検隊」：小山恵子



多屋区530運動、まるっとへルシー多屋海岸：鯉江正雄



来れば来るほど美くなる宮古島の海辺：猪澤也寸志



気仙沼エコポイント活動：佐々木正和



日間賀島「海の日イベント」：杉浦明巳



九州・海砂トリック（鹿屋、宇土、伊万里）：下津公一郎



4.2.3 開 会 寺島紘士 (SOF 海洋政策研究所所長)

海洋政策研究所の所長をしております、寺島でございます。本日は、年度末に向けて大変お忙しいところ、また東京では珍しく、朝起きてみたら雪が積もっていたというような天候で、お寒い中、沢山の皆様方にお集まりいただきまして、大変ありがとうございます。

私ども、シップ・アンド・オーシャン財団は、3年前になりますか、「人類と海洋との共生」ということを目指しまして、海洋政策研究所を設立致しました。海洋と沿岸域の総合管理と持続可能な開発、というようなことを目的としまして、政策研究をいたしております。その成果に基づきまして、社会に色々な提言をしたり、或いは、海洋白書やニューズレター、そういうものを発行し、更に社会にとって非常に重要だと思われるような、海洋関係の情報を提供するというをやっております。

本日は、海洋ごみの問題を取り上げまして、地域社会がこの問題に、どうやって自発的かつ継続的に取り組んで行くのかということについて考えるために、このような会議を開催致しました。ごみ問題というのは、大変大きな問題であります。

どうも、元を辿ると今日の経済、生活様式というのが、大量生産、大量消費、そしてその後に大量廃棄ということが付いてくる訳でございまして、そういう生活様式をいつまで続けているのか、というような問題を含んだ大きな問題であり、かつ、ひとりひとりに非常に密接に関係してくる問題でございます。

御承知のように、日本は非常に細長い国でございまして、四面海に囲まれておりまして、海岸線が3万5千キロにも及ぶという国でございます。その美しい海岸が今、ごみの放置、或いは不法投棄、或いは河川からの流入、そして海からやって来る漂着ごみ、そういった事に悩まされております。こういうごみは、人間社会が排出する、そういうごみだけではなくて、山の手入れが悪いために、放置された木材が大雨のときに流されて海に出てくる。或いは海底から大量の海草が打ち上げられる。いろんな問題がございまして、こういった海洋ごみの問題というのは、なんとかしなければいけない問題でございますけれども、なかなかその解決のためには大変な費用がかかる。或いは、労力と時間がかかります。

夏の海水浴場なんか行きますと、非常にきれいなんですけど、シーズンが終わって同じ所に行ってみると、大量のごみが散乱している、というようなこともよく見かけます。地元では、これを何とかしたいという風に思っておりますけれども、簡単に手が出せないというのが現状ではないかと思えます。

そこで、私たちの海洋政策研究所では、競艇交付金によります日本財団の御支援を受けまして、海洋ごみに悩まされている地域の皆さんが自分たちの問題として、このごみ問題にどう継続的に取り組んで行ったら良いかというような視点で、この3年間研究をしまりました。その結果、こう言っ

ていいかどうかあれですが、シップ・アンド・オーシャン・モデル、或いは SOF モデルというような活動モデルを開発してみました。それに基づいて、現在全国十数ヶ所で実際に取り組みが行われております。

その取り組みにつきましては、今日お集まりの、全国各地からお集まりいただいた方々に、これから夕方までいろいろな発表をしていただくこととなりますけれども、この SOF モデルと云いますのは、地域が一体となって、ごみ清掃活動を支援する手段ということで、環境チケットというような機能をそこに活用して、地域の善意といいますか、そういったものを環境チケットというような仕組みを通じて表すものです。

もうひとつは、小中学校での環境教育と結びつける。そして、その手段として海洋工作教室、というようなものをやってみる、というようなのがエッセンスではないかと思うんです。言ってしまうと非常に簡単なんですけれども、なかなかノウハウ、結構なノウハウが要ります。

そういうことで、地域の皆さんに非常に魅力的なものとして受け入れて頂いたのではないかとこのように思いますが、まだまだこれを、地域の実情に合わせてどういう風にやっていくのかという問題は、これからの問題でございます。ただ、私も、この活動をやってみて感じましたことは、非常に地域の、この問題に対する関心が深い、強いということでございます。それだけ皆さん、言葉はあれですが、困っている、なんとかしなきゃいけないと思っている、ということではないかと思えます。

そう言う意味で、非常にごみ問題と言うのは重要な問題だなということを痛感している次第でございます。

本日は、先程も司会のほうからお話しましたが、全国でやっている方々の中から、9 地域の方々に実際に、この会場にお集まり頂いております。こういう形で一同に会するのは初めての機会でございますけれども、どんな結論、姿勢感がそこから出るか、大変楽しみにして居るわけでございます。

尚、本日は、最近皆さんも御存知だと思いますけれども、日本の海を守るために、海上保安庁と日本財団が音頭を取って、組織化致しました、そして今、全国で活動を始めております「海守」の活動についても、この海洋ごみの問題と非常に関係が深いということで、合わせてその情報を共有し、また今後の活動に参考にしていただくというようなことで、企画をしておりますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

以上、ちょっと長くなりましたが、開会にあたりまして、私の御挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

4.2.4 挨拶 曾野綾子（日本財団会長）

日本財団の曾野綾子でございます。今日はありがとうございます。主催者、後援者、それから、個人としてもお集まりくださいまして、沢山の方々に、こう言う問題でご参加頂くことに対する感謝と尊敬の念を新たにいたしております。最初から自分のことを喋って、申し訳ないんですけど、私は戦前、一人娘で育ったので、みんなにさぞかし甘やかされて育ったんだろうと言われたんですけど、私は母に、徹底して「汚い物を掃除しろ」ということから仕込まれたんです。ですから、洗濯は自分の事は勿論。昔は洗濯機はございませんから、洗濯板というので、こうやって、お風呂の中で洗ったりしたんですけども。その他に、台所のごみというのは、その頃はビニール袋ございませんから、捨てるの下に受けるバケツがあるんですね。そのバケツが、夏なんかですと、2日、3日経つとイヤな匂いがしてくるのを、母は全部それを所定の、門の外のまたごみ箱って、タールを塗った木箱があったんですけど、そこに捨てさせて、そこを全部洗って、なんか知らないんですけど、子供だから…。殺虫剤みたいな、父の吸ってた煙草を水に溶かした物だった気がするんですね。そういう物をかけて綺麗にしろということです。

お手洗いの掃除と言うのは、小学校2、3年からキッチリ言われました。私は、母にその時に、汚いものを綺麗に出来れば、怖いものは無いと教わったんです。ちょっとオーバーかも知れませんが、なんとなく、その母の、母的田舎のお婆さんの信条というのはよく分かるような気が致します。

それから、こちらに伺いましてから、私はある意味でのわがままというか、ある意味での教育と言う意味で、この若い人々とか、それから中央官庁の若手の方、マスコミの方と一緒に「世界の最貧困を見る」という旅行を何年もいたして参りました。そして、アフリカが主な目的地なんでございますけれども、そこで「貧困とは何か」。簡単なんです、定義は。貧困とは、今日食べるものが無いことを言うんでございます。ですから、日本人にはひとりも、何と申しますか。貧困な人がいない訳でございます。

それでアフリカに参りまして、まあ私は学者でもございませんし、小説書きで、極めて視覚的、視野の狭い、浅い人間なんでございますけれども、貧困はどういう形で見えるかと申しますと、私の子供の頃の、考えられておりました貧困と言うのは、物が無いことでございました。着る物が無い、食べる物が無い、住まいが無い。一部本当なんでございますね。ですから、アフリカでは、食べる物の無い人というのがいっぱいおりまして、私はそこで、こうやるのが乞食のサインだということを習ったんで、今、練習しておりますけど、私がやると憐れっぽさに欠けまして、もう少し、みみちくやらないといけないんでございます。

しかし、アフリカの多くの都市で驚きますのは、アフリカの光景のひとつ。それは、ビニールの袋が雪のように舞ってるんです。それが黒いビニールだったり、薄いものなんですけど、誰も掃除をせ

ず、道端のあらゆる所に堆積しているんでございます。一方で、ビニールは、マダガスタルの田舎では買おうと思っても、ございません。紐は1メートル幾らで古ひもが売っておりまして、ミルクを配りますとお父さんたちは破れた帽子を、麦わら帽の破れたところを握って、そこに受けるべきミルクを入れて貰って帰ります。ビニールがないんですが、よくわからないんですね。

それから、アフリカでも南アメリカでもそうなんですが、着る物が無いという人は余り無くて、膨大な量のシャツを持っています。ただし、それらは破れて、洗っていないで、畳まない。意図的にしないのです。ある時、着まして、ある日嫌になると脱ぐらしいんです。それをぽんと捨てるとう牛のうんこのように脱ぎ捨てたTシャツがあっちにもこっちにも。数で言ったら、わたしなんか、足元にも及ばないくらいの数を持っています。それらを合理的に活かして使うと言う教育の貧困なんです。いろんな貧困があります。そういうものを見せていただいて、こういう仕事というのが、非常に日本の、当たり前のことかもしれませんが、日本人が長いこと教育を受けてきて、国土を真面目に律儀にやろうとしている。世界に誇るべき1つの姿だと思うのです。この頃は、若い者が怠けているようでして、冬の海岸などを掃除なさるのがどんなに寒いかと思うのですが、若者のしつけもしていただいて。

その上にごみと言うのは物流、ある流れを意味しておりまして、ゴミそのものは沈黙しておりますが、その結果は能弁なものであると思います。物流を示すと同時に、もっと国際感のある危機的なものですか、そういうことにさえ、ゴミの分析がお役に立つのではないかと、そこまで図々しい期待をさせていただいております。どうぞ、この企画を長続きさせていただき、同時に日本人の誇るべき教育機会としてもお使い頂きますように、皆様をお願いいたします。今日は有難うございます。

4.2.5 講演

1) 「海洋ゴミと海守の活動」 山田吉彦 (日本財団海洋グループ長)

私は、千葉の稲毛と言う東京湾沿いの町で生まれまして、一時期、太平洋岸の九十九里という町に引っ越ししたりしたのですが、幼稚園に入る頃、稲毛の海岸の埋め立てが本格的に始まりまして、それまで、稲毛と言うのは遠浅の潮干狩りをやる、どちらかという、見た目には綺麗でない海岸だったのですが、そこで、毎日のように浜に出て、アサリをとって、あるいはいろんな貝類、ヤドカリやかにをとって、遊んでいたのですが、小学校に入る寸前、海岸には行ってはいけないという、先生からの指導があって、トタンの塀が海岸線にダーッと建ち始めて、それから、6—7年ですか、私も何回も引っ越したので、6—7年経って行ってみると、2キロほど、埋め立てが進んでいて、その先にもままではなかった白い砂浜の海岸が現れていて、残念ながら、そこには生き物はいなくて、もともと知っていた浜とは全然違う海が現れていました。

海と言うのは、見た目がきれいなのがいいのか、或いは、それとも本当の海の姿が体感できるのがあるのか、そう言うことも含めて、皆様のお知恵と実体験を含めて、お教え頂けたらと、私も今日参加できることを楽しみにしていました。日本と言う国は、海岸線が33,889キロほどある、非常に広い国です。日本の国土面積は世界で59番目という余り大きな国ではありませんが、排他的経済水域、実際に日本の海と言える排他的経済水域は世界でも6番目の国で、非常に海を日本の国と考えた場合には、世界でも大きな国の部類に入ってくるかと思えます。昨今、日本という事を考えるときには、国土、陸地の面積ではなく、海洋民族と言われる日本ですので、この排他的経済水域も含めて、日本と言う国を考えるべきではないかと感じております。

日本の中には島が6,852個ほどあります。これは、周囲が100メートル以上の物を勘定しますと6,852個になるということで、島ということを見ると、島の生活と言うのは独自の文化と言う物を作っております。日本と言うのは広くて、いろんな文化を持った国であると言えるかと思えます。

その中で、最初に話しましたが、日本人はいつの間にか海と言うものを忘れてしまったのではないかと。今日お集まりの皆様はどちらかという海沿いで生活されて、或いは海とともに暮らされている方が多いかと思えますが、なかなか、一億数千万の日本人の中には、海を忘れてしまった方も多いのではないかと。その方々に出来るだけ、海のことを考えて頂く時間、機会を作っていただきたい、というのが私たちの願いです。

そこで、今日は「海守」ということで話をさせていただきますが、まず、日本を取り巻く海の現状を簡単に話させていただきたいと思えます。昨今、いろんな、海に関する問題が、新聞等で取り上げられているかと思うのですが、まず、皆様御記憶もあると思えますが、ナホトカ号の油汚染の事故。これは、日本の沿岸には非常に老朽化した古いタンカーなどが数多く、まだまだ来ております。そし

て、日本の沿岸と言うのはとくに冬の時期には荒れて、海難事故が起こりやすい環境になっている、そこに事故を起こしかねない整備不良船や、古い船が数多く来ているという状況があります。そこで起きたのがナホトカ号の重油流出事故です。これと同じように北朝鮮或いは中国、中にはモンゴル船籍の船が日本にやってくるというケースが最近多いのですが、船員の技量が低かったり、もしくは、船の整備状況が悪かったりして、事故を起こすケースが多くなっています。ただ、事故を起こしても、皆さんが御存知のように、本来は原因者負担の原則と言いまして、事故を起こした人間が対処しなければならぬ、というのが国際ルールです。ところが、その対処する能力を持たないような船が数多く日本に来て、事故をおこし、放置されている。

この写真にあります、チルソン号という北朝鮮の船なんですが、座礁したまま放置されております。船員は、確か20万円ぐらいの罰金を払って、もう北朝鮮に帰ってしまっているのですが、船だけが残されている。この船を撤去するためには、六億円ほどのお金が掛かるわけですが、この船の六億円は誰が払うのか、とこのチルソン号の船会社はとっくに倒産してしまっていて、撤去の費用の支払い能力は持たない。また、保険もさほど入っていませんので、この撤去には地方自治体と、皆様がお支払いになった税金が使われている。そういうのが日本をとりまく海の現状です。

また、北朝鮮の工作船の写真がありますが、必ずしも日本を取り巻く海の安全と言うのは守られているわけではない。昨年、中国の潜水艦が日本の領海を侵犯した事件がありましたが、本来ですと国際法に基づいて適切に対処しなければいけないところが、まだまだできていない、と言うのが実情です。

そこで、私どもが考えましたのが、まず、事故を未然に防いだり、或いは、おかしいことが起こったときに、適切に対処するには、海に携る、あるいは海に興味を持ってくださっている人々が力を併せて、海にもっと目を向けて、海に何かおかしいことが起こったら、連絡を取り合おうじゃないか、という体制を作る必要があるのではないかと考えました。

日本の海を守って頂いているのは、現在、海上保安庁の方です。海上保安官は総勢で12000人ほどいらっしゃいますが、3万5千キロに及ぶ海岸線を守るには、残念ながらまだまだ、人員が不足している。また、とくに日本の海岸は、美しい海岸線を持つ反面、非常に入り組んでいたり、複雑な形容をしているために目が届かないところも多くあると思います。そこを海で暮らす、或いは、海に関わりを持つ日本人すべての目で海を見て行こう。そして、おかしいことがあったら、連絡をとろうじゃないか、ということを考えました。それが、海守です。海守という言葉は、日本財団、海上保安庁、海上保安協会、漁業関係者の団体の方、観光関係者の団体の方、或いはライフセーバー等、海に関心を持ち、海の安全を守ってくださる方々が集まった場で、フリーディスカッションの中から生まれた言葉で、この海守という名前を付けました。

実際、現在の海守会員は2月22日現在で55,666人、これが地域的な分布ですが、やはり、

北朝鮮の工作船が発見された九州或いは対馬等、外に向けて他国と隣接している九州や北海道、あとは拉致事件等が頻繁に起こりました中部地域等が会員として参加して頂いている方が多い場所です。残念ながら、都市部の関東・関西、なかなか東京の都会で住まわれている方は、目を向ける場所がいろいろ夜のネオンからいろいろあるものですから、なかなか海に目を向けていただけないのか、参加していただける方が少ないのが現状です。また、東京で募集をかけようとする、なかなか経費が掛かるものですから、都市部では広告を出すにも、非常に私共には手に負えない金額が掛かってしまうので、今、御紹介、御紹介で参加して頂いている状況です。出来ましたら、皆様もお声がけいただきまして、海守への参加を促していただきまして、と考えます。

海守の活動ですが、基本的には海を守る情報ネットワークということで、海におかしいことを発見したら、まずは118番、海上保安庁の緊急電話へ電話をしてもらいたいということをお願いしております。今は、まだまだ110番と違っていて、海上保安庁の118番というのはなじみが薄いのか、有効に機能している確率というのは、低くなっております。平成15年の5月1日に運用されたのですが、3,859,671件通報がありました内、なんと、99.3%が間違い電話、いたずら電話で、これでは、受ける方の海上保安官の方、どれだけ、強い精神を持っていても9割9分以上がいたずら電話であると、受ける方もなかなか気持ちが持ちません。いつも万が一に備えて、海上保安庁は常に体制を取らなければいけない、これは非常に厳しい状況です。このために海守と言う制度は、この118番通報に対して対応するにも有効な制度となるのではないかと、考えております。というのは、118番通報をするときに海守会員のナンバーを言っていただきますと、私共は海守会員の個人情報を海上保安庁と共有しております。海守の会員の情報であれば、100%近く、正確な情報であろうと、海守会員からの情報であれば、海上保安庁は即座に対応していただくという体制を取っております。

現在、海守が立ち上がりましてからは97件ほどの情報が寄せられまして、これがすべて、有効で正確な情報でありました。とくに静岡の海岸で船が火災を起こしているところを海守会員が見つekまして、連絡し、海に飛び込んだボートの方を救助することができた例とか、或いは東京湾内で木材が流れているのを発見した海守会員が通報していただいて、速やかに木材を回収することで、他のボート等が事故に遭わないですんだケースとか、或いは中には心ないマリレジャーをする人が子供達が海水浴を楽しんでいるそばをジェットスキーで走りまわっている、危険だというような通報を頂きまして、海上保安庁の方に注意をしていただくということで、子供たちが安心して海で楽しめるような環境をつくる、そのような幅広い範囲で海守の方の通報というのが、行われています。

私も実際に一回通報をしたことがあるのですが、そのときは博多湾でランチクルーズの船に乗っておりましたところ、船に乗っていた女性のお客さんが「あ、海が七色できれいだ」、と。知らないと言うことは怖いことで、「海が七色で綺麗だ。虹のようです。」って言って騒いでいたんですね。それで

見たら、一面油が広がっていて、七色に光るぐらいだと大分薄くなってきているんですが、それで通報して、海上保安庁の方で、処理剤と攪拌作業で回収していただきました。時間が速かったということもありまして、どの船が漏らしたということも、ほぼ分かりまして、船側には嚴重注意、ということをしていただきました。海守活動では、どういう状況が海にとって危険なのかということも含めて、広めていく必要があるということ、そのときに実感致しました。

今、海守活動がどのような活動をしているのか、ということ、昨年の時系列で並べたものです。海洋汚染関係ではJEANさん、クリーンアップ事務局さんと協力していただきまして、海岸の清掃のリーダーとなる方の養成講座というものを行っております。いままでには、石川県で20名、鹿児島県で48名、兵庫県淡路島で52名、福岡で15名の方の参加を頂きまして、キャプテン講座のほうを開催致しました。また、流出油災害ボランティアリーダーということで、ナホトカ号のような事件のときに集まっていたボランティアの方にどうということをしていただくのが適切なのかということ、御理解いただくための、流出油のボランティアリーダーの養成講座というもの海上災害防止センターの協力を得まして過去3回、述べ90人の方にご参加頂きました。この流出油災害ボランティアリーダーなんですが、実際、ナホトカ号の事件の時に数多くのボランティアの方に参加頂きまして、海岸の油除去に携っていただきました。しかし、ボランティアの方々の中には、実際に海の知識、油の知識なしで参加された方もいまして、実はボランティアの方々が参加されたあと、街の中がどう言う状況になったかということ、余り御存知ない方が多いようです。皆さんの靴の裏には当然油が付きます。油が街中に広がってしまいました。そのために街中を油の処理剤で清掃しなければならない。

その油がまた、海に流れる。で、また、油処理剤というのは、基本的には安全なものを使っているのですが、それに対する、漁業関係者の方のアレルギーというものも出てきます。そういう知識が無くボランティアに参加し、活動することは危険である、ということも含めて、どのようにボランティアに参加していただくことがよいか、ということ、理解いただくために、ボランティアリーダーの養成講座というものを開いております。フランスで、ビスケ湾で数度油汚染の事故がありまして、そのあと、ボランティアがどういう活動をしたのか、私、現地に調査に行った事があるのですが、そのとき、行政の方がボランティアというには、フランスの行政が今求めているボランティアは知識を持って参加していただく方、もしくは知識を持った方に従い、ボランティア活動・行動をとって頂ける方というのに限定したという話でした。というのは、街中が同じように油まみれになってしまったというのが、過去にあったらしくて、それを教訓としまして、ボランティアにも知識と責任を持っていただくということ、フランスでは考えていったようです。それに学びまして、日本でまた、油災害の大きな事故が起こった場合、ボランティアの方には適切に動いていただいて、より効果的な活動が出来るように、ということで、リーダーの養成講座を開催しております。海上保安、安全に対する活動をより理解していただくために、海上保安研修というものを行っております。これは海上保安庁の

各管区本部ごと開催しております。すでに五管区で5回、述べ280人ほどの参加者のかたに入っ
ていただきまして、海の安全がどう守られているのか、あるいは海洋汚染をどう阻止しているのか、
ということを実際に海上保安官の方の口から聞いていただきまして、広く知っていただくような活動
をしております。

これは、私共にとっては意外だったのですが、一般の方からの興味が非常に高く、毎回毎回、定
員以上、中には定員の2倍以上の方にご参加頂いていると言うのが現状で、今まで280人の参加な
のですが、お申し込みは千人を遥かに越えております。毎年、数をこなしていき、出来るだけ多くの
方に現場を知っていただきたい、と思っております。また、知っていただくことが、海上保安官の方々
の活動の励みにもなっているようですので、どんどんこの事業も進めて行きたいと考えて
おります。

少し毛色が変わるのですが、進水式の見学会というものを開いております。これは、福岡、高松、
尾道、比較的都市部にある造船所で、船の進水式をご覧いただきまして、海に少しでも親しんでい
たごうという事で、企画しております。これも私共の予想を越えて、今、過去5回述べ実数で200
0人を超える方、一回ごとに400人が参加し下さっています。だいたい、これを平日にやるケ
ースが多いのですが、400人ほどの方が御来港いただきまして、進水式を見ていただいています。中
には、アメリカンスクールの子供達が来たり、地元の小学生・中学生たちがお父さん、お母さんの仕事
を見る機会がないということで、お父さん達の作った船を見るように、地元の小学校の方がいらして
いただく、というようなことが、行われております。これも、今後、少しでも広がるように多くの造
船所にお声がけをして、進めています。最初は、やってみるまでは、造船所側も、今忙しいから、勘
弁してくれ、とか、安全が守れないから、ということで、なかなか、対応していただけなかったの
ですが、実際始まると、御来場される方が、作ったルールを守ってくださり、このラインから中に入ら
ないで、という皆さんよく守ってくださる。今の子供達って、そんなに馬鹿でもないし、だらしな
くもないな、というのが、この進水式で、良く分かりました。みんなきちんとルールを守って、そ
して、皆さんからよく感想文などを頂くのですが、意外に私達が思っているよりも感受性が強く、こ
の船は世界中に繋がっている、というような絵を描いて送ってくださったり、一生懸命働いている造
船所の職工さんの姿を描いてくださるなど、思った以上に、この進水式の反応と言うのがよくて、私
共非常に予想以上の成果が上がっている、というように感じております。

また、海を見守るセミナーというのがあり、昨年福岡でやりました行事ですが、福岡の場合は、海
と文化と生活と、すべて海を中心にして、海は様々な活動に関っているということで、地元の海岸清
掃のボランティア活動をされている方や、・・・島の方に話をさせていただいたり、あるいは、海上災害
防止センターの方、海上保安庁のOBの方に参加して頂いて、総合的に海の話をしていただく、市民
セミナーを開催致しました。このときも参加に対する募集をかけましたところ、定員を遥かに越える

御応募を頂きました。また、海守の集い、と言う形で、比較的やわらかい行事も企画しております。これは、全漁連さんの御協力をいただきまして、昨年船の科学館の廻りで秋刀魚を食べる集いを開いたのですが、秋刀魚を中心に魚を食べる集いを開いたのですが、このとき、海守の会員に声をかけたところ、スタッフ側は70名のボランティアが参加していただきまして、作るほうも魚を焼いたりするのも海守の方でやっていただきました。広く、海に親しんでいただくことがまず、何よりである、ということで、このような海守の集いを開いております。来年度、今年の4月以降は、神戸を始め、いくつかの地域からこの海守の集いをやってもらえないか、というお声かけをして頂いておりますので、ことしは、東京だけでなく、他の地域にもお伺いして、進めていきたいと思っています。

今日の話に、最も近くなって、ゴミの問題に関しましては、クリーンアップキャンペーン養成講座というものをやっております。これはJEANさん、クリーンアップ全国事務局の御指導とアドバイスをいただき、石川・鹿児島・淡路・福岡述べ4回に亘り、135人に参加いただきました。このクリーンアップキャンペーン要請講座というのは基本的にはゴミの分類、海岸に流れ着くゴミを減らすためには、なぜゴミが出てくるのか、という原因を究明しなければいけない、ということで、ゴミの種類、数のデータを集めながら海岸清掃をしていこうという、そして、一回のゴミ拾いだけでは、なかなか、一回のゴミ拾いをしてしてもまた、ゴミが集まってしまう、というのが現状だと思います。そのためにはゴミの原因となるものを解明して、原因に遡り、海岸にゴミが出ないようにしていくということ学ぶために分類、そして、原因を解明するようなキャプテンになるようなセミナーを開催しております。

なかなか、海岸に流れ着くゴミというのは、清掃するだけでは、解決しない問題です。というのは、海岸の汚れるゴミの7割から8割は陸域起因、陸上から流れ出たものが一旦海に出て、それが流れ着く、その繰り返しで、ゴミを拾っても、風が吹いたり、波が来るとまた溜まってしまいます。その繰り返しです。それをどうしたら、海岸にゴミが流れ着かずにすむか、という事になりますと、陸上にまで、或いは川の上流にまで目を向けなければいけない、とそのためにはどこから出てきたゴミなのかということ認識して頂かなければならない。そこで、ゴミ拾いを進めておりますと、意外というか、まあ当然のことなんです、多いのが漁業関係ゴミ、漁業者の方が捨てられた発泡スチロールの破片、発泡スチロール製のトラ箱でありましたり、浮きであったりするわけなんです、漁業者の方が出すゴミが非常に多い、ということもゴミ収集の分類の中で出ております。このデータを漁業関連団体にフィードバックしましたところ、非常に反応も良く、「自分達も注意しなければいけない、自分達の漁場であるのだから、自分達が守らなければいけない」ということで、漁業関係団体の方も直接的に活動を開始していただいているようです。

現在、このクリーンアップリーダー研修と併せまして、モニタリングというものをしております。これは、特定の海岸におきまして、毎月ゴミを取ることで季節要因、いつ、どのようなゴミが集まる

のかという事を調査しております。リセットと言いまして、一度きれいにゴミを取り除いた後に、毎月、或いは季節毎にどのようなゴミが集まってくるのか、その分類を、そして、ゴミ、例えば缶ジュースですと、どこで作られたものなのか、ということ調査致しまして、分類をして、何が原因であるのか、ということ解明し、原因に対してのアプローチ、ゴミを減らすようなアプローチをしております。ですが、なかなか、ゴミ拾いのイベントと言いましても、ただ、ゴミを集めるだけでは、ボランティアの方々も集まっていたきにくい状況にあります。そこで、ゴミ拾いに併せて、少し勉強していただく機会や、少し楽しんでいただける機会を作りまして、モニタリング調査をやって頂いております。とくに淡路島の場合ですと今、毎月やっているのですが、参加して頂いている方は家族ぐるみで、浜辺で楽しむ機会とゴミ拾いを併せた形で活動して頂いております。中には、夏のときにはバーベキューをして、そして、ゴミ拾いに参加される方ですから、きれいにあと始末をして、帰っていただく。そういうことを実際楽しみながら、海と接し、活動していただくということが広めていけたら、日本の海というのはどんどんいい方向に向かっていくのではないかと考えております。

今後の活動なんですが、日本財団では海守を中心に海上保安庁と協力を致しまして、今年の夏は、日本中の海岸で海上保安庁がゴミ拾いに協力する、あるいは海上保安庁とタイアップして行うゴミ拾いの会場で統一のフォーマットでどのようなゴミが、どのような原因によって、海岸に流れついているのかを調査する活動をしたいと考えております。そこで、昨年も JEAN さんの方で、223の会場で調査をしていただき、データを発表していただいているのですが、これをまた、もっと数多く、日本中を取り巻く状況で、日本の海のごみというのがどのような状況になっているのかを、正確にインパクトのある方法で、出来るだけ多くの方に知っていただきたいと、このような調査を行う予定にしております。

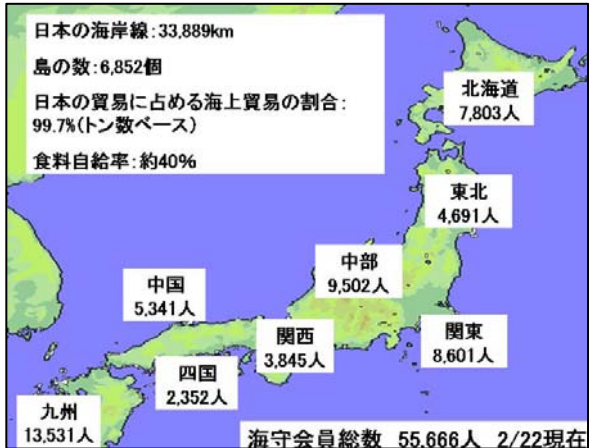
また、地域毎に活動されている、今日ご参加いただいている皆様に、お帰りの際で結構ですので、もしも御自分の町ではこういうことをやってみたい、また、自分達のところでは、こういうゴミに対する考え方が、というようなアイデアがございましたら、日本財団、或いは海守まで御連絡いただきましたら、地域地域の特性を生かした形で御協力或いはアドバイス、お手伝いをさせていただきたい、と思っております。今日は少し、取り止めもない話になってしまった感もありますが、御静聴いただきありがとうございます。今後とも宜しく願い申し上げます。

海洋ゴミと海守の活動



2005年2月25日
日本財団
 The Nippon Foundation

海洋グループ長 山田 吉彦



日本の沿岸域の安全




- ・ 放置船チルソン号(左上)
- ・ 北朝鮮工作船(左下)
- ・ ナトカ号事件のボランティア(右上)

海を見守る情報提供ネットワーク海守



海の情報提供ボランティア「海守」募集。

118番通報の現状

○運用開始(平成12年5月1日)
 から平成17年1月31日までの状況

項目通報数	件数	割合(%)
・ 船舶海難関係通報	7,274件	0.2%
・ 人身事故関係通報	3,955件	0.1%
・ 海難関係以外の通報	14,108件	0.4%
・ 間違い電話等	3,834,424件	99.3%
・ 合計	3,859,761件	100%

海上保安庁HP参照

海守による118番通報実績

(平成17年2月22日)

区分	件数	累計
船舶海難	1	4
人身事故	0	6
情報提供	警備	0
	環境	0
	航行安全	0
	その他	0
総計	1	97

2015/02/25 海洋ゴミと海守の活動

日本財団 The Japan Foundation

海洋汚染の現状(平成16年)

	平成16年	平成15年	前年比
油による汚染	270件	382件	-112
油以外による汚染	104件	146件	-42
赤潮	51件	43件	+8
合計	425件	571件	-146

うち、

- 油による汚染270件のうち
 - 船舶からのもの 177件
 - 陸上からのもの 27件
 - 排出源不明のもの 63件
 - その他 3件

2015/02/25 海洋ゴミと海守の活動

日本財団 The Japan Foundation

海守の活動実績

活動名	場所	日時	人数	協力
カーブアップキョウコン養成研修	石川	2003/6/21-22	30	金沢工業大学動物研究室、協立のこ海草ふれあいセンター
カーブアップキョウコン養成研修	鹿児島	2003/9/27	48	鹿児島大学水産学部産性研究室
海上保安活動研究会	横浜	2003/11/8	77	第三管区海上保安本部
通水式(船と講演会「博多湾のふし」)	福岡	2003/11/26	423	福岡造船㈱、(社)日本中小型造船工業会
流出油災害ボランティアリーダー養成研修会	横浜	2004/2/7-8	42	海上災害防止セク、(社)日本海難防止協会
通水式	福岡	2004/5/7	310	福岡造船㈱、(社)日本中小型造船工業会
海上保安活動研究会	北九州	2004/5/16	54	第七管区海上保安本部
カーブアップキョウコン養成研修	津路	2004/5/6	52	JEAN(カーブアップ全国事務局)、(社)県内海運地保協会
カーブアップキョウコン養成研修	福岡	2004/7/18	15	JEAN(カーブアップ全国事務局)
通水式	高松	2004/7/19	606	西田造船、(社)日本中小型造船工業会
通水式	福岡	2004/7/22	426	福岡造船㈱、(社)日本中小型造船工業会
海を見守りセミナー	福岡	2004/7/23	219	海フェスタふくおか実行委員会、朝日新聞社
海上保安活動研究会	神戸	2004/7/25	84	第五管区海上保安本部
海守の集い	石狩	2004/8/22	130	第一管区海上保安本部、札幌海洋少年団、韓東洋建設地
流出油災害ボランティアリーダー養成研修会	横浜	2004/9/18-19	23	海上災害防止セク、(社)日本海難防止協会
海上保安活動研究会	新潟	2004/9/26	40	第九管区海上保安本部
通水式	尾道	2004/11/1	267	尾道造船㈱、(社)日本中小型造船工業会
海上保安活動研究会	福宮	2004/11/7	95	第二管区海上保安本部
海守の集い	東京	2004/11/14	80	全国海業協同組合連合会、海上保安庁、船の科学館
流出油災害ボランティアリーダー養成研修会	横浜	2004/11/13-14	26	海上災害防止セク、(社)日本海難防止協会

2015/02/25 海洋ゴミと海守の活動

日本財団 The Japan Foundation

海守の活動

流出油災害ボランティアリーダー養成講習会



開催回数:3回
開催地:横須賀
参加人数:延べ90人

油流出事故時、ボランティアが活動する環境を整えるため、油防除に対応できる基礎知識を持ったリーダーを養成するための講習会
協力:(独)海上災害防止センター

2015/02/25 海洋ゴミと海守の活動

日本財団 The Japan Foundation

海守の活動

海上保安研修



開催回数:5回
開催地:各管区海上保安本部
参加人数:延べ280人

海上保安庁の施設見学や海上保安に関する講話を通じ、海上保安業務への理解を深めるための研修会
協力:各管区海上保安本部

2015/02/25 海洋ゴミと海守の活動

日本財団 The Japan Foundation

海守の活動

進水式見学会



開催回数:5回
開催地:福岡、高松、尾道
参加人数:延べ2,039人

日本人の暮らしを支える船を身近に感じられるよう、船の誕生を祝う儀式「進水式」見学会を実施
協力:(社)日本中小型造船工業会

2015/02/25 海洋ゴミと海守の活動

日本財団 The Japan Foundation

海守の活動

海を見守るセミナー



開催地:福岡
参加人数:219人

海と日本人のつながりや日本の海が抱える問題を多くの人に知ってもらい、海を守る重要性を考える市民向けセミナーを開催
協力:海フェスタふくおか実行委員会 ほか

2003/02/25
海洋ゴミと海守の活動

日本財団
The Japan Foundation

海守の活動

海守の集い



旬の魚を味わいながら日本の海について考える「海守の集い」

開催地: 東京
参加人数: 900人以上

協力: 全国漁業協同組合連合会、海上保安庁、船の科学館

2003/02/25
海洋ゴミと海守の活動

日本財団
The Japan Foundation

海守の活動

クリーンアップキャプテン養成研修



開催回数: 4回
開催地: 石川、鹿児島、淡路、福岡
参加人数: 延べ135人

ゴミの種類、数のデータを集めながら行う海岸清掃を企画運営するリーダーを養成する研修

共催: JEAN(クリーンアップ全国事務局)


2003/02/23
海洋ゴミと海守の活動

日本財団
The Japan Foundation

海洋ゴミの問題点

清掃だけでは解決しない
漂着・自然分解しないゴミ

海洋生物への被害
誤飲・誤食、釣り糸の絡まり



2003/02/23
海洋ゴミと海守の活動

日本財団
The Japan Foundation

ゴミの種類と量について

2003年秋のクリーンアップキャンペーン 漂着/散乱ゴミ調査結果

回収個数と順位

順位	品目	個数
1	タバコの吸殻、フィルター	76,140
2	硬質プラスチック破片	75,759
3	発砲スチロール破片(1cm3未満)	46,494
4	プラスチックシートや袋の破片	46,290
5	発砲スチロール破片(1cm3以上)	40,881

全調査員数 17,516人
全調査会場数 223箇所
採取総合数 536,879個
一人当たり採取数 30.65個
集めたゴミの重さ 24,866.24kg
調査した水際の長さ 45,251m

JEAN(クリーンアップ全国事務局)
クリーンアップキャンペーン2003
REPORTより抜粋

2003/02/25
海洋ゴミと海守の活動

日本財団
The Japan Foundation

ゴミ問題解決に向けて

- モニタリング手法の開発
- 季節変動
- 地域ごとの特徴

↓

- 手法の統一
- 誰でも参加可能

2003/02/25
海洋ゴミと海守の活動

日本財団
The Japan Foundation

海守によるモニタリング調査への取り組み



集めたゴミの分別 (鹿児島)

ゴミの数と量を調査 (淡路島)

うみもり
海守
日本財団
The Japan Foundation

2) 「海洋環境と環境チケット」 森野栄一 (ゲゼル研究会代表)

みなさんこんにちは。3年くらいでしょうか、海ゴミに取り組む活動は各地で自発的に行われて来ました。SOFさんのご協力を得ながら成果をあげつつあるかな、という状況に来ていると思います。

私自身の、このような活動への取り組みに関心を持つきっかけというのは、全国各地で地域の経済活性化、町おこし、村おこし、そういう相談をよく受けてきました。そのなかで、人々のいろんな取り組みが行われて来たわけです。今に至るも全国何処に行っても、自分の住む地域の活性化。どうすれば活性化するのか。あるいは町をどうおこしていけばいいのか。どういう風な個性的な町を作っていったらいいのか。そう言うことに対する関心というのはものすごく高いです。

そのなかで見を投じて来て気が着いたことは、やはり日本人の気持ちが大きく変わってきているなあというのが1つあります。

どう言う風に変わってきているかと言うと、昔から言われていますが、日本語には仕事をするということに2つの言い方があります。仕事と稼ぎです。仕事というのは、公の為に自分がすることが仕事で、金銭の報酬がある訳ではありません。「仕事に行く」というのは公の為、地域のために何かをする、という時の言い方。自分のプライベートな利益の為にするのは、「稼ぎをする」、「稼ぎのために何かをする」と言う。日本人は江戸時代からこの2つの言葉を使い分けて地域社会で生活をたてて来ました。

だから、稼ぎが少ないと家のかみさんに叱られる。仕事に出て地域の消防団の活動をする。そうしたことで、稼ぎが無いからと言って家で文句を言われることは無かったわけです。ところが最近、稼ぎがないことをやってもしょうがない、という気持ちが一方で支配的ですが、他方ではそれだけじゃダメだなあという気持ちが日本人の心の中に随分と芽生えて来ました。

先程出てきたように、ボランティアの活発化というのも、そうです。ボランティアというのは日本語ではありませんけど、無償で行う行為を言うわけです。これをしたから幾らよこせというのはボランティアでは無い。そういうことを、多くの人が躊躇無く、するような気風が出てきました。日本語で言えば、ボランティアというのは「仕事をする」と言うことだろうと思います。ことさらカタカナ語を使わなくてもいいのかな、という気もします。そういう気持ちが出てきた。

他方では、相変わらず「私」優先の気持ちというのも根強い物があります。各地方の自治体さんに相談されて行くことがあります。まだまだ私優先の人も多い。例えば、自分の家の前の道路に雑草が生えてきた。そうしますと役所は何をしているんだと、役所に苦情の電話をしってくる人がいるんだそうです。草刈をしると。自分は税金を払っているんだから、行政が家の前の草刈ぐらいして当たり前だろうという考え方なんでしょう。

何から何まで尻を持ちこまれても、行政は十分な対応は出来ません。自分の家の前に草が生えてい

たら、自分が出て行って刈れば良いだけの話なんです。そうして、わが国の地域社会は、どこでも公の仕事というのは、皆が出て行って、草を刈ったり、農業用水路の水草を刈ったりしたわけです。水路は自分のものではありませんが、そこに「仕事」として出て、水草を刈るということもしました。

戦後60年、ずっと経済成長が続いてくる中では、やはりわが身の利益優先。「稼ぎ」優先で来ました。自分の勘定の中で、損が立たないのが一番良い。ゴミ問題は典型です。最近、家電リサイクル法というのが実施されました。行政の清掃局は持って行ってくれないわけです。メーカーに連絡して処分してもらおう。お金を取られます。皆さんの家の近辺でも増えたと思いますが、軽トラックで家電ゴミを集めに来る人が増えてきました。幾らですか？と聞くと、メーカーより安い金額を言う。そういう人達はどうか処分しているかと言うと、誰も見ていない山の中へ行って捨てます。違法投棄です。自分の計算上は儲かります。

しかし、違法投棄をされたゴミは誰かが片付けなければいけない。公の勘定では赤字が出ます。公から、自分のプライベートな勘定に金を移している。ゴミも、規制を強めれば人がそれを守るかと言うと、そうではない。規制を強めれば闇にまぎれて違法で捨てる行為が増えてくる。それは人間の了見の問題だと言う、教育の強化も必要でしょうが、しかし他方でそういう風に人間の気持ちが自分の刺激の方へ振れすぎてしまうような仕組みというのも工夫して行く必要があるのではないか、と思います。

多くの共通の意識の流れとして、公に対する、何か貢献しなければ自分にとってプラスにならないというのが理解されてくるようになったと思います。昔は皆が分かっていたことです。公共というのは、公を共通にするということです。別のいい方では、公同。公を同じくするという言い方です。最近、公共という言い方が支配的になってきました。公同という言い方もしておりました。公を同じくする仲間たちとして生活を同じくする自覚。これが、昨今のボランティア精神の勃興にも寄与しているのではないかと同時に、これを重視しなければ、実は「稼ぎ」、つまり、私の利益においても損をするという自覚が出てきたと思います。

地域の経済活性化と言う時に、私共はよく言うんですが、商業とは何かと言うと、近江商人の教えの通り、「三方良し」でなければならぬ。売り手良し、買い手良し、世間良し。世間にとっても良くなければ、商業という自分の利益を追い求める活動も上手く行かない。世の中に支持されなくては、私の利益を追求することも支持されず、利益も上がらない。

昔は、日本人がよく知っている二ノ宮尊徳という人は、商業というのは、売り手が売り手の事ばかり考えて、買い手のことを考えないと損となって帰ってくると言う事を言っている。公にご奉仕するという考えがあつてこそ、自分の利益もたつ。

戦後を考えてみますと、地域振興と言った時に、無残な状態があるわけです。商店街はシャッターを閉じ、昔は華やかだった駅前に人影を見ず、地域の経済が疲弊している。歩いても楽しくなく、生

活に不便ばかり感じる地域社会になっている。何とか地域の経済を振興したい。という時に、昔良かった時はどうだったかと考えてみればすぐ処方箋は出てくる訳です。

例えば、戦後地域社会を作るときに、社会的に大きな役割を果たしてきたのは、郡部であれば農協の活動も大きかったと思います。生活の仕方、家計のやりくりの仕方から始まって、多くの知恵を提供してきたし、取り組みもしてきました。都市部であれば、地域の事業者たちの貢献は大きかったです。私は子供の頃、工場地帯に住んでいましたが、子供たちが御輿を担いで歩いていくとき、一軒一軒その工場に入っていくんです。そうすると、工場で職員が子供たちにジュースを出してくれたりする。そういう形で地域のお祭りへの支援、交流がごく自然にありました。そう言った中で、地域の地場事業がなりたっていたわけです。

ところが、いつの間にか経済の動きは強いものが勝つ、という激烈な競争の中に入っていきます。地域の商業もそうです。そうすると、どれだけ地域に貢献しているかなどということは考慮されず、消費者も1円でも安ければ良いというお店に買いに行くようになります。そうして、地域社会がだんだんと痛んできて、その極みを今迎えているということではないでしょうか。

そうすると、そこでもう一度、自分たちが暮らしている地域社会、その公という物を、自分たちが何かそこに取り組んで行かなければならないんじゃないか。地域の振興ということを考えた中で、色々な取り組みに出会います。そうして気がついた事のひとつが、海ゴミ等に取り組んでいるようなボランティア活動、社会貢献活動というのが、日本の社会でもあちこちに出てきた。同じひとつの地域でもいくつも見られるようになってきたという実態です。つまり、海岸のある自治体であれば、海の清掃を始めたボランティアが出てくる。そうすると、社会貢献活動をしている人達をどうやって、地域の人間は支持していったら良いのか。或いは町作りと言ったときに、どういう関係を付けて行ったら良いのかということが問題になってくるのです。

とりわけ、本日のテーマである海に関して言いますと、町興しと言っている時に、それを強調している人達は何処から町を見ているかと言うと、町の中から町を見えています。しかし、海岸のある自治体には沿岸漁民の方もいます。漁民の方は、海から町の変遷を見えています。町が寂れるということを見からの眼差しで見えています。

海守の話がありましたが、陸から海に向ける眼差し。多くの、町作りという場合には町の中から町の中を見えていました。そうして、何とかしなければいけないと。どうすれば地域経済が活発化していくような町作りに繋げられるのかという問題をたてかたでした。

しかしそこから段々と視野が広がっていったのです。多くの所で、町作りを考える人達は海にも眼差しが向くようになりました。同時に山にも向くようになりました。それは私達が住んでいるのは、大概は都市部に住んでいる人が多いです。しかし、都市というのはそれだけによっては成立っていないと言うことに気がついて来るのです。町作りと言いますが、その町だけで成立つわけではないので

す。都市というのは、膨大な後背地を必要とします。それはどう言うことかといいますと、まず、食べるものの事で言えば、農業との関連で近郊農業が必要です。更に、今は交通が至便になってきていますので、私達の口に入るものには、地球の裏側で出来た物もあります。それは海を渡って、船が重油をたいて日本に運んでいるのです。そういう広がりも有ります。さらには、山も必要です。山は単に林業の場所だけでなく、水を涵養する場所でもあります。

私は現在、横浜市に住んでいますが、横浜市水道局の水は山梨県の道志川の水が曳かれています。子供の頃は、横浜港で船に積む水は世界一美味しいと教えられました。それは今日まで続いています。それが、自治体の合併騒ぎのときに道志村が横浜市と合併協議会を設置しようと申し出ました。私は多めに賛成しました。横浜市は道志村に合併してもらって、道志市になればいいんだと。なぜそう思ったかと言うと、道志村の人間だって地元の経済を発展させたいです。ゴルフ場を作ると言う計画を以前出しました。ゴルフ場には農薬が蒔かれます。それが、水に溶けて流れます。それを横浜市民が水道局の水として飲むというのは堪らん、と多くの人が反対しました。それをしっかり、かの当地人は覚えているわけです。ゴルフ場開発の話はなくなりましたが、横浜市と言う都市に住んでいる人たちは、自分たちの後背地である、水道水を提供してくれる山に対する想像力を欠いていたんです。そして、「私だけ」の関心。自分は農薬が入っていない美味しい安全な水を飲みたい。その利害だけを主張した。主張された方はどうでしょうか？そんな事を言うんだったら、山の中に来て住めば良いというだけの話かもしれない。しかし、君達の所はゴルフ場を作るなよ、と言うわけです。つまりそこには、想像力のあり方が欠けています。しかし人間が、そういう後背地に気付く、というのにはきっかけが必要です。

今日の新聞にありました。中国が大型のマグロ漁船団を増やすという。ところが、マグロを食べてみれば、都市の、マグロの握りが食べられる生活は日本の遠洋漁業に依存しているわけです。勿論海外からも買いつけています。養殖もしています。しかし、日本の遠洋漁業がマグロ、カツオ漁船が太平洋やインド洋へ出かけて行って獲っています。今、本当に獲れないそうです。格段に長時間仕事をしないとイケない。延縄を海に投ずるのに 20 時間。次の日にこれを巻き上げるのに 13 時間。そして次の日にまた 13 時間。3 日間で 46 時間、これだけ過酷な仕事をせざるを得ないほど追い込まれている。それでも、マグロの漁獲量は減っています。私達は都市の生活を、環境を維持しながら持続出来るのか。ずっと継続して、成立っていけるような仕組みが必要です。それが持続可能性ということです。

しかし、私達はマグロが食べられなくなるでしょう。環境と共存しながら資源が減らないようなかたちで漁獲を上げて行く、そういうマグロ漁業をするために、日本は船を減らしたりしています。ところが、減らしても他所が増やしてとにかく世界中でマグロを獲り尽くすのが目の前に来ているわけです。そうすると、それも私達が都市での生活を考えると段々に視点が広がって行くことであろうかと思えます。人々の、公の中身の広がり、関心の広がりというものが出てきていると思えます。

特に今日のテーマであるゴミというのは、一番人間にとってきっかけとなりやすく、示唆的です。私達の生活が最終的に、ゴミと言う形で流れ着きます。以前は都市の川はゴミが投げ捨てられ酷い状態でした。それは、流れて海に行きます。そして海ゴミになる。そこで、ゴミをきっかけに見ていくと、里山から里地へ経て里、海に至る。私たちの生活圏の特色と言うのが一番表れていると思います。ゴミを、分別するというところに取り組んだ所が多いと思います。それを通して見えてくるのは、私達の生活の姿、有様そのものでもあります。それを循環型と言っています。ゴミを通して何に気がつくかと言うと、循環の意義です。

農業でも、ゴミを通してみれば直ぐ分かるのですが、海岸のゴミに小さなカプセルがあります。これは、日本の農業の現実を象徴しています。マイクロカプセルと言うのですが、これはゆっくり効いていく肥料が入っています。田んぼや畠に蒔く。肥料そのものを蒔いて、一気に効いてもしょうがないので、遅効性と言ってゆっくり効いてくるような形の肥料をやります。それが効き、農産物が出来ますが、その後のカプセルが川に流れ、海に出てくる。多くの人がそれを見ても何が何だか分かりません。砂の一種ぐらいにしか見えません。そういう形で農業をすることが、一方であります。他方では、化学起源の肥料を使いたく無いという農業者も出てきている。そう言う人達は堆肥作りから取り組み、しっかりとした農業をやって行きたいという気持ちがあります。

湘南海岸にはサーファーの人がいます。彼らは海のゴミを掃除しています。渚で海と触れ合うという人は海のゴミに心を痛めています。ゴミを清掃しているんだから、海草も上がるに違いない無いと農業者が海草を貰いに来ます。しかし、有機肥料に使う、堆肥の中にその海草を入れるわけには行きません。ひとつ、ひとつ分別するのは大変です。実際は無理だと諦めて帰っていきます。

しかし意欲的な有機農業を推進したいと言う農業者はやはり、諦めきれません。日本の近世を見れば、例えば千葉県の上野九十九里。あそこは鰯が沢山取れると九十九里浜にだーっと並べてホシカを作った。ホシカってのは鰯を干したものだ。これは大阪のホシカ問屋等を通じて日本全国に配られて行きました。畑に投げられ肥料となるんです。なぜ、海の物、海のミネラル分を陸に返さなきゃいけないか。大きな必要性があるんです。循環の視点です。

鮭が産卵で川を遡上します。そうして卵が産んで子供が生まれて、また川を下って海で大きくなって帰ってくる。帰ってきた親は産卵が終わると死ぬわけなんです。それを熊が食べたり鳥が食べたり人間が採って食べたりします。そうして糞になって陸地に吸収されて行きます。鮭が海に流れ出たミネラル分の、陸への戻し手になっているんです。

化学肥料を農業に使い始めた昔にこういう話があります。古代ローマは大きな半島を持っていました。古代ローマの食料の2/3を提供していたのは、実は北アフリカの植民地、領地でした。ここは沢山の作物が出来ました。ローマという都市に食料が運ばれて行く。ローマ人はそれを食べ、うんこにしてそれを川に流す。地中海に流れていく。食料は、農産物を通して土中の窒素、リン酸やカリ、色々

な微量元素があります。こうした物は私達の食料の生産に必要不可欠です。しかし、それがどんどん生産して行くと地味が痩せて行きます。段々、農産物が取れなくなってしまいます。

ローマ帝国が崩壊した理由は沢山ありますが、その1つになるか分かりませんが、土地の生産力の低下というのがあります。そうすると、近代に入ってきてその様に土地の生産力が低下するんなら、化学的な手法で失われたものを作り、化学肥料として土の中に入れてやれば良いじゃないかと言う発想が出てきます。これが、化学肥料が登場する基の発想です。

わが国で言いますと、江戸時代には化学肥料というのはありません。ですから、海に流れた物をもう一度、陸に戻して行くということは、海草や鰯を干したものの、海の産物をもう一度畑に戻してやることによって、生産力を回復したり上昇させるという工夫が必要だった。

江戸時代には、農薬と言うものはありませんでした。それでも農薬の役割を果たすような物は使われておりました。それは、クジラです。クジラの油などで、植物の汁を吸うような害虫に対してはクジラの油が呼吸を止めて殺すということで使われていました。多くの海の資源が陸の産業活動に役に立てられていました。しかし今日、そう言う関連が失われています。有機農業を志した農業者が海岸に海草を採りに行っても、くれる人がいない。更には海のゴミを通して気付くのは、農業も酷い状態ですが、海ゴミが象徴するのは日本林業の壊滅的な状態です。

枝打ちをして、ちゃんと手入れをしていけばあんなに花粉は飛びません。しかし手を入れられずほっておかれると、杉も生物ですから種の存亡の危機を実感します。そうすると沢山花粉をつけて生き延びようとしてます。これが手入れをしていけばそういうことは無いわけです。

日本の国有林は別にして、私有林を考えると、山林地主さんというのは殆どが山の手入れが出来ないような御高齢に達しています。70代、80代という方が多いです。不幸にも亡くなられたりすると子供さんが相続します。お子さんは大概都会に出て、山仕事なんかしない。そうすると、自分には山があったはずだが、一生に一回か2回見に行く人もいるそうですが、何処だか見当もつかない。そういうところで、山の手入れが出来なくなっているということは、手入れに人が入らない。入らないと言うことは、人目がないということ。山への眼差しがない。何が起こるかと言うと、違法投棄する人が、建設機械を持ちこんで道を勝手に作ります。穴を掘って、医療ゴミなどどんどん捨てます。捨てたところで逃げます。

山の手入れが出来ない、林業は成立たなくなっている。林業をやるには長い時間が必要です。最短で30年。山から伐採してきて、杉が1本幾らするか。3千円にもならないそうです。そしたら物凄い大赤字です。手入れは出来ないし、出来なくなる。稀に手入れをしてる林を訪ねると、大概70歳以上です。しかし、その山の手入れをしても、金銭で報われることはもう無い。

市場に出しても儲からないから、出す人も少なくなる。買い手は、当てにならないから市場は余計に疲弊します。衰退します。日本の国産材のマーケットは機能していないところが多いのではないかと。

買うほうはいつも、望んだ量が、望んだ価格でいつも手に入る外材を手当てする方が良いですから、そちらを買います。山はどんどん荒れます。

山から流木倒木の類が流れます。増してや、昨今の異常気象で台風が来たりすると山の木が沢山倒れます。誰も片付けません。最終的には海が受け皿となります。

ゴミを通して、私達が生活している日本の山、里、海の関連した状況が見えてくるわけです。私達が生きていく公の在り方として、やはり少しは何かして行きたい。何か出来るのではないか。という取っ掛かりとして、ゴミ問題ということに取り組んで来たわけです。

そういう時に、問題はいくつかあります。地域興し、村おこしと言ったって、地域に行けば分かりますが、「やってるのは暇人がやっているんだ」、「やる事が無いからやっているんだろ」と言う人もいます。

ボランティアで、「仕事」としてやっていきたいという時でも、どうしても長続きさせないことがあります。長続きさせる工夫も必要かなど。そういう時に、そう方法はありません。ひとつは金銭的な報酬があること。金銭的報酬はあげません、ボランティアだから。すると何をあげるかと言うと、非金銭的な報酬をあげるということ。誉めることもひとつ。多くの人は喜びます。気持ちで返して欲しいと言う事もある。そうすると事は長続きするということもあります。

そこで環境キップという仕組みを導入したらどうだろうか。何かボランティアの仕事をしてくれたら、お礼として感謝の気持ちをチケットで表す。子供じみた他愛無いことで、人が動くものかということになりましょう。しかし、環境キップというのはあと一工夫あります。社会貢献をした方に差し上げるわけです。誰が差し上げるか。そういう取り組みをしている団体が差し上げます。しかし、そういう取り組みをしている団体がどこからそれを手に入れるかと言うと、「ありがとう」と渡すだけは感謝状です。これを使えるようにするのが大事ではないか。

例えば、地場の事業者さんがいます。この環境チケットを何枚持ってきたら、うちでは5分安くしてあげるよと言う割引券として受け入れます。そうすると、僅かな利幅の中でも5分を公に譲ることによって、自分の売上が出ます。例えば、気仙沼では、環境キップのポイントが貯まると、地場の信金、信組に持って行くと預金をするときに、預金利率をサービスしてくれる。それは、環境キップの使い道があるということ以上に、信組、信金さんから見れば、地元の人がお客さんになってくれて、預金をしていただけるということなんです。

預金をした人は、僅かではあるが地域社会に良いことをしたら、そういう報酬が出たという事になります。信組、信金さんも事業が拡大します。そして、地場の信組、信金のような金融機関さんがそういう仕組みに参加すると、次にどういう事になるかと言うと、地元のボランティアに参加した人が預け入れた預金は、地元の事業者さんの、事業資金等々に貸し出されて行くわけです。地元の産業の振興に繋がって行くわけです。

たかだか、ちょっとした子供の遊びと思えたゴミ拾いの取り組みが、巡り巡って地域の事業の振興にも繋がっていくという効果が期待できるわけです。象徴的なのは、この気仙沼のエコポイントの場合には、気仙沼に進出してきている大手の事業者さんは採用しなかったそうです。大手の事業者というのは、そこに進出して買い手がいて、購買してくれる、買ってくれる、儲かるからそこに進出しているんです。そうして、自分達自身で地域への貢献の枠組みは持っています。それで地域の消費者をお客として抱えこむという戦略を取っています。地域の地場の事業者を中心に運営される仕組みには見向きもしません。どういう事かと言いますと、決定的に異なるのは、大手の業者は利益が上がらなくなったら、地域から去って行くことが出来る。

多くの地域で、地場で事業をやっている方々は、地域から離れるわけに行かない。皆、小さな業者ばかりかと言うと、そうでもありません。大きな業者でも地域から逃げて行くことが出来ない業種の業種が沢山ありますね。例えば電鉄会社が、線路をひっぺがしてその地域から逃げて行くという事はあり得ません。

つまり、地域に根ざして、その地域を良くしていくことが、自分の、私の利益にも繋がると。だからこそ地域貢献していかなければならないと考えている人達に、やはり役に立つ仕組みというのが必要かなど。そうすると、それは先程言ったゴミを通して広がった視野が町を位置付け直すと、そういうことが見えてくる。現在、ゴミが流れるルートは川ですね。そういう時に、わが日本が地域が元気になって、日本を救って行く時代だと言われても、地域の経済圏というものがどうなっているかという事を見直してみるきっかけになります。

昔は、山が分けていて、川が隔てている地域がひとつの経済圏を自然に作っていました。今は違います。物資や人の流通を支えているのは道路です。新しい地域と言うものが出来ました。地域圏、経済圏。改めて、ゴミから見ると流域圏というものも見直してみる必要があるのではないかと。それが典型的に表れているのが水道などです。そうすると、私達は地域興しという時でも、川が持っている意義といったものにも気付かざるをえません。川下で海岸に繋がって行きます。つまり、私達は問題が起きると、水に流すというような事を言います。水に流すと、海に流れて行くわけです。が、水に流すと言って、何が流れて行くか。やはり各種の廃棄物を含め、有用な陸地にある物質も流れて行く。それを取戻すような仕組みが、昔のようにあれば社会は健全さを保って行くでしょう。

しかし、それが切断されているという事に気付きます。そして日本人の多くは、殆ど、自分達が生活している地域の、日本の気候の中で、日本に降る雨と、日本に降り注ぐ太陽と、日本の国土の中で育ってきた食料を食べて生活しているかという、そうではありません。昔の古代ローマ人のように、北アフリカの植民地で出来た農産物を船で運び、貴重な海路を使い、エネルギーを使い日本に運んできて、そうして農薬まみれの野菜を食べている。

輸出する方は自分達が食べるわけじゃないから。お隣の中国の野菜は、中国国内でも問題になりま

した。野菜じゃなくて、毒菜。人体にどういった影響を与えるか分からない薬品が沢山使われております。

では、私達はゴミを通して気がつく日本の姿、その中でどこに注目すればいいか。私達ひとりひとりの生活の有りようで、ごみが一番雄弁に物語ってくれている。それに対する取り組みを通して、私達が願っている地域の振興。或いは、経済活性化、村おこし、人々の交流の活発化。そうしたものを達成していくという方向の中に自分達を置いて行く必要があるのではないか。それを一番教えてくれているのでないかという風に思っています。

皆さん、ここに入ってくるときにマスに仕切られて入っていましたね。私達がゴミを分類するということの持つ教育的な教化力と言いますか、大きな力があると思います。こういう取り組みはビジネススペースでは絶対に成立たない。農業者が海辺に海草を取りに行っても、買いに行っても沢山のお金は出せない。じゃあ、集まっている人がどれくらい分類出来るのか。人手をどれくらい投入したらいいのか。金銭を払っていても成立たない。つまり、私達は「稼ぎ」のレベルではなく、「仕事」と言うレベルで海のゴミを捉え直す。陸地のゴミも捉え直す。

そういう人の取り組みが継続するようなちょっとした工夫。環境キップのような工夫を入れて行く。と継続的な取り組みになっていくのではないか。この3年間の海ゴミの取り組みは、端についたばかりだと思います。これからどう言う形で自発的に人々の参加を増やして行って、個性的にかつ連絡がとれた形で発展して行くのか。これからの課題だという風に考えております。ありがとうございました。

4.2.6 地域の海洋環境貢献活動の事例発表

1) 「こども地域通貨「タラ」の活動について」

梅田敏文（北海道稚内市教育委員会教育部こども課係長）

稚内市から来ました。教育委員会のこども課で子育て支援係長をしています。こども地域通貨「タラ」の活動についてのお話というよりも、素直に表現すれば、シップ・アンド・オーシャン財団・海洋政策研究所の活動を通して、地域活動のありかたを学んだといったことになろうかと思います。

稚内市は北緯45度にあり、人口が4万3千人ほどで、北端の宗谷岬から樺太まで43キロぐらいあります。天気の良い日には、島影を望むことができるようなところです。産業的には漁業、酪農、観光、公共事業で暮らしています。最近はロシアとの蟹船などの交易もあり、年間2700隻のロシア船や往復で120便のサハリンとの直行フェリーの運航等により、ロシアの船員や市民が、たくさん街中を歩いてという光景がみられます。

流氷という言葉に代表されるような寒いところで、幕末にロシアの南下政策に対抗して蝦夷地が江戸幕府の直轄地とされました。幕命で1807年に津軽藩士が230人ほど、北の防人として宗谷に派遣されましたが、厳しい冬を乗り切ることが出来ず、230人の内72人藩士が、野菜不足からくるビタミン不足の水腫症で亡くなるという惨状になった、という記録も残っております。次の年の会津藩士は50人ほどが亡くなりました。特にそのような厳しい土地柄です。それでも、我々の先祖が住みつけてきたというのは、豊かな漁場と夏場の過ごしやすさと素晴らしい自然があるからだと思っています。厳しい寒さのなかでも頑張って暮らしています。夏場是非、皆さんいらしてください。

稚内市では、平成14年度より国をあげて取り組んでいる少子化対策の充実、エンゼルプランの推進のために、市長の熱い思いもあって、全国でも先駆的に「こども課」をつくり、特区による「幼稚園と保育所の一元化」や児童虐待や養育困難事例に地域のネットワークで即座に対応するシステムづくり、子育て支援ボランティアの育成、児童館や学童保育所活動の充実と利用促進の手法として子ども通貨「タラ」事業に力を注いでおります。

これは、遊びのキャラバン隊という活動と連動してくるのですが、これは、タラの証明書ということで、1タラ、5タラ、10タラとあるのですが、これは、市内の7つの児童館、4つの保育所で、元気な挨拶ができたり、下級生の世話をしたり、ボランティアをしたり、と言う時に、ごぼうびとして、タラを上げて、概ね1人100タラ集めたら色々と希望する遊びを企画して、実施する。子供たちの希望をかなえてあげる、というようなことで、できることになっています。「タラ」の名前は地元の高級食材のタラバガニやタラにあやかっただけです。「タラ預金」「タラ証明書」ということで、家庭の中での善行、家で手伝いをしたとか、も含めてタラを獲得します。2年やったところで、約1000人のこどもが参加し、現在の通貨量は4万5千タラを出しております。

タラの中で大きいのは、子供たちが遊びをしたい、ということで希望したときに、海の子なので、魚釣りをしたいとか海岸で遊んでみたいとか、海遊びをしたい子供たちの要望が多いので、そういう時に、海浜の美化活動ということで、結びついています。

私は、こども課で子育て支援の仕事をしているのですが、私の本業的な部分で言えば、母親がこどもを残し蒸発した、母親が「根性焼き」と称して子供の腕にタバコの火をつけるとか、内縁の男性にこどもが暴力をふるわれているとか、不登校であるとかの児童問題を本業としています。

私がなぜ、遊びのキャラバン隊というようなことを、民間有志の力を借りてやるようになったかと言いますと、少子化時代の子どもにとって、こども達が地域の多くの人と接する機会を多く作る事が、大事な事だなあと思ったからです。少子化時代で、子供が、地域の中で孤立している。社会というのは、ひとりで生きていくのではなく、皆で活着ているんだということを、自然に子供たちがわかかっていくようなそういう活動が必要なのではないか、ということで、市民有志と行政が協力し合っ、市民活動としてサポートしていています。こども通貨タラということになると、いろいろキャラバン隊が協力してくれるわけです。

遊びのキャラバン隊が、実は、平成15年の8月に、シップ・アンド・オーシャン財団と先生方がこられて、海浜美化活動というものをやっているの、是非お手伝いさせてください、ということで、財団の活動に参加したわけです。その中で、いろいろなイベントの方法を勉強させてもらったわけです。

財団が稚内で海浜の環境保護や美化活動を呼びかけて、参加した子供たちにタラ通貨を応用して、活動をしている写真がこれです。約200人の子供たちがイベントに参加して、遊ぶ機会を得る環境チケット（子供地域通貨タラ）を手にしたわけです。

具体的にどういことをやったかと言いますと、海浜清掃をした後に、ペットボトルの中に2—3センチのヒラメの稚魚を入れて、ミニ水族館ということで、自分の名前を書いて、1ヶ月ほど経ったら、前浜に流してください、ということで、やりました。これは、大変好評でした。

遊びのキャラバン隊でも参加している水族館の人などが協力して、海水族館づくり、ということで、やらせていただきました。生き物を大切にするという気持と、地域の子供たちが、自分達が海を意識して生活する中で、自分達のお父さんたちが沿岸で仕事をしている、ということに気付かせてもらった訳です。

これは、後の「ほたるまつり」の開催に繋がっていくわけです。

これは、200人以上参加しています。

これは、打ち寄せられたガラスビンの破片や、小さい流木などを利用して、海洋工作教室と称して行ったものです。これは、児童館まつりでやったんですが、あまりお金がかからなくて、子供たちに満足感や達成感を提供できるということで、地域の活動に取り入れたいと思っています。これは、稚

内の子供たちの作った作品です。貝殻をそのまま利用してくれればいいのですが、子供たちは色をつけるのが好きだったようです。

私はこどもたちのゴミ拾い、シップ・アンド・オーシャン財団の海浜環境美化活動に参加して、思ったことのひとつとして、稚内は北の町ですが、朝鮮半島や中国、ロシアのビニール袋やゴミが多く混ざっていました。外国のものが打ち寄せられているのを見て、海洋は世界中つながっているんだな、というのを改めて思い、いろいろ考えるきっかけになりました。

地元でも婦人部の人たちもホタテや昆布やウニ漁がはじまる前に海浜の清掃をするのですが、特に海藻ゴミは、腐れば匂いがして、非常に臭くて、自分達の船が出入するところをきれいにしますが、なかなか上手くいっていない、というのが現実です。

話はそれでしたが、この経験をもとに、遊びのキャラバン隊では、こども課で発行している子ども通貨タラを利用して、子ども達を海岸で遊ばせてやり、海浜環境を美しく守るという活動の取り組みや、子どもたちの工作教室にシップ・アンド・オーシャン財団の手法を利用させていただこうと思っています。

これは、七夕まつりでほたるを観賞しているところです。子供たちは、生き物を大変喜ぶんだということが、分かって、そういう活動もやっていきたいと思っています。そういう意味でも、数多くの子供たちと活動をする手法を勉強させていただいたと思っています。これから、遊びのキャラバン隊と子供たちで、どんどん環境美化活動を、北の防人として、ゴミの防人として行い、海浜の環境保全活動に取り組んでいきたいと思っていますので、皆さんの御指導を宜しくお願い致します。

2) 酒田港女みなと会議の活動から～「発見！酒田みなとの探検隊」～

小山恵子（山形県酒田市 酒田港女みなと会議事務局長）

「酒田港女みなと会議」の小山と申します。私たちの活動「発見！酒田みなとの探検隊」を発表させていただくんですが、まず始めにお詫びしておかなければならないことがあります。私達は、環境問題を中心に活動している団体ではありません。

まず、成り立ちを御説明させていただきます。山形県酒田がどちらにあるのか、皆さん御存知でしょうか？北は秋田、南は新潟、東は宮城に囲まれている、日本海側に面した港町です。山形と酒田の位置関係をご覧ください。山形とは120キロ離れております。山形県だけを流れる最上川が酒田に流れています。日本海側の方を庄内、山形側の方を内陸ということで分かれています。同じ山形県で文化も言葉も違う、と言う環境に置かれています。

酒田港の紹介をします。以前は小さい漁港であったと言われていました。この酒田の港町を作ったきっかけが、NHKの大河ドラマの「義経」の最後となりました奥州平泉の、一緒に滅ぼされてしまいました藤原一族。そのたった一人の生き残り、奥様であったか、妹であったか定かではありませんが、徳の前という方を36人の家来が介護しながら酒田に流れてきました。その方達は、教育もあつたんでしょう。ただの漁港を廻船を中心とした港町に変えて行きました。

寛永12年、河村瑞賢によって西廻り航路が開かれまして、山形の最上側の支流を利用しました米、紅花、そういったものを運び、大変繁盛した港町になりました。西の堺、東の酒田といわれるように大変繁栄致しました。今現在も残っている左側の絵が、山居倉庫になっています。中央の絵が、昭和初期の酒田港。現在は北港が出来まして、北東アジアに向けた重要港湾になっております。

酒田港女みなと会議なんですが、実は普通の会議から始まりました。平成10年、当時の運輸省の酒田港湾では、山形県内の10人の女性を集めて、女性の目から見た港作り、いろんな提言をして頂きたいということで集められた会なんです。10人なんですが、全く港とは関りの無かったり、港を見たこともなかった人間が多く、実際に港を見ながらいろいろな提言をいたしました。現在は15名に増えております。いろんな意見を出し合って、提言書を作って、山形県知事、酒田市長、運輸省第1港湾の建設局長に提言書を提出致しました。

ここまでは普通の会議で、ここで終わればごくごくある普通の会で、よそと違うところがこれからなんです。翌年、その提言書が本当に活着ているかどうか活躍されているか、確かめてみようということで、フォローアップ会議を翌年、開いています。我々が提言した港への案内板がちゃんと出来ているか、緑地の整備が出来ているか、輸出用スクラップが野積みされていたものが1ヶ所に美しくまとめられ整備されているか。そういったことが大変改善されたということを確認しました。では、これから、私達はどうするべきか。行政だけに酒田のPRを任せておく訳には行かないと、翌年から自分達ですれ

ばいいのかという活動を始めました。

山形県の位置を考えてみてください。山形の人、山形県に港があるとは思っていません。食べるものは太平洋側からの魚を食べ、目は東京や仙台、太平洋側を向いているんです。酒田に港があるんだ、山形に港があるんだと言って、「山形に酒田港がやってくる」というシンポジウムもやりました。記念講演で山田洋二監督を呼びまして「寅さんと港町」、酒田港で水揚げされた魚を持って行って物産市、山形県内の小学生、幼稚園児に未来の港を描いてもらった展覧会。それとシンポジウムを同時進行しました。余談ですが、その後すぐ山田洋二監督が鶴岡に行って見たいとおっしゃり、車でお連れしたんですが、その後藤沢修平の「たそがれ清兵衛」を作るきっかけにもなりました。もし、この会が無かったらあの映画は生まれてなかったかも知れません。

翌年も同じく、山形でシンポジウムを行いました。平成 14 年からは、酒田港を実際に見てもらおうということで、内陸の人達から酒田に来て頂いて、記念講演、シンポジウムを行っております。平成 15 年は、今度は東北地方の港で活躍している女性達を招いて、女性だけのシンポジウムを行いました。私が担当しているのは「みなとこども絵画展」なんですが、絵をご覧頂けますか。「未来の港」という題で描いてもらった絵なんですが、右側が酒田の子供の絵、左が山形よりも山よりに住む内陸の子供の絵、この違いがお分かりいただけますか？

メンバーの中に、海外の教育者とのパイプを持った方がおりましたので、その方を通して、海外の子供達の絵を集めてみました。左側が海に囲まれているニューカレドニアの子供たちが書いた絵です。右がアメリカのサウスダコタの書いた港の絵です。海を見たことが無いから、港と言うのは湖や池にボートが浮べてあるのが港だという発想しか生まれえない子供の絵です。この他、中国の子供達の絵です。実は、ネパールにもお願いしましたが断られました。「海や港を見たことが無いのに描けない。」子供達は正直なんです。実際に見たことがないと描けないんです。

次は、酒田から 60 キロほど離れた新庄市、山の子供の絵です。あまりにも海から遠いのに、よく描けているなど、表彰式の際にお父様にお聞きしましたら、お父さんが釣りが好きで毎週家族で酒田にやってくるんだそうです。なるほど、と思いました。

次が、新庄より山の中の大石田の子供達の絵です。大石田の子供達の絵が賞を総なめにしました。メンバーの一人が大石田にいますが、子供たちを車に乗せ、何度も酒田に来て海を見せ、描いてもらった絵なんです。本当に子供って正直だなあと感じます。

こういったことをやって、気がついたんですが、表彰式には、子供ひとりに、兄弟と両親、祖父母も一緒に家族ぐるみでやって来てくれるというのが分かりました。これからの PR は、大人を対象にするのではなく、将来の大人になる子供達に向けて情報を発信して行かなければならないなあとということで、昨年からは始めた取り組みがあります。子供部会を 3 つに分けて私が担当していますが、どうやったら楽しく海に触れてもらえるかを考えました。まず、船による酒田港の見学、漂着物を使った工作、海岸清

掃、海洋センターを見てもらう。砂浜で水で遊びながらチーム対抗でサンドクラフトを作ってもらおうと計画しました。

海の子供1に対して、山の子供を集め、グループ分けをし、ゴチャゴチャになって一緒に遊んでもらうという企画です。そして、ここがポイントですが、「子供の安全の為ですから、保護者同伴をお願いします」ということもお願いしました。子供一人に大人がついてくるんです。そうやって、情報を発信したら良いのではないかなと考えました。ところが待ちに待った当日は、雷付きの大雨になり外での活動は中止になりました。シャベルもバケツも用意していたのに、行けず終いでした。それで、海洋センターを中心に、船に乗ったり見学したりしました。人数が多いので、3班に分けました。大人の方でも船に乗るのが始めてだと言う方が多くて本当に楽しそうでした。海洋センター見学です。皆さん御存知の工作の時間です。子供達の目がきらきら光っております。ところが、大人たちがそれ以上に輝いておりまして、楽しいことは年齢は関係ない、とわかりました。

実はこの会に参加していただいた子供達には、宿題をお願いしました。ここに参加して感じたことを絵や詩に表して欲しいと。そうしましたら、大雨でいろんな物が流れてくるのを船の上から見て、感じたことものの絵がありました。自分達の町にあったはずのゴミが川に乗って流されて、海に届くのだ、ということちょっと考えさせられた、という子供の作品です。船に乗れたことがとっても楽しかったようです。沢山の作品が寄せられております。そして、子供達が喜んだのは言うまでもないのですが、大人達がそれ以上に喜んで、来年も、ぜひ参加させてほしい、スタッフでいいから参加させて欲しいと言われております。

これから、今年のプランを考えるのですが、どうやって楽しく、遊びながら学習したり、清掃したりできるかなあ、ということ。まず、義務ではなく楽しく海に触れて欲しい。波の音を聞いて欲しい、匂いをかいでほしい、なめて欲しい、そう思っております。今後の活動として、私の受持つ子供部会では、こういったことを通して海辺の自然体験、港や海岸のゴミ問題に対する体験、それを義務ではなく、遊びながら学習して欲しい、と考えています。昨年から酒田市内の2校の総合学習ですでに始まっておりますが、鳥の達人、土の達人、水の達人、植物の達人、それに私達も参加し一緒になって学習を始めております。

酒田の平野の米を守るために本間宗久、先人が植えた黒松が、松食い虫や、風によってかなりの倒木があるので、それを守るために黒松を中心にした総合学習も同時に行われています。

港町に対する活動。既設施設、これは旧国立倉庫なのですが、大きな倉庫です。大正時代に建てられた鉄筋コンクリートの倉庫なのですが、老朽化が進みまして、これをゴミにするのではなく、これを活用して何かできないかといろんなことをやっております。港に関するシンポジウムなども一緒に行っに行こうかなと思っております。酒田の港がリサイクルポートに指定されましたので、それに関連した循環型社会形成に向けた、リサイクルの勉強会もやっていこうと思っております。

では、少し酒田の街を案内したいと思います。山居倉庫、今も現存して活躍している米の保管庫で、おしんの撮影にも使われたかと思います。写真家の土門拳記念館。建物も凄いです、迫力ある写真も素晴らしいものがあります。日本一の大地主といわれた、本間家の旧本庭。井原西鶴の日本永代蔵に出てくる廻船問屋、旧あぶみや、これは開放されております。

20 数年ほど前に、酒田大火があったんですが、酒田は本当に風の強い街で、5年に一度、7年に一度、昔は何千件と焼ける大火が続いたんです。それでも酒田は発展してきた。廻船問屋の力、酒田の町民の力に感心しておりますが、昭和の酒田大火の後は酒田市民がちょっと元気が無い。励ましをしていただくためにも、いいものも残っておりますので、ぜひ酒田に来て欲しいと思っております。

山形県各地で、酒田でも雛人形の展示を行っております。様々な祭り、催し物を通して、酒田を生き生きした街に、良い港にするためにということでこれからも活躍して行こうと思っております。是非是非、酒田にお寄りください。お待ち申しております。短いですが、これで私の発表を終わらせて頂きます。どうもありがとうございました。

3) 気仙沼市環境保全活動：エコポイント活動

佐々木正和 宮城県気仙沼市 気仙沼商工会議所中小企業相談所所長

(代理 菅原一美)

気仙沼は東北新幹線から在来線で約一時間。日本一の魚の水揚げ港です。魚に対してのすごいこだわりがあって、海をきれいにする、というのが町の人達の願いでした。なぜ環境か、地域の誇りは海・山・川の豊かな自然の環境であり、山の幸があり、海の幸があり、そこに暮らしてきた文化がある地域を大事にする。環境を真中において見て、自然、観光、教育、漁業、そして、皆さん御存知の「森は海の恋人」といわれる畠山さんとの取り組みもこの中に取り入れ、ひとつの環境に対する取り組みを町挙げてやってみよう、ということを考えました。

ここのひとつのやり方として、気仙沼エコ・クラブ、エコ・ポイント活動という事からスタートした。エコ・ポイント実行委員会というのがあり、気仙沼地区のエネルギー懇談会総会というのがあるが、東北電力が主体になって、地元の商工会、主要な企業、気仙沼の市役所も主体となって、環境に対する取り組みとしてエコ・ポイントクラブの実行委員会というのを作った。

仕組みは簡単である。エコポイント活動の申請、認定、募集、実施、エコ・ポイントカードの配布、捺印。面倒なことはやらなくても、例えば、小学校の〇〇年 A 組の 10 人が〇〇地域の道路のゴミを拾いたいということを計画すると、気仙沼の商工会議所の中にある実行委員会事務局に申請書をだす。まずほとんどが許可される。責任者が、メンバー10人の名前を書いて、ゴミ拾いをやります、ということ、エコ・ポイントカードを貸し出す。カードの中にはんこを押す場所があるが、そのはんこを無条件で責任者に貸し出してくれる。環境に対する貢献をやった人達に一回に一つずつ印が押される。それが 10 個で、「クリーン賞」、20 個で「グリーン賞」、30 個で「エコロジー賞」ということになる。活動の数に緒おじて、点数が付けられる。

ポイントが溜まったときに、表彰する表彰制度がある。活動をやると、事務局にこういうことをやったと、報告をする。子供達だけでなく、お年寄り、女性、男性と皆、関わっていて、気仙沼約 6 万人に対し、カードの発行数は既に 6,000 枚。それだけの人がかかわっています。表彰制度として、気仙沼商工会議所が表彰状をくれる。表彰状をもらったおじいちゃんの中には、「私は一生のうちではじめて、賞状で表彰された」と本当に喜んでいかれる方もあるそうです。「俺が死んだら、賞状を並べてくれよ」と言って、お葬式の祭壇に飾って、家族も名誉に思ってもらおう、という希望をもって、賞状を一杯集めておられる方もあるそうです。

気仙沼の大島で、海岸のゴミ拾いをやっている写真です。子供達の写真。気仙沼市内から 10 人ぐらい来ていただいて、学校の先生が引率してゴミ拾いをやったときの写真です。ゴミ拾いをしたら、ポイントカードが出来る前は、何でお礼をしたらいいか分からない。お礼のシステムが何もないということだったので、私達が、工作教室を開いて子供たちにお礼をしましょう、あそばせてあげましょ

う、ということで始めたのが、大島の工作教室です。ロビーの方に材料など展示してありますので、ご覧下さい。

こちらは子供達の作品の写真です。海のゴミ拾いだけでなく、道路のゴミ拾い、道路脇に花などを植える美化活動をやった人にも、ポイントが上げられます。発行のカード数として、先ほど 6000 といいましたが、約 7000 ですね。市民の約 1 割がこのポイントカードを持っています。

平成 16 年度の地球温暖化防止環境大臣賞を去年の暮れに小池環境大臣からいただいた、ということです。花を植えるだけでなく、山に木を植える、ということも併せて、ボランティア活動としてやっておられる。表彰式の記念写真。右は私が最初にお会いした臼井商工会議所会頭。左が気仙沼の市長です。

エコ・ポイント活動システムの流れ図です。環境、観光、食という中の流れでエコ・ポイントがぐるぐる回っています。エコ・ポイントのメリットは、森野さんからも御紹介がありましたが、一番のメリットはポイントが溜まりますと、飲食店、小売店など各商店の割引がききます。一般的な割引より高い割引率で、引いてもらえる。3 段階に応じて、割引のパーセントが変わってくる。お店の協力によって、例えば、「クリーン賞の人には、11%引きにします」という宣言を店の前に貼ります。他の店がそのようなものを前に貼ると「私もやりたい」と、どんどん協賛店が増えて行く。地域の活性化の一面も持っている。

もうひとつの大きなポイントは、クリーン賞、グリーン賞、エコロジー賞で、それぞれ、定期預金の金利が上乘せされる。気仙沼信用組合という地元の金融機関が 0.06、0.09、0.12 と上乘せすることを、自発的に申し出て協力してくださっているようです。地域銀行もこれについて検討中だということですので、多分、その方向に進んで行くのではないかと思います。

佐々木さんに「これだけのことをやるには、事務局経費とかいろいろ掛かるんじゃないでしょうか？誰がふたんするのですか？」と伺ったところ、気仙沼商工会議所で、このチケットを印刷する印刷費だけですんでいるので、あとは一切お世話をしません。はんこを貸し出すだけです。何も監視するわけでもないの、通常業務の中でやれるので、特にお金はかからない。ゆるい形の地域通貨、環境チケットの仕組みで、エコ・クラブのポイントということで、進んで行く。もうひとつ、気仙沼だけでは勿体無いので、近くの唐桑とか石巻にも提案をしている。どこまで広くするのが適切なのか、私にはわからないのですが、近隣の市町村に交流を提案していくことも、これから進めるということです。簡単ですが、御紹介をさせていただきました。

4) 新島の海洋環境貢献活動について 前田宗佑 東京都新島村産業観光課課長

まず、新島と言いますと、最近是新島より隣の隣の三宅島さんのほうが全国的に有名になっておりまして、おかげさまで2月1日から島の方へ帰れたと。私共の島にも何人かの方が噴火以来避難しておりまして、一生懸命頑張って島の煙、ガスを見ながらこの4年半近く頑張っておりまして、近く、島の方へ帰る予定になっております。また、当方もその頃地震で、全国の皆さんに大変お世話になり、この場を借りて皆さんに御礼申し上げます。

さて、新島は東京から南に150キロ。その昔は大変、交通の便も悪く、島に生まれた方々は都内で東京を見ることなく亡くなった方がいっぱいおられます。ぜひ、一度は東京に行ってみたくてという方もおります。最近、逆にお嫁さんが島へ沢山来られて。我々が小さい頃には、子供さんの顔を見ると、「お前、あそこんちの子だろ」と直ぐに分かったものですが、最近の子供さんは、(地元の方と結婚しますから、我々はハーフと呼んでいるんですけど) 半分くらい顔を見ても分からないという方がおります。そのように変わってきております。

人口3200人。隣の式根島を含んだ行政区域になっております。

新島はその昔、徳川幕府が流人の地と定め、明治の初めまで約1333人の罪人を島に送り込んだわけです。第1号は、山形県羽黒山のテンユウ別当さま。この方は、力があり、現在も山形の羽黒町に行くときと神様と崇められている。そして、最後の方には新撰組の最後の隊長、相馬主計という方です。政治犯から、軽犯罪者まで多種多様の罪人が送られてきました。時に、島の中には200数十人の罪人の方が生活しておりました。罪人ですから何をするか分からない方々ですよ。そういう方ばかりではありませんが、島の人はそういった方々と生活していた。時には流人に食べ物を与えたり、…という語弊がありますが、そういう方々に仕事をしていただいたあと、わざと船底に魚を何匹か残して掃除させて、それで、生活の糧にさせていただいた、という事も有ります。また、学問のある流人は地元の子弟に読み書きを教えて生活をしていました。お互いに生きる糧を探りながら、流人との共存を図っていたわけです。

島内では流人が100人もいるわけですから、牢屋に入れるのではなく、5人組というグループを作らせて、その中で共同生活をさせていた。島民は、いつ、何をされるか、ということで、精神的に苦しいこともあった。関が原の戦いに敗れ、流罪となった豊臣家の大老浮田秀家、この方は、豊臣秀吉の豪姫をお嫁さんにしていらっしゃる方ですが、その方が八丈島へ流罪となったわけです。江戸から八丈まで1日で行けるわけではないので、風待ちをしながら、新島経由で八丈へ渡った。その方たちは、時の情報を得る、いい情報源でもあったと聞いております。わずか3千何百人の小さな島ですが、各家庭に家紋があります。なぜかと言いますと、政治犯や偉い人が流されて来た場合には、島内で世話になった家に家紋や名前を残して亡くなったり、赦免になり島を出ていった。また、そういう中で、新島も中江戸といわれ、大変栄えた時代もあった。

昭和50年代、高度成長期には若者を中心に多くの人が伊豆七島に来られた。「新島に行くとな女の子がすぐ見つかるよ」などといわれ、週刊誌には叩かれ、学校には行くなと言われ、大変苦勞した時代があった。新島としては、その頃から観光立島として、名を挙げてきたわけです。青い海、白い海をキャッチフレーズに観光に力を入れてきたので、村内の施設も最高のピーク時に合わせ、施設を作ってきた。1日1万2千人くらいの人が島の中にいた。地元の方は地域によると、2千人ちょっと。そこに夜、食事が終わると1万2千人の人が出てくる。新宿の西口のような感じになる。そういう時代もあったが、若い人達が、観光に向かなくなったりとか、行っては行けない、海外旅行に足が向いたなどで、観光客の足が遠のいた。

当地のように太平洋の真中だと、海が荒いです。去年は多くの台風の上陸の影響でお客さんも少なかった。一番問題なのが自然環境、海流によって新島一帯の漁業は不振でした。海でありながら魚が獲れない。黒潮が全体に新島を覆った。黒潮は透明度が高い。東京から来たお客さんは「わー、海って青い。綺麗なんだなあ」と言うんですが、反面そこで生きる生物には隠れる場所がない。海が透明なので全部見える。大きい魚に全部食べられる。小さい魚は深場、深場に潜り、魚が獲れなくなる。栄養のない潮なので、小魚が集まらない。観光客には素晴らしい透明度のいい海なんですが、そこで漁業を営む方にはよくない潮がずっとはりついていました。地球環境の変化によって、いままでにない、黒潮の蛇行線を辿ったということでしょうか。

空のアクセスですが、小さいのが9人乗りの飛行機、大きいのが19人乗りです。唯一の空の足です。時にはお客さんが一人、二人のときもあります。

新島はひょうたん状の島で、西側に4キロの砂浜、東側に7キロの白い砂浜の海岸があります。東側の海岸は全国でも有名なサーフィン・スポットになっております。世界のプロのサーフィン大会、全日本のサーフィン大会も行われています。ここでは海水浴は出来ないんです。潮が強過ぎて。観光の宣伝のようになって申し訳ないんですが、お話には流れがありますので御勘弁頂きたいと思えます。この建物は、新島では世界で2カ所（新島とシチリア島）しか取れない坑火石、石英粗面岩という石が取れるんですけど、これは石英、ガラス石が入っています。この坑火石を利用して露天温泉に建物を作っています。設計した方がギリシャ神殿風に作ったんですけど、私達は存分ではない…。この下は、蒙古のパオ風の物がある。なんだか、バランスが悪いような…。

東側の海岸です。ここの部分はゴミがない所です。ちょっと丘の方に行くとゴミがいっぱいあります。テレビですが、メイドインチャイナと書いてありました。中国か何処かから流れてきたものがあります。こういうものが流れてきております。ドラム缶もあります。こどもの靴が1足。

西側の前浜海岸。昨年財団の協力を得ながら、海浜の環境清掃をし、子供達の海の工作イベントをやりました。島には、海がきれいということでサーファーが沢山来ております。地元でも若い方々はサーフィンをやる方が多い。地元の方々は、ここはサーファーに有名な場所なので、この財産を十分

に活用して欲しいという事で、曜日を決めて自分達で海岸清掃をしている。それから、大会をやる時も始める前にまず、海岸清掃をしている。

我々がイベントを組んでやるボディボードや、若い女の子のサーフィンスクールをやる時にも、その前にゴミ拾いから始める。広範囲ではないが、自分達が使う場所の清掃を自主的に清掃活動を行っている。

伊豆箱根富士国立公園に指定しております。観光面で位置的に良い環境に新島はあるわけですが、近くに本線航路と言いまして、新島と伊豆半島の間とか、新島の後ろの方をタンカーとか大きい船が行ったり来りしています。そういう中で、ゴミも出ますし、油も出ます。

去年は珍しいくらい多く台風が上陸し接近しました。その度に、通過後には倒木が流れてきます。根っこがついてるもの、枝だけのもの。良いときには、葉っぱに小魚がついて、その小魚に大きい魚がついて来る、という利点もあるわけです。が、ゴミと一緒にいる魚をどうやって獲るかという、ゴミも一緒に取らなきゃいけない。トローリングをするにはゴミもひっかけてしまう。うまい具合に魚って獲れないんですね。

最近、島に来ているジェットホイルという船が走っていますが、台風の後になると必ず、ビニール袋や発泡スチロールと一緒に吸いこんじゃう。80キロで走っている船ですから、ゴミを吸うとダウンしてしまう。ゴミが見えると避けて行く。蛇行運転をするので、時間がかかる。2時間20分で新島に行くと言うことは画期的なことなんです、そういった欠点もあるわけです。

去年は、東京湾の入り口でクジラとぶつかってお客さんが飛ばされ、脊髄を折って重症、植物人間になっている事故も有ります。ゴミだけではなく、クジラも住み良い場所が無くなって来ているんだろうという気もしています。流木の中でも良い悪いということもありまして、昔は台風の後に住人が暗いうちからこぞって浜に行くわけです。そうすると、いろんな材木が流れている。ケヤキの太いのがあったり、杉だとか、ヒノキだとか島に無いような材木が流れてくる。まず、見つけた人が自分の印をつける。それで、時期を見て引き上げて、貯めて、時には家を一軒建てるくらいの材木を集める。そのように良いときもあります。

島の関係で、ゴミが常に集まってくる。私がこの場をお借りして皆様に訴えたいことは、海洋環境を守ることは、単に漂着物を処理することではなく、根本的に対策から考えなければならない。本土の山は開発により荒れ、動物の被害で樹木は枯れ、それによって海洋資源まで被害を受けている、ということです。一部の地域、一部の行動ではなく、それに関るいろんな方々が海と言うことで、他の方からの団体も関っていかなければならないかと。この度、SOF財団の交流会議で、私達のような小さな村での悩み、活動状況が発表でき、また他地域での取り組みを聞いて、将来を担う子供たちに良い環境で島を引き継いで行きたいかなと思っています。これからもいろんな形で活動して行きたいと思っています。つたない発表になりましたけど、御静聴有難うございます。

5) 多屋区530運動、マルットヘルシー多屋海岸の活動について

鯉江正雄 愛知県常滑市 常滑市観光協会、マリナーズ代表

丁度、1週間前にオープンした中部国際空港の対岸に位置する愛知県常滑市からやってきました。オフィスからみている風景です。左側が伊勢湾に沈む夕日。右側が空港の工事の風景。下の4点はSOFのプロジェクトにある体験型の学習をやっている風景です。日本の中央、太平洋側に位置しています。知多半島、北に名古屋。車で約30分。空港から直線距離で約3キロという近い位置にあります。空港のイメージパース。工事の12年から14年の進捗状況。この14年にSOFからお話をいただき、海のゴミ問題を一緒に考えましょうという御提案を頂いたんです。この赤いところがサポートセンターの場所。黄色いところが僕の生まれた場所。海が好きだったんですね。僕も50ちょっとになるのですが、海が好きだったんですが、僕が見ていた50年と言うのは、海岸の開発の歴史だったということもありまして、もともと僕はサーフィンが好きでこういう業界に入っているんですが、できれば、地元で夢でもあった学校そして研究室を持ちながらこういう活動を続けたいということもあって、こういうことになりました。

これが、目の前の海岸です。右が多屋海岸といい、南北が800メートルの自然海岸が残っています。大都市近郊にしては、非常に自然が残っている貴重な海岸でもあります。左の上がそこから見た空港の工事状況、右が四季を通じてにぎわうマリインレジャー、非常に多くの人が集まります。下がアカウミガメの産卵地でもあります。昨年もアカウミガメが産卵致しました。その報告活動も積極的に行うことが出来ました。右側が希少な海浜植物。多種の海浜植物が自生している場所でもあります。これが、私が持っている施設です。小さなプールがあり、気象観測施設とか、自分が持っている船だとか、いろいろなものが置いてあります。今回の財団さんのお話もあって、いろいろなプログラムの中に、海岸の清掃活動を最初に取り入れさせていただいた。これが、海岸を清掃している風景です。いままでは、遊びとかいろいろな教育を受けるときに、海岸の清掃をするということは、当たり前、という事になっています。これが工作教室ですね。天気の話をよくします。衛星画像を出して、地球のその日の画像を見せます。僕がよく話するのは、海は皆のお母さんのような役目をしていますよ。空は皆のお父さんのような役目をしている、地球は人間として生きていますと、そのように子供達に伝えます。

これが自然エネルギーのシステム。簡単に作りまして、風力発電やソーラーパネルを使っているのです。左側がプールの水をソーラーパネルに直結してしまして、飛ぶんですね。ここに体格の良い子供さんが遊んで、持たれかかりますと、飛ぶ距離が短くなるものですから、これを子供達が楽しんで遊ぶんです。自然エネルギー、自然の恩恵を子供達に体感してもらいながら、遊んでもらおうと思って、作ったんです。

これは、海浜植物の保護活動。これは、海がめの保護活動。これは水難事故の防止。今日も来てい

ますが、ライフセービングの活動をしています。今日も来ていますが、ライフセービングの活動の代表の鈴木君が講習会を開きます。基本的に僕の考え方としては、難しい環境の話をして、子供達は喜ばないものですから、海で安全に楽しめる、その環境を僕達が用意する。そこで、自然だとか海に目を向けてもらう。そこから興味のある子には学んでもらえるわけですね。「これ、どういうことなの？」と聞いてくる。難しい話から入るのではなく、興味を持ってもらってそこから答えて行く、一緒に考えて行くというのが僕達の基本です。今はライフセーブの子供達がゴミ清掃を当たり前のようにやってくれています。

これが、カヌー教室です。なれない子供達はプールの中から始めます。これは、カッター教室。これは私が持っている船を子供さん達に使っていただくのですね。これは、最終的な海洋教育です。力を合わせながら、協調性を持たせるのですね。

空港の視察も行います。環境に考慮した空港なので、積極的に見ていただくのです。これが財団さんと。最初14年のころは分からなくて、菅原さんに何度も足を運んでいただきまして、どういう形が良いのだろう、というひとつのフローがここに書いてあります。海岸を清掃して、チケット・・・この簡単なブルーチケットですが・・・一番シンプルに清掃していただいたら、これを渡して、工作に参加していただくという簡単なシステムから入りました。その中で、山と海と川と都市の生活と、それが末端で海に来るという連動性を理解していただくようにこのような形でお子さん達に見せて御説明します。

で、向うにも置いてあったんですが、これが、まさしく、それなんですね。お弁当箱のようなものです。これが、山のものです。これが一般生活に密着したもの。そして、海のもの。これで、この連動性を理解してもらおう。これが工作パックを詰める作業しているところです。この工作は室内でも出きる。海の場合は天候に影響されますので、天候が悪くても通年できる対応が必要ということで、菅原さんからのアドバイスもいただきながら、こうしました。これは、雨の中でゴミを拾ったあとに、室内に用意したところでやれるような体制作りをしました。これが屋外。これは、どういう時にでも、非常に広範囲にできる、かつ、場所を選ばないやり方です。海岸だけでもできる。これは、うちの施設の中の写真です。これが、14年度に SOF が協力してくださってやりました、海洋環境貢献活動の実績ですね。相当数多く出来ました。最初は難航したのですが、非常にスムーズに出来ました。これが、地域のゴミゼロ運動。雨の中非常に沢山の百数十名の子供さんが集まってくれました。うちのセンターに集まってくる子供達の数です。非常に沢山集まってきました。雨への対応がされていたので、お弁当箱のように持って帰っていただいて、家でまた、お母さん方との会話、子供達の会話が弾むもので、一回のきっかけで、どんどんと広がるわけです。来れば来るほど、ファンは増えるし、ゴミは減るということです。

これは、中の風景。常滑の青年会議所から相談がありまして、海のイベントがしたい。漂流教室が

したい。安全面と子供達が喜ぶようなプログラムの開発をしてほしい、ということで、SOFのノウハウをここに入れさせていただきました。ゴミを拾っているところは出ていないのですが、沢山の子供達がこういういかだ作りをして、ライフセーバーの子たちに監視していただいて、安全に楽しめた。すぐ近くに常滑競艇があるので、今、子供達が着ているのが、競艇場でお借りしたライフジャケットです。地域が一緒になりながらやっているのですね。これが室内。うちの小さなプールのなかに沢山の子供達が集まっています。安全面に気をつけながら、子供達がちょっと勇気を持ってチャレンジするということです。帰っていくときも、黄色いパックを持っていただきまして、先程の工作パックを入れた物を持って帰っていく。非常に良い風景なんです。これはショーコスギさんの塾を僕の友達が行っているんですが、その息子さんが、海岸清掃をしたいというので、シップアンドオーシャン財団の協力を仰ぎながらやろうと。沢山の子供達に参加してもらったんです。右下にあるように本当に小さな子供達も積極的に参加してくれる。後で食事会を開く、話が非常に盛り上がります。そこで工作もするもんですから、創造性も豊かになり、会話も広がる。

「マルットヘルシー多屋海岸」、これには秋山会長にも来て頂きまして、非常に地元も盛り上がったんです。500名くらい来たんです。ラジオ体操から始まり、海岸清掃をする。沢山の人達がいっせいにやるんです。漁業組合の協力も得ていたもので、地引網もやっていただいて、地元の観光協会や地域の人達が料理を作ってくださりふるまう。おかげで、海岸清掃が定着しました。同日、常滑競艇の中でも自然工作をやり、この21日は常滑全体が海に興味を持ってくれた日ではなかったかと思います。これは「はまっ子クラブ」。小人数の時に、プログラム開発をするんです。小人数の時にカヌーのコーチと、ライフセーバーと一緒にになって小人数の中でプログラム開発をして行く。カヌーの指導もし、ライフセーバーが監視しながら安全面に目を向ける。お母さん方が料理しながら子供達を迎える。パネルを見せながら、どうしてここにゴミが流れ着くのかを子供達と一緒に考える。これが次に繋がるわけです。あとは工作もします。

これはガールスカウト。いろんな巾の人達を対象にやってみようということです。ガールスカウトの子供達も集まって、非常に積極的にやってくれました。沢山の子供達に参加していただき、この時は工作をせずに、持って帰ってもらった。

これは歯科医療師専門学校。18歳から20歳くらいの女性だったので、おそらく、海岸清掃は嫌々やって、工作は殆どやらないんじゃないかと心配していたが、やってみたら、結構一生懸命海岸清掃をやってくれた。終わった後は、夢中になって工作をやっていた。これは、結構イケルと確信しました。菅原さん達と一生懸命考えた甲斐があった。雨でも対応でき、子供から大人、若い女の子達もやってくれる。これは、あとでマリンスポーツを楽しんでもらいました。

これはネイチャークラフト。常滑の教育委員会から依頼があり、「30名程募集してもいいですか」、という問い合わせだったので、「良いですよ」、と言ったら160人集まった。「どうしましょう」とい

うことだったので、「やるだけやってみましょう」と、いきなり 160 人の家族を受け入れた。海岸も家族連れで賑わうというか、一杯参加していただきました。室内で配布しているところです。

この時は教育委員会の人に海鮮鍋を作っていただき食事をした。ここで、日本地図を渡し、来週は気仙沼へ行くとの説明をした。「皆さんの思いを気仙沼に伝えよう！」ということで、常滑の子供達が一生懸命、箱詰めを協力してくれる。これを持って気仙沼へ行く。 シップアンドオーシャン財団のきっかけによって、これがスムーズにまわる事になれば良いと考えました。皆さんが協力してくれました。常滑から気仙沼。気仙沼の周辺の海岸の状況。気仙沼での活動を報告していただいた写真もあります。1つの流れとしては、常滑の海辺から気仙沼の子供達へ。

プロジェクトのフローとしては、愛知県内で実施し、海岸清掃に参加、ブルーチケットの配布、工作教室に参加、ごみを出さない人材育成、プラスアルファで、我々の教育プログラムを加味する。こういう 1つの流れを気仙沼から始まって、全国各地へ広げられたら、ということです。14 年度に SOF 財団と一緒に開発したフロー図と実績です。

それと同時に、県内を充実させようということで、愛知県内の実地候補地を調査をした。まず常滑。日間賀島、日間賀島が非常に良いところで、菅原さんにも地元の人会って頂いてお話がすすんだ。漁業も盛んで、体験型学習も盛んなところです。

これからは単なる環境保全活動ではなく、観光事業。地域の活性化に確実に、循環し、継続する。この島では、昨年からは学校教育でライフセービングスクールを学校教育の中に導入され、一体となっていていい島になってきています。碧南に、競艇選手を育てる素晴らしい訓練施設があり、行く行くはうちでも使わせて欲しいと調査しました。いろいろな機材もあるし、温水プールもある。素晴らしいところです。もうひとつ、南知多ビーチランド、砂浜のすぐ横に隣接している。所長さんも仲がいいものですから、ここの海側で SOF と一緒にいろいろな海岸清掃活動と同時に、海洋教育や自然体験プログラムを導入することによって、地元の人々にも喜んでいただけるのではないかと。近い将来、南知多でも同じような活動が始まると思います。施設の案内です。15 年度の活動に向けての実施フロー。私達が県内を充実させるので、是非とも菅原さん達のお力で全国展開が出来れば良いと思っています。私たちスタッフも協力させていただく。愛知県内では常滑、日間賀島、ハズ町の 3ヶ所が実現できることになりました。

6) 日間賀島「海の日イベント」について 杉浦明巳 愛知県半田市 レッツチタ代表

今回は日間賀での海の日イベントの報告ということで、菅原さんの方からおおせつかったのですが、主催をした日間賀観光協会の坂口さんが本来は来るはずなのですが、丁度フグの漁が忙しく、観光ホテルもやっているの、島をでることは許されず、急遽私が報告をすることになりました。

私自身は知多半島の半田市を中心に、チタという地域通貨をやっています。常滑市の鯉江さんと御縁があり、3年ほど前から、多屋海岸での活動のお手伝いをしたり、ビーチコーミングのお弁当箱のセットの詰め合わせ作業などをやっております。そういう流れから昨年の夏の日間賀島でのイベントもお手伝いしているの、その記憶をもとに発表させていただきます。なにぶん、島の人間ではないので、思いの程は、坂口さんには及ばないと思いますが、御容赦ください。

日間賀島の紹介を致します。東の方にサンライズビーチがあり、今回のイベントが行われました。日間賀島は知多半島の先端から約2.4キロ、船で10分ぐらいのところにあります。三河湾に囲まれた、温暖で風光明媚な島です。大きさは甲子園球場約16個分の大きさ。周囲は5.5キロ。セントレアから45分ぐらいですので、是非おこしく下さい。産物としては、海に囲まれているので、魚介の宝庫です。特にタコとフグ。多幸と福と当て字をして、一晚フグ食べ放題一万円コースなどがあります、というようにして、パック旅行の企画を商業ベースに載せています。ここのフグは遠州灘の天然フグです。下関が有名ですが、下関が不漁の折は、日間賀特産のフグが下関にも廻されています。品質も折り紙つきです。人口は2300人、650の世帯数です。そこに年間35万人もの観光客が訪れます。

余談ですが、日間賀島のもう少し南に篠島という日間賀島と同じぐらいの大きさの島があるのですが、私が子供の頃は、篠島と日間賀島は並び称されまして、子供の頃はどちらかと言うと篠島の方が、歴史が古かったり、万葉集に書かれていたり、伊勢神宮との関りがあつたりとかで、歴史があつて有名だったのですが、最近は日間賀島の方がダントツにリードしている。日間賀には何も無い、その危機感がバネになって、リードしている。PRが上手で、企画が面白い。観光地なので、今回のテーマの海浜清掃は当然のこととして、観光協会なんかで、毎年シーズンには、行っています。

日間賀島も篠島も南知多町というところに属しますが、南知多町というと、合併後の名前を南セントレア市と命名したいということが話題になって、恥ずかしい思いをしました。南知多町では、率先して、下水処理事業にも取りかかっています。もうすぐ、その事業も完成するようです。企画が面白いと言う点では、最近紅白にでている40歳にしてデビューした綾戸智絵さんというジャズシンガーが、メジャーになる前からコンサートに呼んでいる。目の付け所がなかなかいい。キッズ・アドベンチャーという夏休みの間に、遊びのインストラクターを常駐させて、いかだ作りや素潜り、キャンプファイアーなど体験型のプログラムを実施したそうです。もう4年ぐらい前から実施しているということです。これが、好評を博し、毎年3000名以上の親子が参加して、そこで、親子のふれあいを改めて確認したり、自然や生き物に対する好奇心を深めるのに役立っています。これがとても良かった

と言うことがあります。なかなか、体験型ということで、良いわけです。その延長線上に鯉江さんとの御縁の流れもあると思いますが、今回の海浜清掃プロジェクトへのきっかけとして、一昨年にやった日間賀小学校での授業で、ライフセービングの教室をやった、と。今日はライフセーバの鈴木さんがスーツを着て見えます。その場では赤と黄色のライフセーバーとしてのユニフォームを着られ、隊長さんです。

ライフセーバーというと、海の救命活動ということが、大隊頭に浮ぶのですが、いろいろ話を伺って行くと、救命の他に、スポーツ、教育、福祉、環境と五つの理念があり、具体的には、海の救命活動だけでなく、事故を未然に防ぐことや、仲間とちからを併せる、とか、海でのマナーを守ろうとか、海を護ろうとか、島の子供たちだけでなく、観光客とも一緒に考えて行ったら、どうなんだろうかと視点が開けてきまして、そういう流れもあって、日間賀島での初めての環境チケットはライフセーバーのお兄さんたちが、担うということで、展開されたわけです。これが、7月18日のサンライズビーチでの海の日イベントですね。ライフセービングのお兄さんたちが子供たちを集めて、ライフセーバーの教室をする前に掃除をしましょう、ということでやっています。これが親子でライフセービングの講習をしている模様です。その時に配った環境チケットです。ライフセーバーの教室のあとで、チケットと交換して、工作教室ができるというチケットです。

海浜清掃が終わった後で、カードと交換してキットをもらって、工作をする。どこでもそうだと思いますが、親子で好評です。観光協会の方はこれと平行して、あさりの掴み取りやスイカ割りなどを同時並行で行っておりました。

イベントをやった7月18日は夏休みのオープニングで、海開き。「ハレ」の日だったわけで、私達がビーチに到着したときには、観光協会の方たちによって、ビーチはきれいに清掃されていました。ゴミが落ちていると、観光業の方々は、習慣でゴミを拾ってしまう。子供たち用に少し残してください、というようなことでした。ゴミ拾いというのは、日常の「ケ」の日のことですので、「ハレ」の日、オープニングセレモニーなんかがある日は、やってはいけない、ということ学びました。

中だるみになって、少々汚れてきたあたりで、やるのが自然何だろうと思いました。

あと、それから、観光協会としては、もてなす側なのに、汚い状態にはできない。その辺、あちらを立てれば、こちらが立たないという、アンビバレンツなところがあって、結局、役割をはっきりさせないと、いけないんだろうな、ということをおもいました。海浜清掃は、結局、ライフセーバーのお兄さん達に任せて、その中でとり行う、というように、役割をはっきりさせるのが、いいのではないかと思いました。

今後の展望としまして、坂口さんに伺いました。漁業と観光で成たっている島なので、地産地消で産業振興、人材育成を進めて行きたい。それにあたっては、4本の柱があって、ひとつめが料理開発、島の特産で白ミル貝というのがありますが、これのカレーをいただきました。無料で。イベントの日

にも配っておりました。おいしかったです。あと、地元産物の市場調査、朝市だとかもやりました。今回のテーマは、自然の体験型漁業の見直し。子供だけでなく、大人も含めた、体験型プログラムを充実させて行こう・その中で、島の自然とか、環境だとかを考える目を養って行こう。キッズアドベンチャーに至っては、もっとこれを進めた形で、例えば、不登校の子供達なんかは、自然や動物に触れ、親しむことで、情緒の安定や、社会性を身につけていく機会をもてる、自然学校みたいなもの発展させていきたい。

あと、ライフセーバー。できれば、島の青年にライフセーバーのライセンスを取得してもらって、島の青年をライフセーバーに育成して行って、ビーチにはいつもライフセーバーのお兄さんたちがいる、そういう形に持って行きたい。その中で、インストラクターとかライフセーバーの人達を通して、環境や島の自然を護る姿勢を、観光客と共に育成して行きたい。

最後に、今回は日間賀島での試みが初めてであったもので、結局、環境チケットも工作教室の引換券みたいなものに過ぎなかったのですが、地域通貨というのは、通貨と言うだけ有って、本来ならぐるぐる循環しなければならぬものだと思います。海をきれいにしようという掛け声は正しくて良いことですが、だれでもそれは口にしますが、それは、掛け声だけで、実際には終わってしまいそうなことです。地域通貨と言うのは、みんながいいことをしようと言うときの後押しをする潤滑剤とか促進剤の役割を果たすと思いますので、今日講演をされた、森野さんは事務局のいらぬ借用証書タイプの地域通貨というのがありまして、ご自分でそれを普及させておられます。いろいろな地域通貨、手法がありますので、私も含めて、是非みなさんも、せっかく作った環境チケットがぐるぐるまわるような継続的な活動になるよう、是非、地域通貨をやっているもの一人としてやっております。

時間が余ったらお話ししようと思っておりましたが、これは、チケットではなく、大福帳のようなもので、銀行の通帳のように書きこむやり方のものです。

7) 加世田市、枕崎市の海洋環境貢献活動について

菊野憲一郎 鹿児島県加世田市 アトリエ熊、タノカンの家代表

菊野でございます。鹿児島県の加世田市という所から参りました。一昨年から、3回目ですか、今年の1月になりまして、菅原さん、鯉江さん、松本さんのご協力いただきまして、活動をいたしましたので、御報告を致したいと思います。

場所のご説明を致します。日本列島の一番南の端、薩摩半島と言いますと左側の半島になります。上のほうが加世田市、下が枕崎市です。日本列島のどんずまりでして、吹き溜まりと云いますか、ゴミもいろいろ集まるんですが、人もユニークな人がおまして大阪や東京からかなり流れ着いている人たちがいます。そういう人達と一緒に活動をしています。

加世田市の人口は2万4千弱。一番北に万之瀬川という川がありまして、その河口で活動を行いました。加世田市というのは、島津の系列の日新公という人の城下町だったんです。ここでは城下町や砂の祭典というのが有名です。クジラが漂着したことでニュースになったこともあります。

万之瀬川ですが、自然が豊かなところでして、左端の花ははまぼうという大群落がございます。西日本一の株数を誇っている。右側の蟹は、ハクセンシオマネキと言う名前です、全国最大の群生地と言われていています。下の鳥はクロツラヘラサギという鳥が冬場飛んでくるわけなんです、世界に5、600羽しかいない。そのうち20羽くらい飛んで来ます。右側はハマグリ、アサリ、大和蜆が採れます。それを生業として採っている方もいます。この河口一帯で、今年で20回目でしょうか、砂の祭典が行われています。鹿児島でも大きな祭りになっております。3日間から5日間ほどで、砂像を作るんですが、昔は海岸でやっていたんですが、だんだん海岸が侵食されなくなって、今は内陸部の方でやっています。海の方からはなれたようなお祭りになっています。

その期間を利用して一昨年、海岸にテントを張りまして、海上から歩いて5分ぐらいのところ、やりました。右側は前の海岸であさり採り。ゴミを拾って、右下のものはゴミが集まったところです。ここのゴミの特徴は、中国、韓国、台湾からのゴミ、それぞれの言葉が書かれたゴミが相当漂着します。イベントの風景です。左が受け、風が強いのでテントをはりました。松本さんに用意していただいた工作材料。現地で拾ったもののサンプル。実験的に環境チケットをやってみよう「エコサンドキップ」と名前をつけました。

これをゴミを拾ってくれた方に一人2枚づつ配った。3日間で230名の参加があり、460枚の券を配りました。1枚は工作教室でだいたい使われ、残りはメイン会場でいろんなサービスを受けてください、と。いろんな食品や商品の割引に使えますよと言ってお配りしたのですが、後で、メイン会場で回収しましたところ、実際に会場で使われたのが20枚ほどしかなかった。実際の地域通貨として回ったのが1枚しかなかった。それは4回回ったという非常に貴重なものでした。ちゃんと裏側に使った人のサインや、店の名前を書いてくださいと言ってあったところ、その1枚には4ヶ所分書いて

あった。1枚だけですが、そのイベント会場で、ちゃんと地域通貨として回ったものがあったということです。

イベントでこういう形でまわすのは無理だなと今は思っています。もう少し簡単な、例えば、ペットボトルを熱処理して、コイン状にするなど、もっと簡便にしないと、とてもサインしたりは無理だなと言う風に思っています。実際、思ったような地域通貨の効果は出なかったし、使い方も出来なかったのは残念な結果です。

次に枕崎市を紹介します。加世田の南側にあり、人口は殆ど同じ位で2万5千ちょっとです。カツオの漁港で有名なところ。鰹節が日本全国1位です。芋焼酎、さつま白波の発祥地です。さつま酒造というのがありまして、今は全国区になってまわっています。かなりの商業都市です。加世田は城下町でして、加世田とは昔から仲が悪いと聞いています。

漁港の全体像。向うに富士山のように見えますのが開聞岳という山です。更に向うが佐田岬、大隈半島が見えています。このように大変美しい海岸がございます。私共がイベントを行ったのは、漁港の付け根。港のちょっと上のあたり。ここにはウミガメも産卵に訪れます。海岸は砂浜ではなく、玉石の海岸なんです。この南薩摩自体が岩や石の海岸です。鰹節の天日干しをしているところで、これは鰹節の中でも最高級品です。高級料亭にしかいかない、地元で1本3千円位だそうです。右側は、夕日を見ながら入れる露天風呂。自然景観、資源に恵まれたところ。

漁港の直ぐ上の恵比寿海岸というところでイベントを行いました。テトラポットにびっしり囲まれています。ここは台風銀座でして、毎年2、3個の台風が押し寄せます。煙が見えると思いますが、これは鰹節を燻している煙です。その煙が今の時期だと1日中漂っています。工場は海っばたにあり、波が押し寄せると大変だということで、テトラポットで囲んであります。

掃除も、テトラポットの中に子供が入ってやっていたんですが、非常に危険です。危険ですが、ゴミが物凄く溜まっている。溜まって、粉碎され、非常に細かなゴミになって、また出て行く。ゴミの巣のようになっているので、清掃の仕方はこれから、大変な問題になる、と考えています。下は同じですが、玉石の海岸です。玉石と珊瑚のかけらがかなりあります。右はゴミを集め、環境チケットと交換している風景です。45分間ぐらいの作業で、軽トラック2台分のゴミになりました。どこでも同じでしょうが、殆どがプラスチックゴミ。いわゆる燃えるゴミは殆どなかったです。その後、環境チケットを使い、近くの児童館で工作教室をしました。スタッフを含め70人ほどの方に集まっていた。会場が狭いせいで、混雑しました。松本さんの方で用意された資材を取るのがケンカ腰でとらなるといけない状況になってしまった。子供に人気があって、殺到するんですね。右下が完成後の記念撮影です。

私は、このイベントをするにあたり、模造紙で6枚程の説明パネルを用意して、なぜここに集まったのか子供たちに聞いてみたり、重要だと思われるゴミの話などをした。ほっておくと、遊び気分、

まあ遊び気分でもいいのですが、やはり、ゴミの問題をきっちりと何処かで、伝えて行かなければいけない、と。どういう努力をしないと行けないんだよ、とつたない絵と喋りでやったわけですが、この辺がこれから工夫して、山から川が繋がっているんだという、ビジュアルにどこでも使えるような絵やパネルを工夫して作って行きたい。こういう話は全国に共通な話だと思いますので、そういったものも、みんなと協力して作っていったらいいのではないかと、思いました。これは、会場に用意した地元の材料です。基本的には松本さんの用意された華麗で繊細な物を使用しましたが、地元を探すと様々なものが見つかりました。貝、うにの一種の殻、ガラス（シーグラスと溶岩の混ざった物）、右側が小石。山の物としては、松ぼっくり、どんぐり、松葉。九州は竹が海岸に流れ着くので竹、へちまも里の物として工作に利用しました。地元を探すといろいろあるので、こういうことも、これから努力して行き、こういったイベントを面白くしていったら良いのではないかと考えています。

鹿児島大学水産学部の藤枝繁先生が、鹿児島でずっとクリーンアップキャンペーンというのをされている。2003年の報告書で、鹿児島のゴミはどういう状況になっているかをお話したいと思います。

国際基準に合った表になっていますが、流出起原別にわけますと、陸上起源が半数を占めている。陸上起源と言いますと、日常生活、レジャー、嗜好品といったものが半分。次に多いのが破片、かけら類、これが45%ぐらいある。これは何かと言うと、起源が分からないゴミ。ほっておかれて日常生活から出たゴミがテトラポットに入りこんだり、砂に潜りこんで分からなくなって、紫外線や波の力で砕かれたゴミが再度散らばる。テトラポットのように二次的にゴミの発生源が出てきてしまっている、という状況だと思います。

意外と、海上起源類という産業、海のレジャーから出るゴミが6%と少ない。ただ、これは拾えるゴミ。海に潜ってしまったり、海底などに堆積したゴミは分からないんです。これは、藤枝先生にお聞きしたところ、海底のゴミを取るなんて至難の技だよと。海底は平ではなく、いろんな岩礁がある。が、漁業に物凄く影響を与えるので、これが非常に問題であるということです。

アイテム別のワースト10で言いますと、8位くらいまではプラスチック製品。鹿児島の場合、漁業が盛んなので発泡スチロール。EPSと書いてありますが、発泡スチロールの破片の小さいものと大きいものを併せますと17%になり、一番多くなるという問題が出ています。

年度別にワーストアイテムを見ますと、2003年には新たに食品の包装や容器が出てきます。こういう今まで無かったものとか、急上昇している物として、シートやコンビニの袋の破片というのがあります。自分達が日常関わっている物が流れてきてしまっているというのが伺えると思います。

藤枝先生としては、今後、この深刻な問題をどうしていくか。いろいろな課題を挙げますと、日常生活ゴミが半分を占めている。これはライフスタイルの改善や啓蒙活動を粘り強くしなければいけない、ということです。現実的な活動を永続的にしなければならないという事です。二次発生の破片、これが45%ぐらいになっているので、これをいかに片付けて行くか。これは未来永劫消えないんです。

ほっておけば、細かく砕けて世界中に流れてしまう。更に生物の体内に入りこんでしまう、という問題が起きているわけです。海上起源ゴミというのは、殆どが産業起源の物なのですが、浮いて拾える物以外の問題は全然解決出来ていない。

例えば、養殖のえさ。ああいうものが猛烈なヘドロとして海底に沈んでいるが、そう言ったものは調べようが無い。海と言うのは閉鎖系で、世界中繋がっているわけですから、海洋ゴミというのは、世界共通の問題となっている。世界中に、クリーンアップキャンペーンなどを通じながら、訴えて行く。努力して行くことが必要と思います。

鹿児島湾は発泡スチロールゴミが圧倒的に多いのですが、いけすの浮力帯として発泡スチロールの塊を使っているのですが、3千円の物に処理費用が2千円もかかってしまうので、殆ど放置されています。放置され、どう使われているかと言うと小型船舶の防弦材、ショックアブソーバとして使われています。それでもダメになると捨てられる。これは相当細かい粒子になり飛散している。処分には、海水を含んでいるので焼却もできない。ダイオキシンの問題がある。運搬するにもカサがあるので運搬費用もばかにならない。という様々な問題があるので、藤枝先生の方でも、新しい発泡スチロールを圧縮して溶かす方法を考えたりしているそうです。

考えると、深刻な絶望的な面もありますが、一方で海の大切さ、美しさなどを訴えながら、子供たちにどう、具体的に現実的な活動、有効な活動を伝えて行くか、広めて行くかを考えなくてはならない。

今日はいろんな方々の御意見も聞け、大変勉強させていただきました。どうもありがとうございました。

8) 「来れば来るほど美しくなる宮古島の海辺」海浜清掃 ECOバカスの可能性について

猪澤也寸志 沖縄県平良市(宮古島)エコガイド教育コンソーシアム代表

宮古島から参りました猪澤也寸志と申します。宮古島の場所は皆さんもう御存知だとは思いますが、沖縄本島と台湾の丁度真中当りです。沖縄本島からまだ 300 キロぐらい南に行ったところに宮古島があります。宮古島が一番高いところで、標高 100 メートルぐらいの平べったい島で、川がありませんので、沖縄県では一番海がきれいな島、と言われていています。あと、砂浜が天然珊瑚がパウダーサンドになった、雪のような砂のあるビーチが沢山ありまして、本島に海を楽しむのでしたら、宮古島はすごくいいところですので、是非お越し下さい。羽田からですと、安い時期ですと 3 万円台で、2 泊 3 日のリゾート宿泊のツアーとか大阪からだと、2 万円台ぐらいで 2 泊 3 日で遊びに行けますので、是非何かの機会に起こして下さい。

実は、私今日は自費で参っております、やはり、宮古島から那覇からむこうに行くのは結構安いのですが、宮古島からこっちへくるのは、結構高くて、こちらに 3 日ほどいると、10 数万使うんですけど、じゃあなぜ自費でここまで来て、こういうことをしゃべるか、と言いますと、SOF の海洋政策研究所はお金を 1 円も出さないんですね。これが、我々すごく、有りがたいんですね。なぜかと言いますと、お金は一時的なものなんですね。あれば使ったら終わるんで、無くなったときに持続性がない、継続性がない、ここでいう、継続的活動になりにくいんですね。ところが、SOF は何を出していただけるか、というと、人を出してくださるんですね。最初に御講演いただいた森野先生、それからもちろん菅原さん、それから後ろでカメラをとっておられる松本さん。本島に熱心に、宮古島のことを思って、いろんなことを御指導いただいたり、現地で汗かいていただいたり、こういう人をだしていただけることで、こういう活動が継続して行く、ということで、僕はこの SOF のやり方が凄く好きなんですね。お金が出ないから、口も出ないんですよ、自由にやらせてもらえる。逆にそれは、凄くオリジナリティを保って、先程まで報告があったと思うんですが、ひとつ、オリジナルだと思うんですよ、地域地域ですね。

これはやっぱり、このまま継続して行っていただきたいと思っております。ひとはどんどん出していただければ非常に助かります。最後に提案で、今日パネリストとしても喋らせていただけるみたいですので、SOF にして頂きたいことの提案というのは、人と、もうひとつはシンクタンクとしての、これからどういう風にこれを継続させていけるかと言う中で、今後こういうことをやって行って欲しい、ということは、あとのパネリストとして喋らせていただきます。

宮古島の観光の実情は、来れば来るほど観光が侵食されています。見事に海は汚れて行きますし、大きなホテルが建てば、それだけ排水もでますし、ゴミもでますし、観光客は海の中がきれい、ということで、ま、きれいなんですけど、ずーっと泳いでいって、素潜りで見ると、でも、潮は大潮のときだと、2 メートルぐらい水深が変わるのです。行きの場合はすいすい泳いで行って、2—3 時間遊んでいると、帰りが潮が引いてかえってこれなくなるんですね。でも、観光客と言うのは、珊瑚

の上をギンギン、この上を歩きながら帰ってきちゃうんですね。やはり、知識が無いんで。そういう意味でも、観光客が来れば来るほど、観光侵食しているのが沖縄の実情です。われわれどうするか、と言うと、沖縄がこれから自立していく上でも、やはり観光産業と言うのはとても大切なんです、ただの観光産業というのは、やはり植民地型ですね。旅行代金のほとんどは、飛行機運賃とリゾートホテルの宿泊代金で、地元には落ちるはずが、という、こういうタイプの観光をいつまでも続けても、なかなか地元の自立策につながっていかない、ということで、複合観光産業という提案をしています。この複合観光というのは農業とか、水産業、地元のサービス業とか、それから教育ですね、エコ・ツーリズムとか。地元の方が実際に、主生計が立っていくような複合観光です。それを今、目指しています。

その中で、われわれの目標は「観光客が来れば来るほど美しくなる」、これをどういう風に変現して環境省の方もいらっしゃると思いますので、よく御存知だと思いますが…。ただ、行政は戸惑いがありまして、エコ・ツーリズムというのは環境への負荷を出来るだけ軽減させるために、ガイドを伴って先程言ったような侵食が無いようにするのですが、そうすると、ガイドの数とか、まだまだ育成されていけませんので、扱える観光客数が限られてくるわけですね。反面、沖縄県は観光客を倍増しようと言っています。今、550万観光客ですが、できれば、1000万に近づけて行きたいというぐらいの勢いがあります。行政現場では、エコ・ツーリズムを推進して自然を守りなさい、というかたちと、いやいや、観光客を倍増させていきなさい、ということがある。観光現場では、では、どうしたらいいのだ、という戸惑いがあるのですが、それを我々は、エコ・ツーリズムでいいますと、西表島や沖縄北部のヤンバルというところがとても有名なのですが、宮古島は先程言いましたように、平べったく、奥深さがない。川が無いし…。では、どうすればいいか。我々は、エコ・バカンスという提案をした。何かと言うと、先程の「来れば来るほど…」という経済の車輪と「来れば来るほど美しくなる」という環境の車輪の両方を回す方法はないか、という事ですね。それをエコ・バカンスと定義して、我々は活動しております。その活動のひとつとして、菅原さんに御相談したところ、海浜のゴミを観光客に拾ってもらおうじゃないか、という発想をしたわけです。これって、すごいことで、お金を払って、わざわざ観光に来て、ゴミを拾わせるのか、ということになるのですが、これはもともと砂浜でゴミを拾うということは、遊びの一環ですごく楽しいことだ、という逆転の発想と言いますか、どういう風にやったかと言うと、簡単に説明します。2回やりました。昨年2月と6月に80人と60人。観光客だけでなく、地元の子供達も一緒にやりました。共催をSOFの方にさせていただきました。宮古島からさらに永良部島という島に渡るのですがそこにトグチ(?)の浜という素晴らしい浜があります。東洋一といわれるビーチですが、そこで、まず、船で観光客と宮古島がわの子供達もこの船に乗って永良部島に行きます。そして、裸足で海浜清掃したんです。裸足で歩いているだけで、凄く気持ちがいいんです。ここはすごくきれいなビーチなので…。では、きれいなビーチに何の為

にゴミを拾いにいくのか、海浜清掃をきれいなビーチでやるのか、というのは、すごく mismatch のような気がしますが、これが、実は違うのです。なぜかと言いますと、目標はゴミひとつない美ら浜を子供達と観光客で実現しよう、と。どんなにきれいなビーチでも、ごみひとつは落ちていると思うんですね。でも、「みんなで、このきれいなビーチからひとつもゴミがないというところまで、みんなでやろう」というのが、目標なんですね。

なぜ、このような目標を立てるかという、担い手が子供達と観光客ですね。地元のひとが落としたゴミを観光客が拾うという発想なので、これは、子供達とか観光客が、美しい宮古島をもっともっと美しく保っておきたい、という気持ちに対しては、モチベーションが高いんですね。こんなきれいは浜に、ゴミが落ちていることは許せない、と言いながら、みなさん拾ってくれるんです。そこで、子供達も、こんなきれいな浜にゴミは無い方がいい、ということが解るわけです。宮古島にもとんでもないゴミが落ちているビーチがあるのです。台湾から流れたゴミとか、とてもじゃないが、人間の手ではどうしようもない、というような崖下のビーチとかあるんですが、じゃ、それはだれがやるのか、ということになると、それは、宮古島の人達がやるべきことだと思っています。なぜか、というと、やはり、自分達が出したごみなどで、実は10月1日に宮古島が合併します。宮古島本島には4つの市町村と、伊良部島の方には伊良部町というのがあるのですが、この5つが合併して、新しい新市が10月1日に出来るのですが、今、提案しようと思っているのは、新市になる前に、すべての市町村がまず、徹底的にゴミひとつない市町村を実現しよう、と。きれいにしてから、合併しましょう。ですから、最後の皆さんの役割はゴミをきれいにして、ゴミひとつない市町村で合併して、新しい市にはゴミひとつない、というような運動を、今から約半年ありますので、なんとかそれを達成できるように盛り上げて行こうと今、やっています。その成果としては、岩手県に宮古市というところがありますが、宮古島も宮古市という名前をつけてしまいまして、合併行政の集まりの29人で決めたんですが、彼らが宮古市からクレームがついても、かたくなに宮古市にこだわったので、29名で島の名前を決めるのはおかしい、島の名前は全島民で決めましょう、ということで、われわれが、そういうシンポジウムを開催しまして、市民をあつめ、またその他アンケートなどとりまして、最終的に3日ほど前の合併協議会で3回否決されていたのですが、その場で要請しまして、その場で公式アンケートをとるということに決まって、公式アンケートで多いほうの名前にする、という、それは宮古市と宮古島市なのですが…。多分、趨勢としては宮古島市になるような感じです。

要するに、これから合併したあとは、行政がなぜ強かったか、というと中央からの予算があったからできた形です。合併したあとは、行政にお金がないので、やはり、市民が自ら運動として動かない限り、何も前に進まなくなってしまう合併後の状況がありますので、これから、名前は市民で決めた、その新しい合併に向けてきれいな島にするのも、市民が提案をして、やるのは行政職員が一丸となって、そこをやればよいと思っています。行政職員も合併する前なので、市町村の残務処理と新しい行

政の処理に奔走しているのですが、行政と市民が一体となって、市町村をきれいにしてから、合併するという方向に今後の提案を持っていきたいと思っています。

海辺を楽しむ、という、これは、地元の方が散歩しながら拾っていただいたり、あと、協賛商品の抽選会をやったのですが、協賛品というのはすごく集まるのですね。チケットで・・・と言うのもあるのですが、われわれ直接的に協賛品を集めたのですが、だいたい、地元の商店やホテルに行き、こういうことをしたいのですが、というと、自分達は忙しいから行けないのですよ、という話がでます。だったら、皆さんがやるので、何か協賛商品が出ませんか、と聞くと、協賛商品ならいくらでも出しますよ、という形で、リゾートホテルの宿泊券とか、おすし屋のにぎり1人前券が10枚とか、いろいろ出るのですが、そういう形で自分達は汗はながせないけれど、協賛はしますよ、というのが出るので。あとは参加した方に、これは環境チケットということで、教室の方、これは今後ろでカメラ撮っておられる松本さんの力が多大でして、彼の思いが皆さんに伝わって、笑顔になっていく、というのが本当に現れているのですが、その工作教室では、子供達も楽しんでますし、本当に子供達は夢中になっていきます。観光客も大喜びで一緒にやっています。

来れば来るほど美しくなる、ということで、私達が他にやっていることは、JTBとか大きな旅行代理店がほとんど商品化してもらっていますが、さんご礁の定点観測をシュノーケリングの中で、シュノーケリングを楽しんだあとに、こういう水中ガイドブックで、魚とか珊瑚の名前を学習します。水中でもはっきりと見れるのですね。こういう学習をしながら、大事な珊瑚を定点観測をして守っていきこう、ということで、こういう珊瑚の定点観測とか、カヌーで遊んだりします。2005年はマングローブを手がけます。マングローブの植林というと、タイとかフィリピンに行かないと植林する場所がないように思われているようですが、実は宮古島には沖縄最大の干潟がありまして、ヨナハ湾といまして、700ヘクタールあります。今まで、沖縄本島の抱瀬干潟が4百何十ヘクタールでということか、沖縄最大といわれていたのですが、実は宮古島に大きな干潟がありまして、マングローブの植生域が結構あります。観光客に来てもらって、一本一本植えてもらって、宮古島には山がないので、まさに海辺の森をつくっていきこうということで、そこに魚が付き、水がきれいになり、マングローブも植えるのはこんなに細いものを植えるのですが、育てば5年、10年で、南洋備長炭ができます。南洋とつく備長炭はもとはマングローブです。30年ほどすると、桧のようにしっかりとした堅い樹になります。これは建築材として使えますので、こういうのを観光客と共にどんどん植えていきこうということで、みんな泥につかって、汗まみれになってやります。第一回目は1月9日に皆さんに来ていただいたのですが、品川のロータリークラブの方々が30名で来ていただいて、約200本のマングローブを植えていただきました。こういう事例もあり、そのロータリークラブの中ではこういう例ばかりではなく、ロータリークラブはどうもお金を出して汗を流さないという習慣があったようなのですが、本当かどうかは知らないですが、これを機会に、やはり汗を流す方がいいという流れが

あるようで、今、ロータリークラブの中でも、横の流れでいろいろと出てきているようです。

我々のこれからの計画としては、自然再生推進法（環境省、国交省、農林水産省）というのがあり、例えば、宮古島のヨナハ湾の700ヘクタールの自然再生全体構想というのを作りまして、それが認定されるとその中で実施計画に落とし込んでいける、という流れがあります。それは、予算がなければ、出来ないというので、何も進まないの、最初は一部の地域に限定して、観光客と一緒に、パイロット事業でやって行く。その成果を見せながらいずれは、環境省、国土交通省、農林水産省とのからみから、自然再生の公共事業を宮古島に誘致できるようにしよう、ということで、結構中央からの予算が沢山だったので、宮古島も建設業だらけなんです。小さい建設業が多くて、ここにもきっとゼネコンの方もいらっしゃると思うので、失礼なことなんです、沖縄の事業と言うのはだいたい元受は中央ゼネコンです。9割方中央ゼネコンで、宮古島に残る事業と言うのはずーと下のほうの風下の事業しかないの、予算はついてもなかなか自立の事業にならないのですが、この自然再生事業というのは、わりと小さいこまめな事業なので、宮古島の建設業者でも十分対応できるので、これからの新市の計画の中ではこういうこともしっかり取り組んで行きたいということで、今やっております。自然再生のパイロットプロジェクトです。

あと、2005年にはこういうことを考えています。企業がボランティア休暇ということを採用していますので、ボランティア休暇でマングローブの再生とか海浜清掃とか、さんご礁の定点観測とか、そういうことを宮古島に来てやっていただけるような御提案とか、自然再生の修学旅行とか、あと、環境だけでなく、自分の健康も再生していこうとするロハスというのが、今人気なんです、ロハス・ツアーとかです。あと企業のCSR研修につかってもらおうということで、このCSRのCをコーポレートイデオロギイという企業の社会的責任ということだけで考えると、これには答えが無いんですね。このCはあと2つ意味がありまして、これは全く僕の私見なんです、もうひとつはコンシューマの社会的責任。だから、消費者は何を買って、何をを使うかということにおいては、社会的責任をもっているんですね。企業が売るからそれを作った企業が悪い、ではなく、それを買ったあなたが悪いんだということが、われわれ宮古島のような閉鎖した島では、特にそういうことははっきり、目立ちます。あと、最後のCはコミュニティーの社会的責任です。企業は消費者に本当に支持される、地域に役立つものを作って行かなければならないと言う時代になっているわけですから、そういうCSR研修を東京の都会のビルのなかで幾らやっても実感できないと思いますので、そういうことも含めて、宮古島でこういう企業のCSR研修というものを今後取り組んで行きたいと思っております。

9) 九州・海ネットワーク 2005(鹿屋市、宇土市、伊万里市)の活動について

下津公一郎 鹿児島県鹿児島市 NPO さつま代表

鹿児島から参りました下津です。九州の18の市町村に呼びかけ、SOFの御提案の海洋貢献活動をみんなでネットワークしてみよう、ということをご提案致しまして、今進んでいますので、そのことを報告します。この背景の中に、2004年日本ぐるっと一周海交流ということで、日本国中をリレー形式でいろんな海の町のひとが参加しながら、日本を一周してみようよ、という企画がありまして、この日本の海をもっと活用したいと願う人や、海同志の交流を活発にしたいと願う人、海の問題を解決したいと願う人、海で子供達を遊ばせたいと願う人、そういうことに賛同した人が参加しまして、約4ヶ月かけて、日本を一周しました。その中で私は九州のいろんな地域を結ぶ役目として事務局を担当いたしまして、そこで、いろんな九州の海の町の人たちと出会いました。地域作りをやっている人とか、海の活動をやっている人とか、様々な人に出会いました。その中で、生まれたのがひとつのネットワークです。沖縄まで含めて、石垣島まで行ったのですが、この中で、持っている問題は様々であるが、だいたい共通したものを皆さん解決していきたいということが一番大きな共通点で無かったかなと思っております。

その中でSOFの提案がありまして、せっかく出会ったそういう人が知り合ったものを何かもうひとつのテーマで手を合わせて社会の問題を解決できないかなあという事で、ぴったりの事業がSOFの提案の事業でした。それで、この事業をそれぞれの町の知り合った仲間に御提案したところ是非やりたい、ということが生まれまして、今継続中ですが、先日鹿児島県の枕崎、加世田市、鹿屋市、熊本県の宇土市、佐賀県の伊万里市とやってきているのですが、同じ問題を抱えていると言うことは、同じ県の中でも、まだまだ沢山の人が何かきっかけがあれば、いろんなことをやりたい、と言う人が多いのですが、このテーマが見つからないのですね。みんなで共同でやる、ということが見つからないのですね。これをネットワークというひとつの連携をしながら、1つずつ足もとのことをまず実践してみるということが、今回の事業の中で取り組んだことです。こういう中で一番重要なのは、もちろん、子どもから大人まで、高齢者の方まで参加しながら、地域ぐるみで取り組む体制がどんどん出来あがるということしかない、と思うのです。足もとのゴミをひろっても、また、隣りのところから流れてくるとか、そういうことを防ぐためにも意識の高い環境の問題がものすごくひどくなっている現状ですが、こういう問題を解決していくためにはどうしても人の力しかない、ひとが手を取り合って、一斉に実施して行くと本当に少しずつきれいな山とか、川とか、海とかが生まれてくるでしょうし、こういう一体となった取り組みが必要で無いかと思えます。

沖縄まで入れて九州8県で、ネットワークをして、今後、取り組んだ町がまた隣りの町に伝えて行く、そういう細かい作業になっていくように、まず、知り合った仲間達はその県で広げて行くということで、今、18の町が賛同したところです。これが、今後広がっていくように私共もやっていき

いと思っています。

これは、熊本の宇土マリーナから丁度雲仙岳が見える対岸のところで海岸ゴミ拾いをしまして、これは、全国で行われたものと全く一緒なのですが、循環型の社会について、子供たちに学んでいただく。これは非常に子供たちに人気がありまして、今も大事に育てています。生き物の育つ大事さを学んでいます。

九州海ネットワークがめざすものということで、海は人を鍛え、育て、元気にする。海から日本を変え、日本を再生しよう。こういうスローガンを抱えて、共通の課題、問題を共有しています。やはり、共有しないと行けないと思います。そして、連携して、問題の解決にあたる。ひとつの町だけでは、どうしても解決できないし、それが、連携して問題の解決にあたる。そういう意味では人のネットワークがとても大切である。人と人とが交流を深める、人と海とが付き合うための海の交流拠点、海の駅のネットワークを作る、これは同時に進めています、海の駅という拠点があることによって、人が集まりやすい。そういう同時に海の駅を全国に作りながら、海の駅の仲間達が共通の問題を共有しながら解決していく、という事であります。それと、子供たちに海を体験させ、元気な子供に育てる。やはり、それを我々の世代がしないといけない。次の世代、子供たちに、知ってもらいたいことを我々が残す努力をしないといけない。海の町、山の町の交流を深める。先ほどから何回も出ていますが、海山の交流が非常に大切だと言うことです。

それから、新しい時代の始まり。地域づくり読本、これは10何年前に出された本なのですが、この10何年前にだされたことが、まさにまだ、今から大事なことになっている。本当に今は地球時代ということですが、先程からの発表の中でも、地球規模で物を考える時代、足もとの小さなことをしながら、地球規模の視野で物を見るのが非常に大切である、と東南アジア、韓国、中国からゴミが流れて来たり、反対に日本の物も流れて行っている可能性もありますし、やはり、アジアとも連携しながらこういう問題を考えて行く、これは非常に大切です。もう足元にそういうものが転がっているわけです。これが非常に大切だと考えています。

お互いの文化を理解しあったり、そういうものから問題の解決にあたる。それと、自然再認識の時代。大量消費、大量廃棄型の社会は、これまで、自然を随分侵してきました。これを回復して、創出し、健全な姿で次の時代に残して行く、ということを皆が真剣に考える時代に来ているのだと思います。それと、少子高齢化という時代になると特に人的交流や、地域間の連携がますます重要になってくる。こういうことをしていかないと、地域の産業も、環境問題も解決していかないのではないかと。新地方の時代。地方分権が叫ばれて久しいですが、なかなか進まなかったり、今、地方の人が自立しながら、自分達が自立して行くのだ、と言う考え方が住民の側に必要で、そういうものが生まれて、初めて地方分権が可能になる。自立して行くということが大切であるのではないのでしょうか。それは、住民自らが立ち上がる、ということだと思います。そういうものをひとつひとつやっていきたいと思

っています。

本格的な高度情報化の時代。情報も非常に手に入りやすくなっています。沿う言う意味では国際的にも、いろんな連携がとれて行くでしょうし、日本国内でもまだまだ連携が撮れていません。先程の「にほんぐるっと海交流」をやって、北海道の人とも仲間になれました。東北の人達とも仲間になりました。やはり、何回か会議で会う間、そして、お酒を飲んでいろんなことを語り会えば、やはり仲間として、海を思う仲間として、声をかけたときに、じゃあ、一緒にやりましょう、という言葉がすぐに出てくる。こういう情報化の時代ですから、連絡のとりやすい時代になりました。今、とりくんではいるのですが、私共の鹿児島県に吹上浜というきれいな砂の祭典がありましたが、この浜もほとんど松食い虫にやられて、殆ど松が枯れました。今、その再生事業、一万本毎年植えたりとか、そういうことをやっています。それと、こういうものを活かしたエコ・ツアーに取り組んでいます。

地元学という、地域に住んでいる人達が、まず、自分達の地域にある資源、そういうものをもう一回見直して、自信を持ってもらいたい。どんな地域を見ても自分達のところにはあまり、いいものがないとか、そういう答えが返ってくるのですが、足元にころがっているいいものがころがっているし、それを大人から子供からお年寄りまで、一緒にまわりながら、もう一回地域に誇りを持つことで地元学というものを各地域で実践しております。

祖父母時代に学ぶ地域学。これも高齢者社会になって、お年寄りにはものすごい知恵と技術を持っておられる。今、それを活用しないと途切れてしまうような文化が、地方にもとても多い。ですから、そういうことをすることによって、エコ・ツーリズムでもそういう人達に先生になってもらって、指導してもらったり、元気な年寄りをつくるということが、福祉の分野でも必ず、元気なお年寄りが生まれれば医療費でもそういうものが、少しでも町の財政にも役立って行きますし、これからは、こういうことが高齢化の時代を迎えて必要ではないかということで、出版物にまとめたり、そういう指導をしてもらう先生の役になってもらうとか、ということは今、進めています。

まとめて、言いたいのは、これから情報化の時代で、これから、パソコンとかコンピュータとか進んで行きますが、それと反面に一番「人」がクローズアップされないといけない。じゃあ、人のクローズアップは、ネットワークしたり、仲間を作ったりとか、それでひとつのことのテーマで目的にむかって行く、これは多分解決できると思う。いつの時代もそうやって来ていますし、こういうネットワークを今後、全国に広げて行く。まず、九州でいいモデルができたなら、四国、本州、北海道の人達と取り組んで行きたい、そういう風に思いながら活動をやっております

4.2.7 パネルディスカッション

テーマ : 地域活動の広がりへの期待

パネリスト : 森野栄一、鯉江正雄、下津公一郎、小山恵子、猪澤也寸志

コーディネーター : 大塚万紗子氏 IOI 日本事務局長、文部科学省科学技術・学術審議会海洋
開発分科会委員

大塚 鹿屋、宇土、佐賀の伊万里の海岸海浜清掃と工作教室に参加させて頂きまして、こちらにいらっしゃる下津さん、松本さん、菅原さん、工藤さんと御一緒に活動をしたんですが、皆さん熱心に、子供たちへ楽しく環境教育をされている姿に感動しましたし、感銘を受けました。ゴミというものが能弁に語っているということを実感致しました。海岸にあるゴミを見ているとその辺りにどういう産業があり、どういう海の使われ方をしているのか。例えば、ゴミ拾いをしていると、ゴロツと自転車が転がっていたり、ガラスばかりが落ちていたり。これは何処から流れてきたのか。また何処へ流れて行くのだろうか。

子供たちもきっとそういった目で海岸清掃をしているのではないかと思います。外にある色んな道具を見ていただいたと思いますが、常滑の方が色んな工作キットを作っているんですが、最初は30種ぐらいの貝殻や木片であろうと思っていたら、なんと160種や200種といった種類を集め、しかも山の恵み、里の恵み、海の恵みというものが子供たちに良く分かるように展示されている。その中の材料を好きなように使い工作が出来る。勿論、海岸でも自分たちで好きなものを拾ってきている。海という物を媒介にして、子供たちは山から、里から色んなものを学んで行ける。という非常に良い機会を皆さん作っていらっしゃる。

パネラーの方を御紹介します。まず、山形県酒田市酒田港おんな港会議の事務局長 小山恵子さんです。地域の活性化の為に次々とプロジェクトをやってらっしゃいます。そして愛知県常滑市観光協会マリナーズ代表の鯉江正雄さんがいらしてます。SOFの菅原さんと、このプロジェクトの基本的なモデルを考えられました。そして鹿児島県NPO さつま代表下津公一郎さん。九州地区でこの活動をどんどん広げて行きたい。綺麗にしたいという夢を持ってらっしゃいます。そして次が、沖縄県宮古島エコガイド教育コンソーシアム代表の猪澤也寸志さんです。環境産業をしながら来れば来るほど綺麗になる宮古島、そして地域のことを考え、島は地球のモデルみたいな場所と頑張っておられる。最後になりましたが、ゲゼル研究会代表の森野栄一さんです。地域の在り方、経済の在り方というものが問われている時期であります。地域通貨をとおして、それらを問い直してどういった社会を建設して行けるかを具体的に活動してらっしゃいます。

それでは、皆さん宜しくお願いします。

パネルディスカッションでは、今まで御報告にあったような活動をいかにつなぎながら、しかし自立的であって、同時に助け合えるもの出来るかということ語って頂きたいと思います。それぞれ

非常に良い活動をしてらっしゃいますが、それぞれ孤立しては勿体無い活動ですので、これを日本の津々浦々の海岸にどうやって広げて行きたいか。またどうやって手を繋いで行けるか。お互いにノウハウを提供しあったり、助け合っていけるのが大切であり、それぞれの地域の持続的な活動として、どうやったら定着させていけるかを考えて行きたいと思います。

その中で地域の商工会議所であるとか、企業、役所、学校など他のコミュニティとどうつながっていけるか。どうやって一緒に働いて行けるかも考えていきたいと思います。

ひとつは環境チケット。環境チケットを使いながら、今の経済の仕組みを変えて行く突破口にもなりそうなものがございますし、使っている方々、これから使われる方々にどういう所がやり易く、どういう所がやり難くて、どういう風になっていったら意味が出てくるのかを話し合ってもらいたい。次に地域参加、地域社会の中で活動を継続して行くためにはどういう風にしていけば良いか。今までの御苦勞やこれからどうやって行きたいかと思うところ。そして、この活動がどうやったら持続的に津々浦々に広がって行くか、ネットワーク作り、共に働いて行ける方法。この3点について話し合ってもらいたいと思います。

それでは、まず第一の点として、環境チケットを中心に話して頂きたい。先程は地域の代表としての報告をされていたと思いますが、ここからは自分の自由な発言でお話していただきたい。まず、小山さんからお願いします。

小山氏 はい。酒田では環境チケットをやっていないのですが、隣町の鶴岡でやっている NPO グループはありますが、私達の言葉でありがとうを「もっけらの」と言うんですが、そのチケットの名前は「もっけ」と言います。1 モッケ、2 モッケ。何かして貰ったら「もっけらの」と言ってそのチケットを渡す。貰った人がまた誰かに何かをしてもらおうとそれを廻す。循環して行く。基準がすごく広い。どうもありがとう、と言う意味で渡すので掃除をしてもらったり。子供たちがお年寄りにお話をしてあげて、どうもありがとうとあげたり、上手く使われていると聞いたことがあります。酒田でも使ってみたいのですが、庄内と言っても酒田と鶴岡は非常に仲が悪く、先程本間様の話をしましたが、「本間様には及びも無いが、せめてなりたや殿様に」という歌があるんですけど、非常に町民の文化が強く、鶴岡にある堺港の殿様をナメテかかっている。殿様が怖くない。自分が偉いと思っている。鶴岡の人間は、自分のところは殿様だ。酒田の方が悪い、と思っている。平成の時代になっても仲違いをしている。合併の話になっても、酒田と鶴岡で大きい庄内市になれば良いのに、ダメなんです。気心が分かっているだけに難しい。そのうち酒田でも真似したと言われないようなことが出来るのではないかと考えています。

鯉江氏 地域通過の導入と言うのは考えたのですが、実際海にいるともものすごく有りがたいことばっ

かり、感じてしまって、非常に沢山のものを与えられている喜びというものを感じてしまいます。たとえば、地域通貨として考えたら、返すものが自然に無い、比較にならない、とそれをまず、子供に伝えるべきだと思います。地域通貨を採り入れることは、重要なことだと思っているので、今の社会だとか、経済活動を地域通貨を使うのは言いのですが、僕の仕事としては、より自然体に、より子供のように、自然の恩返し、自然の素晴らしさをもっとシンプルに考えるべき。ちょっとこちらサイドで割りきって、考えていただくことが非常に上手く行くコツかな、という風に思っているんですね。

大塚 多分、直接的なところでは、「ありがとう」とか「楽しかった」ということだけで十分と言う感じなんだろうという訳ですね。

鯉江 例えば、子供たちによく聞くのですが、海のお魚に餌、あげたことがあるか？と。「無い」と。「そうだろ？何もなくても、どんどん、どんどん、お母さんみたいに育ってくる。その感謝の気持ちを持った方がいいかもしれないよね。」という、やりとりの方が言いと思うし、実際自分たちが自然と係わったり、こどもたちの活動をみていると、そこに感動するんですね。だから、僕は、そこがまずあって、地域通貨の専門家の方からお知恵を拝借して、連動することの方が広がりがある。これを一緒にすることによって、僕の場合は、スピードが遅くなるかな、と思ったんですね。

大塚 では、その辺はまた、森野さんの方にもうかがってみようかと思います。

下津 活動の中で、直接は地域通貨はやっていないのですが、今回環境チケットということで、やりとりを見てまして、それを含めて言いますと、私は、「ゆい」という、昔から言う、「ゆいの心」が地方にも随分沢山残っていたのですが、それが、ここ2-30年かの際に、習慣も変わってきて、そういう中で、この地域通貨というのが、生まれてきたような気がするんですね。その「ゆい」の心を取戻すためのひとつの手段としては、重要なことでもあるし、ただ、非常に入り口をやさしくしないと、その地域の人達がわからない、ということもあるんですね。

大塚 ごめんなさい。「ゆいの心」って？

下津 いろいろ物物交換する、野菜貰ったら、お返しする、都会にはないんですかね、このやりとりが、田舎でも、随分なくなりつつあるんですね。だから、地域通貨というものが言われてきていると思うのです。今回の、環境チケットみたいな入り口で使い慣れる、「掃除をして、ありがとう。じゃあ、これしてくれたおかげで、工作教室をやたらどう？」というように、子供やお年寄りには入り口を

易しくしてあげること。まあ、地域通貨になると随分奥が深いですから、そういったものから、徐々に慣れるということが、必要かと思います。

猪澤 宮古島では、SOFの海浜清掃バカンスを2回やったあと、すごいことがおこったんですね。もともと、海浜清掃というのは、役場が商工会とかへ声をかけて、みんな嫌々、たまに1回か2回やるんですけど、実はSOFの活動したあとに、10団体ぐらいのボランティアや老人会、ゲートボールとか、第何期の同窓会など、地域のグループのいろいろなところが、自発的に地域地域の清掃を始めました。今僕が宮古島でやっているモデルというのは、全国どこでも観光地だったら使えるのですが、「観光客が来れば来るほど美しくなる」というのは、地元のひとにとってみれば、ある意味すごく恥ずかしいことなんですね。

大塚 いつもが汚いということですか？

猪澤 はい。自分たちの出したゴミを観光客に拾ってもらう、ということはある意味、地域の恥と言えど恥なのですが、やったあとに、いろんな人から声をかけられたのですが、「いやあ、地元がもっとしっかりしないとね。観光客の人がここまでやってくれるんだから。」まして、子供でしょ。宮古の子供たちがやっていますよね。そうすると、年寄りとか、ある程度、社会的な自覚のある方々は、「では、自分たちでもやろうじゃないか」と次々と、週末になると、月曜日の新聞にはどこかで清掃された、という記事が結構出始めまして、このポイントなのですが、「活動」と「運動」のちがいがあると思うんです。「活動」というのはある程度トップダウンで、ある程度資金があって、引っ張る人がいたりしてやることは、今までもあったと思うんです。でも、「運動」というのはボトムアップなので、「自分たちでやらないといけないよ」という気持ちが出て来たときに「運動」につながるんで、そういう意味で、この活動が「運動」に繋がった。で、先程の地域チケットのテーマに繋がるところからすると、じゃあ、海浜清掃しない人は皆だめなのか、という、でも、本当に忙しくて、日曜も働いてても、会社を維持するのが大変な時代なので、だったら、そういう方々は汗はかけないので、だったら、自分たちの不良在庫でもいいですよ、そういう商品を出して、みなさんに感謝。この環境チケットの根底にあるものが、運動だとすれば、それは何かというと、テーマは感謝なんですね。子供たちも自然に感謝してきれいにしていく。観光客もそう。もちろん地域に住んでいる方も感謝。協賛する企業もやはり、感謝なんですね。お互い、感謝のポイントがここに溜まって行くという話なんで、この感謝と言う言葉は、別に宮古島だけに限ることじゃないし、世界共通の言葉ですよ。だったら、これが、僕が今、今日提案したかったのは、例えば、宮古でボランティアで清掃した方々のグループが10組あって、延べ200人いるときに、それを「運動」として纏め上げて行くときに、何

か連絡会を作って「一緒にやりましょうよ」という事よりも、例えば、環境チケットを共通でやりませんか、みんなで作りませんか、みんなで協賛会社集めましょうよ、と。どこでやっても環境チケットは共通、はんこも共通、であれば、10団体ばらばらでやっていたのが、20になったり、30になったりしていくうちに、とんでもないものになっていくんですよ。宮古の中だけでもね。

今回、来た一番の目的は、こうやって、皆さんと人のつながりが出来るので、SOFにお願いしたいのは、紙切れ1枚ですが、よく考えておかないと落とし穴があったりするわけですよ。それをシンクタンクの力がある訳だと思えるのですよ。これ、紙ですが、当然電子キャッシュであったり、ICカードになったり、とデバイス変わって行きますよね。だから、それが、シンクタンクのしっかり考えてもらって、紙から始めるでしょうけど、展望を持っていけば、航空会社とも話しているのですが、航空会社に僕言うんですよ。「皆さんがお客さんを送れば送るほど、沖縄の自然を破壊していますよね。」って。「ノー」とは言えないですよ。実際そうですから。「皆さんが送れば送るほど、沖縄が美しくなるんだったら、そういうものが出来るんだったらやりませんか？」といえ、それは理想ですよ。それが、ひとつの何で統合するか、というと、この紙きれ1枚なんですよ。

大塚 その1枚が非常に大きな力を持つようになるんですね。

猪澤 これに全部の感謝が集まってくるんで、これを持って島にいくとフグの食べ放題に行けるわけですよ。全部が全部割り引きかもしれませんけれど。すごい夢のある話なんで、知らないうちに、とんでもない人達がこれに終結してくる、それが、「活動」と「運動」の違いだと思えるのです。

大塚 いままでは環境チケットは顔が見える中で、割りと使われていたのですが、今度は顔の見えないところだけでも、お互いにそれを有効化させていく方法はないのだろうか、ということでもあるわけですね。

猪澤 僕も地域通貨は通産省のエコマネーのところから入って、そして、森野先生のゲゼル研究会の話まで、地域通貨から入ったところはほとんど失敗しているような話を良く聞くのですが、最初に地域通貨ありき、ではないのですよね。先に粘り強い、人と人との関係があるところには、昔の日本と一緒にですよ。そこには、そういう粘り強い関係のところ、こういうものが自然発生的に出てくるぐらいのボトムアップの力があつたときに成立するんであつて…。

大塚 つまり、そこにちゃんとした力があつて、それに乗っかってくる地域通貨ということですね。

猪澤 あと、ひとつ、ネットワーク的に言うと、1ヶ所1ヶ所がものすごい粘り強い力を持っていると、それが繋がったときは、お互いもっと強くなる。全体として、群れとして凄いい力を発揮してくるんですね。となると、大企業も協力せざるを得ないような状況が出てくるわけですね。

大塚 凄く面白い発想だと思います。

猪澤 そういう夢は持っています。

大塚 森野先生、そういうのはいかがでしょうか？

森野 今の話の続きで言いますと、「活動」と「運動」というお話がまず、非常に示唆的で、社会的な取り組みをするということで、今まで私達がやっていたのは大体大きな計画を立てて、それを実行する団体があつて、それに必要な予算もあつて、そして、こういう風に動きなさい、こういう風に作りましょう、と言う風な取り組みでした。ところが、こういうのが、大体、大した成果を生まないというのは、皆、気がつきはじめました。つまり、「活動」ではなくて、日本では昔から言うように「動きがつく」と言います。「動き」は「つく」のであって、動かしたり、動かされたりするのではないですね。ある命令を受けて、「こうしなさい」といって人は動きます。動かされます。しかし、2度目から自分で動くようにはなりません。むしろ社会的取り組みというのは、動きがついて来ることこそ大事であつて、人々がこれをやりたいな、と思い、そして、鯉江さんも言われましたが、私達は沢山のものを世の中から受けているわけです。それだけ、沢山のものを受けているわけだから、自分も何か自分の気持ちでこれをしたいな、という形で、自らの動きがつく、そういう動きが段々固まっていって、大きな動きになる…これは、誰もとどめることは出来ませんね。つまり、号令一家、何かが成されている、というのとは違うわけですね。環境チケットとかいうのも、実は環境に係わる場所というのは、先程も言いましたが、ビジネススペースで考えたら、とても取り組めるような課題ではありません。「幾ら呉れたら、ゴミを片付ける？」というような話になったら、誰もしません。もっと違うことをやって、ゴミなんか出し放題で、お金儲けた方がいいです。ところが、世の中にはお金で評価できる、金銭評価で人の行動を評価するものと、それが出来ないものがあるわけです。今、「ゆい」の話がでましたが、わが国で、昔から「ゆい」や、地域によっては「手間がえ」とか労力を出してもらったら、今度は自分が労力を出せるときに返して行く。そういう風な仕組みが、お金での金銭的な評価を補っていたのです。これが、車の両輪のように動いていたから、地域社会がうまく成り立っていた。ところが、経済成長一本槍で来ましたので、やはり、金銭的な数字で出てくる評価というものに皆驚進して行きました。そして、それは相変わらず、大切なことであるんです。しかし、それだけだと、自然も痛めば、社会も痛めば、人間自身も痛むのです。かつて、高度成長の時代に、

子供の寝顔しか見ないで、企業戦士で働いた世代と言うのがあります。私なんかもそういう世代ですけど、そういう世代は、たまに日曜日に家にいると、子供から、「叔父さん誰？」と言われたという、それだけ、ほとんど子供は寝ている顔しか見たことがない、というぐらい、働きつづけたというそういう世代もあります。それは、すべて、日本の社会を豊かにするということになってきたわけですが、同時に後回しにしてきたものがある。それが、環境問題であり、社会が今、非常に人間が壊れているとしか思えないような現象が多々ありますね。昔あったような、非金銭的に評価しあう、といったところが、なおざりにされてきたからだと思います。人間というのは、お金をくれるから動く、っていうこともあります、ありがとう、と言われて自分がやったことを認めてもらって、また、もっと人に喜ばれることをしたいな、という気持ちも同時にあるのです。そうすると、それぞれにあったような仕組みみたいなものを作っていったらどうだろうか、と。そうすると、昔あった「ゆい」や「手間がえ」といったような、人々が協力し合ってコミュニティを作っていくような昔の日本人の言い方で言うと「習俗」、生活をするときの構えとか、習慣とかというものが、もう一度新しく作り直されていくのではないかな。私達はそういうものを作り直して行くプロセスに入っているのではないかな。だから、動きがつかないとこれは出来ていかないです。人に言われてすることでは、ないですね。ボランティアというのも、人に言われてすることではなく、自分の意思ですることから、ボランティアだと思うのです。そういう動きの動機付けになっていくようなしくみ、というのが環境キップだったんじゃないかな。こういうものが、自然に「止めなさい！」と言っても広がって行ってしまおうようなことになると、一番ことが上手くいくのではないかな、と思います。

大塚 確かになにかやっただいて、ありがたい、と思ったときにお金で渡すのは失礼だから、こちらも何かして…と、代わりにまた楽しいひとときを提供する、というのはありますね。

森野 気持ちから何かしてくださった方に、ありがとう、と言って1000円渡したら、相手はむっとうしますよね。そういう意味でしてあげたのではない。わかってもらいたい、自分の気持ちがあったはずなんです。それを理解してあげる感性が大事だし、それを表現する必要がある。だから、環境キップといって気仙沼でやっているのは、単にはんこを押してもらっただけです。それによって、人はやる気、動きがでます。速い話、ラジオ体操のカードですから…。ただ、誰でも子供のとき、ラジオ体操に行ったと思います。1日目ぐらいは、一生懸命早起きして、行くんですよ。それで、はんこを押してもらいます。2日目になると、なかなか起きられないけど、お母さんに「早く起きなさい」とか言われて行くわけです。そうするとはんこが2つになる。3日目になると、母親に叱られても、まだ布団の中にいたりします。それで、次の日に頑張って行ったりすると、友達に聞いたりするので、ね。「お前、はんこいくつあるんだ」と。「俺は全部あるよ」と言われると「いやあ、昨日休んじゃっ

て」とかっていうことですね。「それは、人が自分から動いて行くときのひとつの小さなちょっとした、道具立てですが、その道具立てが、新しい日本人の習俗を作って行く、環境キップはそういう取り組みではないか、と思います。

あと、環境キップとか環境とか、先程自然の恵みということも言いましたし、環境ゴミ問題を解決する、そうすると、必ず、自然と言うものは護られるべきものとしてあるようなんですが、実はそうでもないんです。そういうことも、この環境キップを使ったイベントに子供たちが参加したり、大人達が参加したりして、気付いて行くのではないかと。昨年などは台風が沢山きました。自然の報復が始まっていますね。つまり、報復にもまた、意識が向いて行かなければならない時代にもなっています。早く気がつかないと、天の怒りが…。

大塚 そうですね。私達、もう随分気付きはじめているような気がします。今、ボランティアという言葉が出ましたが、ボランティアというのは、なかなかやっぱり、最初は一生懸命に始めても、何かいろいろ、家庭の事情とか、仕事が忙しくなってしまうと続かなくなるというのがありますよね。で、今みたいな環境キップとかがあつて、また後で使える何かがあると思っていられる、というのは、時間が長く継続して感じられる道具にもなりますね。ボランティアが続いて行くために何かしかけとか、やっていらっしゃるんですか？小山さんのところはいかがですか？

小山 しかけ、ありません。皆さんから「疲れた、疲れた」と言われているのが、今の現状です。ただ、われわれ仲間が15人いるのですが、15人で出来る仕事ではない。お手伝いしてくれる人を呼んでもらって一緒にやっている。それは、大変有りがたい、と思います。

大塚 結局、ボランティアって、一生懸命やる人が一番大変になっちゃうということがあるということがあるんですけど、その辺は如何ですか？鯉江さんとか、大変と思いますが。

鯉江 海のそばで、暮らしていると、ボランティアとか、そういうものでなくて、ゴミが増えれば掃除でもしようか、というのが、あるじゃないですか。で、結構、人を集めようとする、楽しいことをやるんですよね。結構僕なんか、すぐ、朝早く起きることによって、いいことが一杯あるんです。今の時期になると、風が吹いた翌朝はワカメが一杯、来るわけですよ。僕には大きな犬がいるので、犬と散歩していて、俺が長く海辺にいと、みんなが寄ってきて、「鯉江さん、何調べてるの？」とか「何かいいことあるの？」と聞かれて「ない、ない」と言っても、ワカメを手に持っている、「あ、ワカメ。ワカメの美味しい食べ方ある？」とか、そうして、話が弾むわけですよ。「ワカメが何時来るの？」と言う話になると、「これは、冬型の気圧配置になって、北西の風が吹くと、掻き回される

から、流れてくるんだね。」というような話をすると、結構「おい、風が吹いた後はワカメが来るぜ」見たいな話になって、「だけどもあんまり人に言うなよ。ここだけの話だよ」と言っておくと、しっかり広がるんですよ。だから、僕のやり方なのは、結構「内緒なんだよ」と言いながら、広げてしまうというところ、ありますね。「風吹くときの楽しみってあるよ」って。そう言っていると、どんどんどんどん、来るんですね。で、仮に流れていなくても、「時間があるから、ちょっと家に寄ってみるか」と、そこにワカメが干してあるわけす。それをとってきて、料理して食べる…それで、ひとつの海辺の豊かな暮らしになっちゃうわけですね。だから、楽しいことを自分がやる。

大塚 楽しいことをやれば、みんなが、「活動」でなく「運動」に参加する、という仕掛けですね。

鯉江 あとは、忙しい人がいるんで、食べ物でも「美味しく食べる秘訣ありますか」と言われると、海苔とかちょっと置いておくんですよ。犬に餌やって、「おあずけ」ってやるじゃないですか。「おあずけ」すると涎たらずでしょ。みんなもおあずけっていう感じで待っていると、ちょっと待ってから「食べるぞ」っていうと、美味しく思うわけですよ。この辺が僕のやり方かな、みたいな。そんな感じですよ。

小山 ボランティアって言われると、すごく辛い。で、私は実は山形が雪国で、今日もまた、雪が降っているんじゃないかなと、思うのですが、酒田市は除雪が下手で、狭い道路には来てくれないものですから、朝起きて雪だと「わー、降ってるー」と言って雪かきするわけですね。それは、まあ結局は「皆のために、自分の為に」ということで、皆が手分けして雪かきをするわけなんですけど、その時に誰もボランティアとは思っていないですね。それを誰かが見ていて「いつも御苦労さんだなあ」と言われることで「チャラ」になってしまう。それが、ボランティアっていう言葉でなくて、生活の一部になってしまえば、もう楽ではないかなと思います。

大塚 ありがとうございました。

森野 ボランティアという言葉が、地方の助け合いの気風が残っているところに言っただけで言えば言うほど、嫌われますね。なんか、ボランティアという訳のわからないことを言って、たいがい、そういうことを言う人は、「自分が教育があるという感じで鼻にかけているような、いやだね」というような受け取られかたです。つまり、ボランティアでなく、仕事なんですね。たとえば、福祉関係なんかでもそうですが、ボランティアと言って、頑張っている方がおられます。でも、地方でたいがい嫌われています。浮いていますね。それは、どういうことか、というと、地域に高齢者がいます。そうする

と、最近では地方でも、独居老人が増えてきました。じゃあ、みんなでお弁当のサービスでもしますか、
という、地方では、各家庭の奥さんが出てきて、ごく普通に世話をします。そして、「だって、それ当たり前じゃない。」って。ところが、都会に出ていて、教養もあるような人が田舎に帰ってくると、それは、「ボランティアをこのように組織して、このようにしなければいけないでしょ。」という話になる。それは、だいたい嫌われてくるんですね。

大塚 もともと日本のコミュニティの中に、地域の中にもう一度戻せばいいだけのことなんですね。

森野 そうなんです。先程、「ゆい」の話が出ましたが、宮古島でも、企業が協賛品を出す、或いは、みんなで作る仕事に事情があって、参加できない。「ゆい」の時もそうですね。都合があって、労力出せない。どこどこで、屋根の吹き替えがあって、自分の時も手助けしてもらったから、自分も行かなければいけない。しかし、行けないときにどうするか、というと、たいがいは酒の一升でも買ってこいよ、って奥さんが御主人に言うのですよ。それで、「お前持って行け、と。お前持って行って、謝ってこい。」とかね。「何で私がいつも謝るときだけ行かなければいけないの」とか言う話になるわけです。そういう家庭争議があったあとで2升届くわけです。それで、お互いの人間関係が上手く行っている。

それで、地域通貨とか環境チケットとかいろんなチケットの方式がありますが、地方に行きますと、「ゆい」の風習がまだ残っているところがある。そういうところで、「先生そう言うこと言っても、そういうの、もうやっているからだめですよ」とか言う方もいるんです。ところが、始めると、これが、うまく機能するところがあるんです。それは何かといいますと、当然のように集落の付き合いに出なければいけなかったんだけど、自分の都合で出れなかったと言う時に、昔は2升持って行ったんだけど、今は、「御免ね。チケットで」という。これは、今度自分が出来るときに何かしますよ、ということにもなる。これは、チケットでなくて物でもいいんですよ。企業さんが、「社会活動するときに何かしたい、当社としても何かしたい」けど、お金を出すわけにはいかない。厳しい経済情勢ですから。そう言えば、在庫が一杯あるな、と。うちの品物を使っているんだったら、これをひとつ出しましょうかと。これもひとつの「ごめんねおつきあい」です。そこには、地域のコミュニティを共有している仲間であるという連帯感があるから、「御免ね」が出てくる。知らん振りしている人間同志だと、「御免ね」もへったくれもありません。

そういう意味で言うと、私達が昔持っていた地域社会の繋がりみたいなものが、もう一度少し、取戻そうかなあという動きではないかな、と思っています。

大塚 ありがとうございます。

猪澤 ボランティアという言葉の語源は、ボランティアで、自発的にする、という事だと思います。人が何か自発的にする、ということは、動機があります。必ず。で、動機は何かと言うと、環境や自然を美しくすること、というのを動機に持てる人はそうそういないのです。まだまだいないと思います。今、沖縄が長寿で無くなってきている原因の中に、海辺に背中を向け始めたのです。沖縄ですら…。要するにもともと沖縄の人は、海辺に行くと海草が落ちている、朝、味噌汁作る前に、浜辺に行って、海草集めて、それを食べて、その海草を食べて長寿になるという以上に、海辺を裸足で歩くことは、癌も治るぐらいのすごく大きな力があるんです。海辺には本当に元気の素がある。人間はもともと海の中から出て来れた場所ですからね。

大塚 原点に戻る感じですね。

猪澤 そうです。いわば、子宮に戻って、もうちょっとしたら、癌になりそうな人も、海辺を歩くと、また赤ちゃんみたいに再生されるような…。もともと沖縄ではみんな裸足で歩いていたのですが、今は海に行く人なんていないんですよ。海に背中を向けています。みんな、海に背中を向けてしまっています。海にまた行く動機ですよ。これは、自然のためではない、自分のためなんです。自分が長寿で元気でいたために、また、具合が悪いので元気になりたかったら、海辺に行って裸足で歩いたり、泳いだりすれば、あっという間に元気になるんです。これは、宮古とか沖縄だけの話ではなく、例えば、この近くの海になるような海ではないんですよ。この辺の海辺を歩いたら、足の裏に何か刺さってしまいそうな海が沢山あると思うのですが。だから、病気になっているんです。その地域の人は。

大塚 歩ける海辺を作る、というのは、とても大切な公の意味の「仕事」ですね。

猪澤 それを誰がやるか、といういわゆるシニア。シニアの方がゴルフとかゲートボールをやるのもいいのですが、せつかくなら、海辺に行って今若者達が舐まれているから、海辺をきれいにして、歩ける海辺にしようというシニアの自発的な動きが出てきたときに、僕は先ほど言ったボランティア、いわゆる自発的な動きになってきて、と言う風に見ているんですね。

大塚 有難う御座いました。では、下津さん。ボランティアのことだけでなく、地域が一緒になって、何かをやっていく、ということに関して。

下津 私はボランティアという言葉はあまり使わない方で、団体を運営していると、一緒に色々な活動をしてくださる方に少しでも交通費も出してあげたいし、必要経費もだしてあげたい。維持するための家賃とか、そういうものが出てくるとどうしてもひとつの事業として捉えて行きたいというのがある。ボランティア的な考え方は自発的に自然になっていることで、それを特別にボランティアという言葉を使うから、変に誤解された使い方をされていると思う。こちらが提案したものが良いテーマであれば、少し時間があるから参加させてくださいという人達は随分多いと思うんですね。

大塚 ボランティアでやっているのではなく、好きでやっているんですと。

下津 そうです。そのことが一番大切だと思うんです。変に使う側も、貴方達はどうせボランティアでしょう。という言葉になってかえってくる。ボランティアの意味が随分幅広く、やっている人にとっては、そういう意識も無く自然な気持ちで起こることである。

大塚 外からきた言葉。多分、元の英語の言葉はそういう「ゆい」のような意味があったのかも知れませんが、日本に入って来たときに、ちょっと違う風になったのかもしれないですね。

下津 僕はあまりつかわない。

森野 日本でやるときには、やはり好きでやっているというのが、とっても大事なことなんです。好きでやって、楽しい。社会的な取り組みと言うのは、いつも上手く行くとは限らない。ところがこれが、号令を受けて、ねばならないという事になると、ほら上手く行っていないじゃない、という話になります。ところが好きでやっている、上手く行こうがいくまいが人に言われる筋合いはないですね。その素朴な感覚というのが、地域社会を隅々まで変えて行くんではないか。多くの日本人が、海に背を向けると同時に好きで物事をしなくなりました。大体お父さん方が、会社について働いてをおそらく嫌々やっていると思います。嫌々やっているのはたいてい身体に悪い。そういう意味ではどこかで楽しさを感じられる。好きで出来ること。それは海辺をを歩くのも良いですね。

大塚 そうですね。海辺を歩くという機会を作ると言う意味で、このゴミの活動は良いんですね。

猪澤 海辺を「裸足で」歩くことです。

大塚 わかりました。「裸足で」がいいんですね。ゴミの活動の取り組みに関して、好きでやってい

る方達と企業、学校の方達と連携していくことが多いと思うんですが、好きでやる方達が集まるきっかけ作りとか、形作りにかんしては何かありますか？

猪澤 僕は現場にいるので、現実的な話なんですけど、自発的にやる動機を好きでやるという人は少ないです。これは「運動」に繋がるまでに時間がかかります。皆さん、経済のしくみの中で、お金や、メリット、そういうものがあつた時にモチベーションが上がるという教育を受けちゃっているんで、それは沖縄も同じです。そこから入り口にしていって、やってみたら楽しい、好きになる。もちろん、最初はもともとは好きな人が引っ張っているが、底辺に広がりをつけるうえでは、「アレに行くところこのレストラン半額らしいよ〜」という話とか必要。そういう教育を受けているんだから、それを不純な動機と思わないほうがいいですよ。そういう教育を受けたのだから。ある程度のメリット、それも、突然 IC カード的なものになると、わからなくなるので、誰でもがわかるラジオ体操的方式のものがいい。

大塚 分かりやすい、楽しいものにしていくといいですね。

小山 「好きでやっている」という事で救われた感があるんですが。皆さんに教えて頂きたい。山形に飛島という島がありましてクリーン作戦で、NPO の人達と市民がみんなで島中をきれいにしたんです。何百もの袋になった。持ちかえれないから、次の船がくるまで置いておくことにしたら、船が行くまでに台風が来てしまって、どっかに行ってしまった。本当に皆がっかりしたんですが、そんな時はどうしたらいいんでしょう。

大塚 拾ってくれた方達に対してという意味？

森野 ゴミ問題で一番大きな問題ですが、皆で海浜清掃をしました。では集めたゴミはどうするか。家庭から出たゴミではないので、行政は処分できません。でも、集めたゴミは実物としてそこにあるわけです。それをどうするか。集めた人は誰かに手渡ししたら、それで解決したことになるのか。そうするとゴミを集めるという事は、ゴミが行きつく先まで考えを及ぼさないといけない。そうすると次の動きがついて来るという事になると思います。実際、今の日本で家庭から出るゴミ、事業者から出るゴミ、行政の清掃局が清掃するゴミ、事業者が処分するゴミ以外に出たゴミを誰がどう処分するかというのは非常に大きな問題としてあります。家電メーカーさんは家電については完全に再利用する。99%くらいまで再利用するという取り組みをしているところがあります。作る段階から再利用できるようにしようという取り組みも有ります。しかし今現状にあるゴミをどうするか。それに対し

ては、それほど動きが無い。誰かに押し付けられています。

大塚 小山さんの御質問は、ちょっと違うんですね。

小山 そうです。そのままだったら自然に解けて行くゴミもあったでしょうが、袋というものに入れてしまったので、どこかの国に流れて行ったでしょう。やきりれないです。私達の苦労どうなったんだろう。更にゴミになってしまった。

鯉江 海岸のゴミを拾うタイミングがございまして、気象データを全国から集め、海を見ながらデータを見る。気圧配置を見て、山間部で雨が降るだろう。降った後は海に来る。潮位差が少ないときは、ゴミは流れてくるんですが、砂浜の下のあたりでやり取りされる。一旦溜まっても、あくる日にそれ以上の潮位がくれば、次に流れて行くんですよ。実は、ゴミを拾うタイミングがある。周辺の地形の条件と気象。参加する人には言わないが、地形や気象データを見ながら、考えながらやる。

大塚 専門的な知識も少し必要ですね。SOF モデルというんですか、それを全国に広げていくのに鯉江さんのところは、大変力になっていただいている。宅急便で全国に材料を送ったりしている。さらに2-3人の人が来てくださって、各地で学校や役所が動いてくれば、子供達や親御さんたちが集まっているんな活動が出来るという事になっていますね。その辺の仕組みを説明をお願いしますか。聞いていらっしゃる方々のなかにも、「面白そうだ、やってみたい」と思われているかたに、どうすれば出来るのか御説明ねがいます。

鯉江 パッケージングして綺麗に用意することによって、海岸清掃後にカードを貰って、アレを手に入れて持って帰って家での会話が増えるとか、旅行に行ったときでも、ああいうものがあって、使ってきますと、無くなると入れるきっかけになる。子供が気付かなくても、両親がヒントを与えることによって、一回で終わらず広がりを持つ。

大塚 元から話すと、子供達が海岸清掃をし、チケットを貰い、チケットを持っていくと工作教室に参加できる。工作教室に参加するとちいさな工作の材料のパッケージを貰える。それを持って帰ることも出来る。おうちで、今日こんなことをしたんだよ、こういうようにゴミがあったんだよ、と話せる。小山さんがおしゃっていたように、子供をターゲットに何かすると、親がついてきて、おばあちゃんが着いて来てと大きく広がっていくと、そういった意味では子供を中心にプロジェクトを考えるのはいい、と言うことを仰ってましたが。

鯉江 今色んな問題が起きているのが、近過ぎるし見え過ぎるし、聞きすぎる。僕がやっている海の教育と言うのは、お母さん方に「海の教育ってのは危ないですよ」って言われて驚くんです。「ライフジャケットでもをつければ、そんな危なくないよ。街中の事件や事故の方がよっぽど危ないでしょう。」って思うのです。僕達のやることは広いところでやるのでリスクは無い。信号がないところで左右を見ながら活動をやるので、これをやるのが、町に出たときに生きる。工作パックにおいても、そうなんです。あれを使ってどうのこうのではなく、あれがあることによって、会話が弾んだりという、次のきっかけとなるのです。SOF財団と話したんですが、ゴミ、ゴミと言うと余りイメージが良くない。財団としては、地球全体のことや人材育成が非常に重要だということが最初にあったものですから、あれはひとつのきっかけである。遠くを見る。海に海岸清掃に来て、普段あまり見ていなかった子供達の姿を親が後ろで見ている。危ないな、と親が思って止めようとするときも、子供達が考えながらことを進めている。こうした子供の成長を見ることにもなる。あのパックひとつとってみても、いろいろなことがある、ということなんです。それが目的だったというわけです。

大塚 まだ見てない方は帰りにパックを見ていただいたら良いと思います。いろいろな工夫がこめられています。是非、発言をなさりたいというお客様がおります。二人ほどお願いしたいと思います。環日本海の環境協力センターの土井様、おねがいします。

土井 パネルがありますけど、富山県は平成8年から県が、日本海側の自治体に呼びかけて海ゴミの漂着物調査をやっております。現在では、日中韓露、26自治体48海岸やっております。実際は自治体がやっているのではない。皆さんの児童、生徒の協力があって初めてなされています。感謝の気持ちを込めて、今後とも宜しくお願いします。来年度も日本財団さんにも働きかけて太平洋側も含め充実した調査をやってみたいと思っています。ご協力お願いしたいと思います。最後に、このゴミ問題、参加した人は自分では捨てなくなります。今、悩んでいるのは、拾わせるのではなく、捨てないようにする社会を作りなさいと言われ、日々悩んでおります。今日は参考になりました。有難う御座いました。

大塚 有難う御座いました。もう一方、東京学芸大学の教育学部教授で、附属世田谷区小学校校長先生の福地さん、いらっしゃいますか。

福地 私は学校教育の立場で、大変良い勉強をさせてもらい、地域で取り組まれている活動に大変敬意を表します。そこから私共の学校教育での立場での経験をお話出来ればと思っています。校長をし

ていますが、附属小学校で取り組んでいる環境的プログラムといえば、普段の授業を継続的にやるということもありますが、このあいだ3年生が東京都の最終処分場の見学をしました。そこで、ゴミと言う物を認識し、改めて自分の生活を考え直すというかたちで戻って行く姿というのを、特に小学校3年生で見まして、発達段階というのが環境教育の場合非常に重要なんですけど、そのなかで感じることを、環境教育のいくつかの学校教育の中で行う第1段階というものは、子供達が親といっしょにやる幼児段階から、低学年あたりで心や命の教育を主体的になると思う。生き物を可愛がるという姿から、そして子供たちが純粋に物事を考えられる第1段階の最終学年が小学校3年生なんです。その3年生を逃しては大変なことになると実感しています。4年になると一旦、物事を壊すギャングエイジと言われる段階ですので、考え方をまた改めて問い直すという学年になってくる。自分が取り組んでいる水環境学習という、主に河川が中心なんですけど、その入口として、水処理施設の見学が4年あります。命と関る水です。こどもたちは3年生も、4年生もリサイクルと、リユースと、リデュースという言葉パネルで学んでくるんですが、一体どう言う意味なのか子供に分かる形で、資源とゴミの中に有るまだ使えるものについて、また、どうやったらゴミを減らせるかという問題を公開授業で社会科でやりました。身近なところの街へ行って、プラスチック製品やラップなど、そんなに必要無いんじゃないのという問題意識を持った授業展開をしています。継続してやっていく活動というものを、カリキュラムとして体系的に、環境教育をやっていかななくてはいけないということ、今日お話を伺いながら、益々実感し確信した次第です。

ペットボトルの中に入っている魚、小さな命を育てるという活動から始まるんです。単なるお土産というのではなく、小さい命をどう大切にしていくかということに取り組んでいって、その先に水の汚れや色んな問題に関りながら、小学校6年間の体系的なカリキュラムの開発に取り組んでいます。やはりゴミの問題を考えた時に、いかにして子供が意識化出来るか、環境問題を小学生なりに考える取り組みと言うのは、地域の方が取り組まれている活動だけで、それを意識化させるのではなく、実は私ども学校の責任ではないかと痛感しています。いかにお互いが連携して行くかが次のステップとして必要ではないか。例えば海をフィールドにして学習するという体制を学校がわにどうやって提供して行くか、ということ考えると先生方も動き出すんです。私は大学では教員養成をしているので、環境教育の指導者が若者から育たないことが非常に残念で、どうしたらいいのか、というのが自分の問題意識の中にもあります。先ほど、ボランティアの話がありましたが、学生の若いエネルギーがそういうところで使えないのか、というように思います。教育の場の受け皿としての活動というものも意味があるように思います。結局のところ、私共のところまで育って行く先生達が学校へ行って、それを子供たちへ伝えてくれればいい。一番鍵を握っているのは教師だと思っています。それを支えている、特に子育て中の母親の教育。これが環境を子供たちレベルで良くして行く力になるのではないかと思います。これからも勉強をする機会に多く参加したいと思います。ありがとうございました。

今のお話にあったように、こういった活動を学校を受け皿として、或いは他のところを受け皿として、こうしが活動をネットワークとして広げて行くときに、どのように広げて行くかもひとつのテーマだと思うのですが、御意見が御座いましたらお願いします。

下津 今、ちょうど、その活動をやっている最中ですが、本当に多様な分野の人達が連携を取れて、役割分担が出来れば、かなり素晴らしいことが起こると思うのですね。ですから、私はいつも思うのですが、おそらく、新しいシステムを作って行くとか、そういうものというのは、誰も作ったことのない世界ですから、前例が無いわけです。ですから、その前例を作って行くには、ある程度冒険的なこととか、実験的なこととか、まず、実際にやってみなければいけない。だけど、例えば、行政あたりは、それが、一番苦手であるわけで、その役割は民間の団体に任せてください、と。そして、行政が出来ることは一杯あるわけですね。いろいろな情報を持っていたり、行政でしかできないこともあるわけですね。今、先生も言われたように、例えば教育の分野が入ると、どんな活動をしていても、一番最終のところは教育に帰っていくんですね。この教育がいろいろ変わってきたから、いろいろ多様な考え方が生まれて、若者がいろいろな地域の活動に参加できなくなったとか。ですから、多様な、意識の有る人達がまず、結びつくこと。そしていろいろ話し合いをやって、まず一步を踏み出すことが一番重要ではないかと思っています。

大塚 そうですね。小さいときは色々なことに興味があるのに、段々段々削ぎ落とされてしまってますね。

鯉江 今、僕がやろうと思っているのは、現代版の臨海学校をやろうと思っているのですね。私のところは、空港も先週できましたし、もうすぐ万博も始まるんです。現実的には海の前にある観光業者さんたちは大変なんですよ。そこで、何度もお話にでている、ライフセーバーの若者と私が多少でも財団さんと一緒にやれたシステムであるとか、他のプログラムを導入しまして、あと1ヶ所我々が常時いられる体制を作って、我々がPRをして行く。現代版の臨海学校を作ったらどうかな、と考えているんですね。先ほど、先生からお話があったように、ライフセーバーの子達が安全面を主に面倒を見る。家にはいろいろな専門家がいますので、お手伝いにあがる。そこに先生方とお話をして、そのような現代版の臨海学校を作る、ということが、非常に手っ取り早いかな、と。当然、そういう要望と言うのは旅館組合さんとかも、今までも単なる観光ではなくて、いろいろな教育を含んだそういう観光と言うのを相当考えておられるんで、ひとつのいい例としては、先ほど杉浦さんからお話があった日間賀島ですね。日間賀島などは私共の方にしょっちゅう御相談をいただくんです。ですから、知多半島に一ヶ所か二ヶ所、島の方でも積極的にやってくる。海はもちろんきれいになるし、自然と向

き合ったいろんな教育の場も出来る。それが、一番手っ取り早い方法かな、と思っています。

小山 先ほどお話したのですが、酒田市では、2校で黒松の林と海を中心とした総合学習をやっております。現場で一番苦勞された方が、ここにいらしていますので、その方にお話を伺おうと思います。工藤さん、ちょっとお話していただけますでしょうか？

大塚 工藤さん、宜しくお願ひ致します。

工藤 国土交通省の酒田港湾事務所企画調整課でやっております工藤と言います。せっかくですので、今年やりました活動を少し紹介させていただきたいと思います。実際にやったのは、2校さんの4年生の生徒さんだったのですが、基本的には生徒さんの意思で自分で勉強したいものを勉強していただくと言う基本的な流れはあったのですが、それも、動物、生き物、植物、土、そういう物をすべて含みまして、循環しているんだよ、ということを最終的に気付いてもらいたいということで、浜辺に流れ着いているゴミ…それもゴミと言ってしまうと、ゴミなんですけど、拾う子供たちが宝物だという気持ちで拾えば、このリサイクル、循環型社会が動き出している、という点を含めると、宝物になり得るものたちだ、ということで、子供たちに「ゴミ拾い」という名目ではなくて「宝探し」、ということで、活動をしていただきました。子供たちも素直に宝物だということで、素直に拾っておりましたので、また引き続き、来年度も総合学習の予定はしておりますので、より子供たちに気付きを与えられるようにやって行きたいと思っています。

大塚 ありがとうございます。

猪澤 教育についてですが、僕はキーは母親です。沖縄もそうですが、母親が墮落しています。墮落というのはなにかといいますと、便利に済ませ過ぎるのですね。たとえば、買い物ひとつ。今の時期にどういうものを食べさせれば、子供たちにいいかということは、やはり、地元で獲れた魚、命のある魚を、ちょっと魚市場まで行けば、安く買えるのですが、スーパーに行くと、地元でとれた魚が3倍ぐらいするのですね。その横に南米産の魚が安く売られているのですね。母親の選択は、スーパーに行って手軽に買えるもので、安く買えるもの。南米産の魚を今、沖縄は食べています。(笑) どんどんどんどん、短命化しているんですね。学校の先生にお願いしたいのは、母親に対する影響力を持っているのは、学校の先生です。父親は無いと思います(笑)。というのは、父親が失敗モデルになりつつあるので、学歴とか、最後の最後に失敗モデルっぽくなっているのです。もう少し前の高度成長時代は、父親はもう少し自信を持って、「学歴だよ」と。「受験勉強ガンバレ。偏差値上げろ！俺み

たいになれ！」と、言えたのですが、今は、たぶんそれを堂々と言える父親は余程の揺るぎ無い立場の方だと思うのですが、たいがいの方々は自信をなくしてきているので、では、母親が「お父さんみたいになったらだめよ」というのは、子供にとったら、道が迷ってしまいます。母親は「学力、学力」と言いますが、先生は「学力」という言葉はよく使われるし、世間でも「学力」。では、「学力」って一体何なのだ、と言ったときに、今のところ偏差値とか、知識とかそういう方面のことですね。でも、これからの世界そんなものが、果たして必要かと言えば、先ほど使った言葉で言えば、LOHAS (Life Style of Health and Sustainability) ですね。健康と環境の持続性を重んじるライフスタイル、というのが、ロハスということで、欧米ではロハスというライフスタイルが、日本の場合はエコ・ライフ、スロー・ライフという、なかなか身近に感じられなくて、日本人の特性としては、欧米で流行ったものは、ちょっと掘るとまだまだ流行る傾向があるので、例えば、母親にこれからロハスな生き方をして行かないといけないから、そういうことをしっかり学んでいかなければいけない、食べるものは気をつけなければいけない、ゴミの出るものは買わないようにする、とか、母親に影響力を持っているのは、たぶん、学校の先生だと思うのです。ですから、是非、母親を学校の先生が教育してもらって、母親がしっかりしてくれば、いいのではないかと思います。

森野 教育の問題との関連でいきますと、地域の教育力が大きいと思いますし、母親の影響力がでましたが、日本の社会がどうして、こうなってしまったのか、というとやはり私は三世代同居しなくなったということが、大きいと思います。下津さんの御報告でも、高齢者の持っているノウハウや知恵を人々が活かさなくなった。私が若い頃、口を酸っぱくして言われたのは、「親父から学ぶな、じいさんから学べ」といわれました。子供は親父に対しては、実に批判的な目を持っています。そして、大概反抗するものです。うん、それでいけ、そして、沢山の知恵を実は教えてくれて、子供の見方になってくれたのは、じいさんでした。じいさんやばあさんから見れば、子供の親は単なる至らない子供なんです。そうやって、じいさんやばあさんから沢山のことを教わりました。で、日本人というのは、そういうのを自ら捨ててしまいましたね。そうすると、家の中では親と子是对立関係に多くの場合、突き落とされます。そうなったときに、双方を救済する役回りのひとがいなくなりました。家庭の中で、争いが起きると今度はさらにそれを仲裁して中和させる調停役が昔の日本社会には地域にいました。本当に困ったときには、相談に乗ってくれる御隠居もいました。しかし、落語で私達が聞くような人間関係というのは何処を見ても、いなくなってしまったんですね。つまり、地域が人を育てていないんですね。やはり、それを取戻す必要があるかな、と。ですから、多くの子供や大人は世の中を舐め切ってしまうような姿勢で生活を送っている人が多いです。それは、自分を傷つけています。畏怖する気持ちも何処かで消えてしまいました。沖縄では、神は海からきます。ですから、巫女は必ず海から神を迎えます。海は畏怖するものだったんですね。沖縄のかつての賢者であった、琉

球の哲学者、蔡温(サイオン)という人は、日本で初めて林業について、発言した人です。沖縄の人が、日本で最初に林業について発言しているのですよ。その人が言っているのは、「森を痛めすぎて、手を入れ過ぎてはいけない。しかし、全く手を入れなくてもいけない。」

両方とも森の気を殺す。つまり森も人間に気を与えてくれるものだったし、川が流れて海も気を与えてくれて、神がやってくるものだったのですね。そういうものというのは、その土地土地の文化で伝承されていたはずで、それは、その老人が、じいさんが孫に語って、孫が何か言ったときに、ひとこと、昔は言いましたね。「お前が言っていることは、それは、通らないよ。」とか。なんで、通らないのかは自分で考えるわけです。で、通らないのはどこに通らないかという、世間に通らない訳です。それは、そういう形で、世の中が持っている人を育てて行く力がかつてはあった。鯉江さんの臨海学校もそうだと思います。これは、林業の方面でも行われています。つまり、手入れをしなくなった山林をフリースクールのようなことをやっている学校の人が借りて、指導者を置いて、トム・ソーヤの冒険の森にしようとか、そういうような取り組みを始めているところもあります。そういう意味で言いますと、この海ゴミへの取り組みも、ある意味でいうと、ある壮大な目標に向かった歩みが始まっているのかなという感じがしております。

大塚 ありがとうございます。海ゴミという切り口からいろいろな話がでてきたと思いますし、まだまだお話は続けたいのですが、時間の制約もありますので、これから、このネットワーク、この活動をどう広げていったらいいか、また、SOFに対して、どのような形でお付き合いを頂けると嬉しいかということを含めて、あと少しずつご発言をお願いします。

小山 実は、私ひとつのネットワークから昨年、退会させていただきました。皆で手をつないで、助け合っているんな情報をもらって、そこに行って、という少しずつ自分達の活動にプラスになるようなネットワークだったら、良かったのですが、上から、こうしなければならない、というネットワークだったものですから、それは、もう必要ないな、自由にきて、来年、こうしたらいいだろうか、というような考える力を奪ってしまうような、ネットワークはいらないな、と考えています。

大塚 そうだと思います。先ほども、口は出さずに、自分達がどのようにやっていけるか、自分達のやっていきたいことが自由にやれる、というネットワークであってほしい、ということですね。

小山 全く、前例のない活動をやっているものですから、自分達で考えてやってきたい、と思っております。ただ、いいということは、少しずつ採り入れていきたい、と思っております。

大塚 お互いのネットワークはしたい。

小山 そうです。人とのネットワークはいいのですが、上から押しえつけられるネットワークは本物ではないな、と考えています。

鯉江 私も、空港の仕事にも長年関わらせて頂いて、2月に完成した。財団さんとのこういうプロジェクトにも3年間参加させていただいて、それなりのものが皆さんのおかげで出来たな、と。で、来年、もし、シップ&オーシャン財団さんと何らかの関りが持てるようであれば、空港もあるし、ウミガメもくるし、海浜植物もある。都市近郊のこれからのライフスタイルですね、自然とうまく関りながら、どう持続可能な暮らしをするか、と。で、僕の場合は結局、教育ではなくて、遊びなんですよね。ところが、ここまで30年もやってきますと、とことんいくぞ、と。もう陸と貯金通帳は見ない、と。海と空を出来るだけ見るようにする、と。というところに固守するものですからね。ただ、その情報をなんらかの形で、ビジュアル的にも出して行きたいな、と。リアルタイムに近いような状態でね。あとは、われわれの活動をネットワーク化したいな、と。広げるのではなく、そこを蜜にして、出来るだけ長い時間、海を見る。海の変化。自分が長年関わってきた仕事は、日本の自然海岸ができる仕組みを研究してきたんです。それは、川から流れてくる砂が蓄積する。そこに海浜植物が、育つ。そこで、長年かけて、自然の海岸が元に戻って行く。人間の自然治癒力というようなものを植物と砂が持っているのですね。そういうようなことも、一杯あるので、財団さんとのネットワークによって、広げていきたいのかな、というようなことが、一杯あります。

下津 どういう視点で、ものを見て行くかということが、一番大切だと思うのですが、私は、今回東京の方で、いろんな全国の人達にお集まり頂いて、また、会場の皆さんとも、共に、こういう環境の問題を解決していくために、語り合えるということは、とても有難いと思いますし、そおいうことが、最終的に自分達の活動は何なのか、と思ったときに、いろいろ、社会の持っている問題、それが、解決されて、自分達が理想に思っている社会に近づけることだと思うのですね。それと、子供たち、次の世代の人達にどういうものを贈れるかということがやるべきこと、その間にいろんなプロセスがあって、今地域の小さなことから、たとえば、日本中の人々がこれを考えよう、とか、アジアの人も考えよう、とかそういうことも同時作業でやって行かなければならない、そうしないと、本当に社会の問題などは多分解決しない、と思っています。ですから、出来る限り多くの人達と連携しながら、ネットワークしていきたい、というそういう考えから、来ております。ですから、例えば、SOFの方に、今後お願いとしては、出来るだけ多様な人達が集まる場を、SOFの方でやっていただきたい、また、人作りの分野でご協力、支援を頂けたらありがたい。やはり、動かして行くのは人である、というよ

うに思っていますので、そういう人作りが大切だなあと思っています。

大塚 有難うございました。猪澤さん、どうぞ。

猪澤 自費で来ていますので、好きなことを言わせていただきます。

大塚 勿論です。自費で来るというのは、そこがいいところですね。(笑)

猪澤 海辺工作教室のモデルですが、導入モデルとしては、我々素人ですから、すごく有難かったです。しかし、今後、広がりを考えて行くと、お金は貰っていませんが、海辺の工作教室に関しては支援してもらっています。それは、モノと指導者を支援してもらっている。でも、これが広がりが出てくると、全部を SOF がそれをやるのか、というと、もうそこで、限界が来るわけです。それは、あくまで、僕らが未熟な部分を指導してもらった、導入モデルとしては OK なのですが、どこかで、テイクオフして行かなければならない。という流れの中で行くと、逆に僕らはお金を貰っていないですから、はっきり言って、SOF に拘束される必要性はないわけですよ、結論から言うのですね。SOF がもたもたしていると、例えば、今言った、環境社会とか、自然再生とか、ロハスとか、そういうキーワードを並べて行くと、そういうことをやりたい企業は沢山あります。ビジネスモデルとしてです。航空会社もそのひとつでしょう。かと言って、そこに行くとゆがんでいく可能性も当然あるわけですよ、向うはビジネスですから。僕は、SOF はそう言う意味で、すごくいいポジション取りをされているので、むしろ日本財団の方も一杯いらっしゃると思うのですが、今日お話聞いていて、海守は「活動」的なイメージを受けちゃったんですが、その海守より SOF の方は、「運動」の方に一歩足を踏み入れているんですね。そういう意味では、日本財団グループの中で、SOF の先行している資源、リソースを生かして頂いて、例えば、この環境チケット 1 枚でも、やはり、シンクタンク的に考えれば色々なことが出てくると思うのですが、是非、これをきっかけに 2005 年度は皆に求心力を持たせる…、自発的に色々なことをやるのですが、これ便利だよね、これがあるから、まとまりがあるよね、という、そういうものを今やっぱり SOF に是非作ってもらいたい。

大塚 安心して全国共通に使えるチケットですね。それで、問題のないものを考えてほしい、ということですね。

猪澤 そうです。あんまり、企業の利益に拘束されないで、僕らに一番無いものは何かというと、与信力なんですね。地域でいくら頑張っても、そんな与信力や担保力なんかがあるわけじゃないですか。少々、評価する人はいたとしても…。でも、やっぱり、与信力、担保力のあるところの人

が、このチケット 1 枚バックアップしているだけで、「僕らこういう運動しているけれど、これに参加しない？」と言ったときに、「自分で考えたんだけど、というか、全国でこういう動きがあるんだけど、どうせやるなら、これと一緒に参加しようよ」と言った方が、ね。

大塚 SOF の信用を貸していただきたい。

猪澤 はい。ということで、凄い、好き勝手なことを言っていますが、アクション、実践をしないと、何ごとも始まらない。海の工作教室を実践したから、今日の方があって、これはまた、続いて行くと思いますが、そろそろ 2005 年は次のステージに手を打っていただけると、僕らもついて行きます。でも、手を打っていただけないと、多分ついていけないと思います。

大塚 ありがとうございます。

森野 ネットワークというのは、作るものではなく、出来るものですね。出来ると言うときは知らないもの同士が知り合いになります。そう言うときに、ちょっとしたきっかけがあると、随分と違います。たとえば、この環境チケットですが、知らない人間でも例えば、環境チケットが入って、「えっ、環境チケット持っているの？」というようになると、知らない人間同士が、作る関係は急に信用のあるものに、また親しみのあるものになります。だから、そういう意味でいいますと、猪澤さんがいわれるように、全国的なネットワークができていくようなサポート、それは、情報の提供であったりしますが、そういう役割をシップ&オーシャン財団さんは、多いにされると社会に対する貢献になるのではないかと思います。そういう意味で、情報や連絡などに対するサポートを、今までのスタンスのとおりで、なさっていければ、みんな感謝し、嬉しいのではないかと、思います。そうして、その中で、人々の取り組みはどんどん先に行く取り組みもでてくるでしょうし、足場を固める、取り組みも出てくるでしょう。いろいろな進展の具合があります。わが国は自然にしておさまる、という国です。そういう日本人が作り上げて来た住みやすい、健全な日本社会にどんどん近づいて行くといいな、と。その時は海もきれいだし、山もきれいだし、川もきれいだし。おそらく自然は、沢山の非常にいいものをわが国の人間に与えてくれるだろう。そして、そういうことを作り上げて行けば行くほど、地球全体にも貢献していけるようになるのではないかな、と、思っております。

大塚 有難う御座いました。今日は、本当に自然に常に接していらっしゃる方、裸足で砂浜を歩いていらっしゃる方々からお話を伺えることができました。本当にてらいのない、ストレートで、しかも、真摯な御意見が沢山出たと思います。まとめてしまうのが、勿体無いほど、沢山のいい御意見がでま

した。SOF に対しての期待もいくつかありました。今日は素晴らしいパネラーの方たちに恵まれて、私のつたない司会でもなんとか終えることができました。この辺で、パネルディスカッションを終わりにしたいと思います。

菅原 パネラーの皆様、ありがとうございました。以上を持ちまして、すべてのプログラムを終了致します。先ほどまとめていただきましたように、私共シップ&オーシャン財団はまだまだやっ行って行かなければならないことも多いと思います。本日の会議が特に地域で活動されているおられる方々に少しでもお役に立てれば、幸いです。本日ご参加の皆様が、またどこかでお会いできること楽しみにして、閉会にさせていただきます。

4. 2. 8 会議のまとめ

当財団では、平成14年度に構築した「地域の海洋環境貢献活動(SOFモデル)」を、平成16年度までの3年の間、全国11ヶ所の活動拠点において活動を実施してきたが、地域の活動を立案し計画・実施まで直接携わってきた地域の方々が、今後もより良い形で継続的な活動を進めてゆくことを願い交流会議を開催した。

この交流会議は、北海道から沖縄まで全国9地域の地域活動担当者が、活動の紹介と実施状況の発表を行い、その内、5名の発表者が参加して「地域活動の広がりへの期待」をメインテーマにデスカッションを行い、環境チケット(地域通貨)、情報交換、活動の継続・自立等について意見交換を行った。以下に、本交流会議で発言された主な内容を記す。

(環境チケット(地域通貨)について)

- ・ 環境チケットをきっかけとして、地域活動への参加、助け合いの気持ちの芽生え、環境活動参加へのメリットの授受等、子供たちにも解りやすい環境への関わり方等が、地域住民に伝わり、自分達が協力し合って地域の環境を大切にす活動へのツールとしての役割がある。

すなわち「人が自分から動いて行くときの一つの小さな道具立て」として使われている。

(情報交換について)

- ・ 現在、各活動地域の交流、情報交換等の場が無く、SOF が仲介役となっているが、今後も出来るだけ多様な人々が集まり、アイデア、意見等を出し合える場が必要である。

(活動の継続、自立について)

- ・ 地域の指導者がトップダウン的に進める「活動」ということでは無く、地域の人々が自発的にボトムアップで進めて行ける「運動」としての地域活動が必要である。
- ・ 全国共通に使える環境チケットシステムや、環境チケットをバックに地域活動組織に与信力・担保力が与えられる様な、全国的なサポート体制を作ることが望まれる。

(ネットワークについて)

- ・ ネットワークは作るものではなく出来るものであり、みんなで協力しあい助け合って求心力を持つ様な、全国的サポート組織の立ち上げが必要である。

本交流会議で、「地域の海洋環境貢献活動」が継続的な広がりを持つこととして望まれたことは、環境チケットの広域的な活用の必要性と、同じ様な目的を持った方々が活動を発展させてゆくためのネットワーク作りであり、そのためにはSOFが何らかの形で窓口となることが重要と考える。

本交流会議は、地域で活動されている方々の初めての情報交換の場として成功裏に終了したものと思量する。

ゴミ問題に取り組む地域社会—循環型の継続的活動を目指して—
 交流会議参加者一覧及び参加者のコメント

1. 参加者数

官 庁	団 体	企 業	研 究 所	大 学	マデライ	その他	計
28	26	30	7	6	5	39	141

2. 参加者内訳 (順不同)

○官庁等

国土交通省、海上保安庁、水産庁、岩手県庁、山形県庄内総合支庁、神奈川県庁、石川県羽咋市、和歌山県庁、長崎県東京事務所、大分県庁、岡山県東京事務所

○団体

(財) 日本海運振興会、(社) 海洋水産システム協会、(財) 地球科学技術総合推進機構、社会貢献支援財団、(財) 国際海洋科学技術協会、日ロ交流協会、(財) 港湾空間高度化環境研究センター、(社) 日本海難防止協会、(財) 国際海洋科学技術協会、米国財団法人国際平和文化センター、(財) 日本海事協会、(財) 日本海事広報協会、船の科学館、日本船舶輸出組合、(社) 日本舶用工業会、(社) 日本造船協力事業者団体連合会、(財) 吟剣詩舞振興会、(社) 日本海事検定協会、(社) 海洋産業研究会、(財) 環日本海環境協力センター、日本環境災害情報センター

○企業

住友重機械マリンエンジニアリング、芙蓉海洋開発 (株)、東亜建設工業 (株)、コスモ石油 (株)、住友重機械工業 (株)、国土環境 (株)、共和コンクリート工業 (株)、(株) 商船三井、五洋建設 (株)、商船三井テクノトレード (株)、(株) 久栄インターナショナル、JFEソルデック (株)、古野電気 (株)、(株) 三菱総合研究所、(株) オズクリエーティブ、ユニバーサル造船 (株)、東洋建設 (株)、(株) タナカ・マックコーポレーション、三井造船 (株)、共和コンクリート工業 (株)、(株) 日本海洋科学、エスケイ産業 (株)、ソーラージャパン (株)、(株) デイプロマット、(有) 光泉、みらい建設工業 (株)、エンヴィックス (有)、エスケイ産業 (株)、(株) タイリョウエンタープライズ

○研究所

海上技術安全研究所、航海訓練所、海洋研究開発機構、(株) 海洋総合研究所；(財) 日本システム開発研究所、NTTデータ経営研究所、コリン未来学術研究所

○大学

日本大学、専修大学、東京学芸大学、東北公益文科大学、広島大学、筑波大学

○マスメディア

みなと新聞、海事プレス社、日本海事新聞社、海上保安新聞、(株)舵社、

○その他

サンクチュアリジャパン、フリーランス環境技術コンサルタント、NPOブルーアース、NPO日本ウミガメ協議会、南方町産業振興大使、日本サーフィン連盟、オーシャンファミリー海洋自然体験センター、藤野技術士事務所、海辺つくり研究会、フリージャーナリスト、個人9名

3. 参加者のコメント (原文のまま)

- 1) 日本海沿岸を訪問した際に、我が国のゴミと考えられるものより、ハングル語、中国語の書かれたゴミがかなり多く残念に思いました。周辺諸国との連携が必要な重要な問題と認識しています。
- 2) 当県でも、海洋環境保全への啓発を目的に、沿岸域においてシンポジウムの開催や、学校への研究者派遣による授業などに取り組んでいます。全国各地域で取り組まれている具体的な活動について、発表をお聞きし、勉強させて頂きたいと思っております。
- 3) いつも海洋フォーラムを楽しみにしています。今回も海洋ゴミについての興味ある話題で、大変期待しています。
- 4) 非常に対応が難しい問題であるだけに、ブレークスルー的な対策に興味があります。
- 5) 私たちは、遠州灘海岸115キロをフィールドにしてアカウミガメやコアジサシなどの野生生物の保護活動を通じて海岸環境の保全活動を行っています。
今、遠州灘海岸は、海岸への車両乗り入れやゴミ問題、人工紫外線問題、浸食問題、海岸近くに埋められた30年前のゴミの流出問題などが山積みしています。次世代に豊かな海事環境を伝えられるように勉強させてください。
- 6) 弊NPOは「環境保全」を目的に設立し、「美しい海を守る」活動を事業の一つとして取り組んでいます。
- 7) 当日、昼前より所用のため午前には出席させて頂きます。瀬戸内海でも漂着ゴミに対する活動が次第に進みつつあり参考にさせて頂きます。
- 8) 漂流漂着ゴミの国際協力と対策のあり方、アプローチについて情報を入手したい。
- 9) 何がゴミか、というところが大切かと思えます。生態系、物質循環などもふまえて、議論を進めていただければ幸いです。

こども地域通貨「タラ」の活動について

北海道稚内市 教育委員会教育部こども課
係長 梅田 敏文



◆お家でいっしょにしていって、お家のお手伝いをした証明

項目	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
1. 掃除												
2. 洗濯												
3. 買い物												
4. 料理												
5. 片付け												

◆地域の子ども会や地域活動をした証明

項目	行 事 名	出席人数
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		

◆学習履歴

項目	種 別	種 類	出席人数
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			

こども地域通貨「タラ」ってなに？

◆「タラ」はどのようにして使うの？

1. 児童館、子育て支援センター、図書館、公民館などで使う。
2. 児童館や子育て支援センターで遊ぶときに使う。
3. 児童館や子育て支援センターで遊ぶときに使う。
4. 児童館や子育て支援センターで遊ぶときに使う。
5. 児童館や子育て支援センターで遊ぶときに使う。
6. 児童館や子育て支援センターで遊ぶときに使う。
7. 児童館や子育て支援センターで遊ぶときに使う。
8. 児童館や子育て支援センターで遊ぶときに使う。

◆お家でいっしょにしていって、お家のお手伝いをした証明

◆地域の子ども会や地域活動をした証明

◆学習履歴

発行所

お 名 前

稚内市教育委員会こども課







酒田港のあゆみ

最上川の河口を利用した小規模な港が、寛文12年(1672年)、河村瑞賢によって開かれた西回り航路により繁栄。昭和49年には埋込み式の北港が開港し、近代的な港へ変貌。

明治40年代の酒田港(山岡前南)
※ 酒田市立資料館より作成

「昭和初期の酒田港」

「現在の酒田港」

酒田港女みなと会議とは

これまでの港づくり：男性の視点での物流機能優先の港づくり

↓ 女性・子供が集う港への転換

生活に密着した女性の視点から港の整備や利用について意見交換を行い、行政機関へ提言や港の振興活動を通じて、魅力ある港づくりを進めることを目的とし、山形県内の女性10名により平成10年7月に設立。(現在の会員は15名)

酒田港女みなと会議の活動

提言案提出【県民参加の港づくり-「女みなと会議」からの提言-】

- 県民に愛される美しい空間づくり
- 港への親近感を持ってもらうための方策
- 港を便利にするための方策
- 地域産業と港とのパイプの強化

山形県知事
酒田市長
運輸省第一港湾建設局長(現国土交通省東北地方整備局)
「平成11年7月~8月」

フォローアップ会議の開催「平成12年3月」

酒田港女みなと会議の活動

港湾振興活動の取り組み

- やまがたに酒田港がやってくる(平成12年10月)
記念講演「霞さんと港町」映画監督 山田 洋次 氏
- やまがたに酒田港がやってくるPART2(平成13年10月)
記念講演「日本の海洋文学を語る」作家 吉村 昭 氏
- 最上川と日本海が出逢う街酒田(平成14年11月)
記念講演「よりよい市民生活を築くために」朝日新聞編集委員 森谷 順 氏
- 東北みなの未来会議(平成15年8月)
記念講演「男女の饗宴」作家 酒辺 淳一 氏

▲ 記念講演 ▲ 酒田港物産市 ▲ みなとこども館開館

酒田港女みなと会議の活動

港湾振興活動の取り組み



山形県上山市 斎藤 早希



山形県酒田市の 永嶋 真

「みなとこども絵画展」

酒田港女みなと会議の活動

港湾振興活動の取り組み



ニュージーランド ダイアヴァレ・スマニアル



アメリカ ミッチェル・サムスン

「みなとこども絵画展」

酒田港女みなと会議の活動

港湾振興活動の取り組み



山形県鶴岡市 塚田 好真



山形県大石田町 豊岡 航

「みなとこども絵画展」

酒田港女みなと会議の活動

海洋のゴミ問題への取り組み【発見！酒田みなとの探検隊】

県内の子供達の交流と、酒田港の魅力や海の環境問題を考えることを目的に開催

- 開催日 平成16年7月11日(日)
- 活動内容 船による酒田港の見学
海岸漂着物の観察と清掃(雨天中止)
貝殻等を使った海の工作教室
海洋センターの見学
サンドクラフト(砂像)づくり(雨天中止)
- 参加者 山形県各地から親子46名



「隊員募集チラシ」

酒田港女みなと会議の活動

【発見！酒田みなとの探検隊】：活動場所



大浜海岸

海洋センター

酒田港女みなと会議の活動

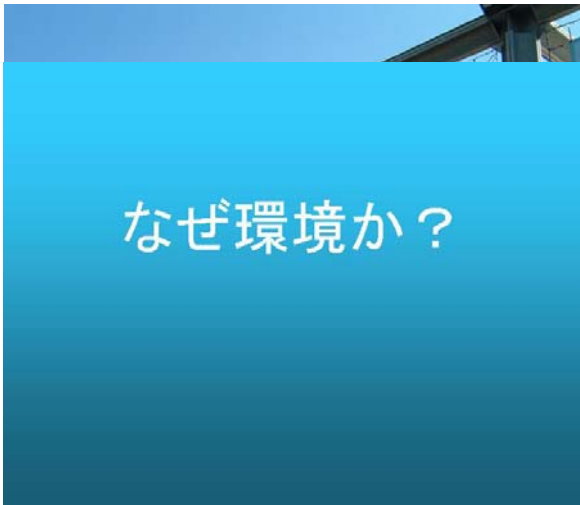
【発見！酒田みなとの探検隊】：酒田港・海洋センター見学



空母西蔵艦「おぞら」による港内見学



海洋センター見学



MIYAGI 気仙沼の位置

地域の誇りとは

住んでいれば当たり前だが、気仙沼には海、山、川の豊かな自然環境があり、そこから育まれた質の高い様々な海の幸、山の幸があり、それとともに暮らしてきた文化がある。

気仙沼エコくらぶ エコ・ポイント活動

エコ・ポイント実行委員会

気仙沼の環境は総合力
海もあれば山・川もある
フカヒレだけではなく、かつお・さんま・まぐろ等多種類魚介類がある
遠洋・近海・沿岸・浅海養殖漁業と多様な漁業

エコ・ポイント活動の認定・功績手続き

1. 認定手続き

エコ・ポイント活動の申請
環境保全活動を実施する主催者は、指定用紙にて開催日と週間前までに事務局へ活動の申請を行う。

エコ・ポイント活動の認定
事務局は主催者の申請に基づき、エコ・ポイント活動の認定を行う。同時に、主催者に対し器材（カード・ハンコ・のぼり旗等）を貸出する。

一般市民への周知・募集
主催者または事務局は、環境保全活動（エコ・ポイント活動）を一般市民へ周知し、参加の呼び掛けを行う。

環境保全活動（エコ・ポイント活動）の実施

エコ・ポイントカードの配付・押印
活動後、主催者は各参加者にポイントカードを配付し、エコ活動の証としてスタンプを押印する。また、主催者は功績対象者を確認する。

器材の返却・実施結果および功績対象者の報告

2. 功績手続き



宮城県気仙沼市の環境チケット
(エコ・ポイントカード)



海浜清掃中(宮城県気仙沼大島)



海浜清掃の終了(宮城県気仙沼大島)



海の工作教室
(気仙沼大島)



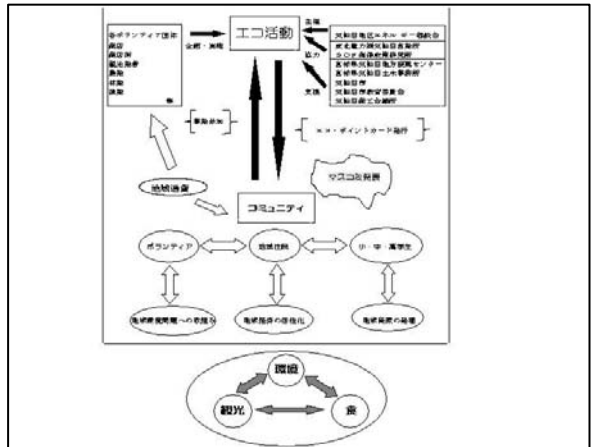
気仙沼市民 59,997人

延べ参加者数 13,877人

エコ・ポイントカード6,746枚

全市民の1割以上がポイントカードを保有

平成16年度「地球温暖化防止活動」環境大臣表彰受章



エコ・ポイントカード活動の協賛店
 飲食店や小売業等55店

市中金融機関
 エコ活動支援定期預金を創設
 エコ・ポイントカードの各賞到達者が対象
 クリーン賞は基準金利より0.06%
 グリーン賞は基準金利より0.09%
 エコロジー賞は基準金利より0.12%上乘せ

はじめに

- ◆ 新島村は、新島・式根島そして3つの無人島
- ◆ 東京から南へ150km
- ◆ 人口3,200人
- ◆ 世帯数1,360世帯(17年1月1日)



- ◆ 東京竹芝桟橋から大型船で10時間
- ◆ 超高速船JFで2時間20分(平成14年～)

年間45,000人
(船舶での来島)

新島羽伏浦海岸

台風などの時は10mを超える波が押し寄せます。



空のアクセス

- ◆ 調布飛行場から30分～45分

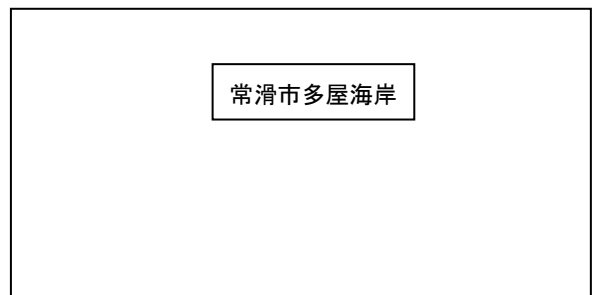
年間11,000人(航空便での来島)

アイランダー3000人乗り
フルニエ19人乗り









常滑市



常滑市多屋海岸は

サポートセンターの目の前にある多屋海岸は、このあたりでは稀少な、約900mの砂浜の海岸で、四季を通して多くの人が訪れると共に、海辺からは伊勢湾を一望でき、空澄無敵の視点を望むことができます。

多屋海岸から望む、空澄無敵地の状況。

夏場には子供も見られる、海岸の状況。

多屋海岸で観察された、アカウツシの子供。

貴重な海浜植物が観察している。

ようこそ！知多海辺のサポートセンターへ

自然海岸の緑化・復元 / 海辺の自然体験・環境教育 / 水難事故防止活動

『海辺からのメッセージ』
 私たちは、自然豊かな伊勢湾と中部国際空港施設を前にした、愛知県東海市多屋海岸を拠点に、海や海辺そして自然や環境などもテーマにしたさまざまな活動を行っています。

有限会社 マリナーズ
 愛知県東海市東店1-1
 TEL:05650234-6466

① 多屋海岸の海浜清掃の様子。
 (①②③④⑤⑥⑦⑧⑨)

①海浜清掃風景

②海浜清掃風景

③海浜清掃風景

④海浜清掃風景

⑤海浜清掃風景

⑥海浜清掃風景

⑦海浜清掃風景

⑧海浜清掃風景

⑨海浜清掃風景

⑩ 清掃終了後。

1) 雨にも関わらず、多くの参加者が清掃活動を行った。(①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩)

2) 子供たちが発見したゴキブリやアゲハの幼虫。(⑪⑫)

3) ゴキブリやアゲハの幼虫が棲息するサポートセンターに同僚が参加者。(⑬)

①海浜清掃風景

②海浜清掃風景

③海浜清掃風景

④海浜清掃風景

⑤海浜清掃風景

⑥海浜清掃風景

⑦海浜清掃風景

⑧海浜清掃風景

⑨海浜清掃風景

⑩海浜清掃風景

⑪海浜清掃風景

⑫海浜清掃風景

⑬海浜清掃風景

⑭ フルタイムスタッフでサポートセンターに向かう子供たち

1) ガールスカウトによる海浜清掃が行われた。(①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩)

2) 集めたゴミを回収。(⑪⑫)

①海浜清掃風景

②海浜清掃風景

③海浜清掃風景

④海浜清掃風景

⑤海浜清掃風景

⑥海浜清掃風景

⑦海浜清掃風景

⑧海浜清掃風景

⑨海浜清掃風景

⑩海浜清掃風景

⑪海浜清掃風景

⑫海浜清掃風景

⑬ 清掃の最後

2. 海辺の工作教室

海浜清掃後、海岸の漂着物や石、木材等を利用して工作を行います。海辺での工作を楽しみながら、山と川と海の関係や、私たちの暮らしとの関係を考える。



①夏休みの間は、親子で工作教室を行います。(①②③④⑤⑥⑦⑧⑨)

②親子工作教室風景

③親子工作教室風景

④親子工作教室風景

⑤親子工作教室風景

⑥親子工作教室風景

⑦親子工作教室風景

⑧親子工作教室風景

⑨親子工作教室風景



①雨天のためサポートセンター室内で工作教室が始まる。(①②③④)
⑦工作に集中する子供たち。(⑤⑥)
⑧工作に使った材料セット。(⑥⑦)
⑨完成した作品の一部。(⑧)

②完成品展示、材料セット

③サポートセンターの廊下で工作に集中する子供たち。

④完成品展示、材料セット

⑤完成品展示、材料セット

⑥サポートセンターの廊下で工作に集中する子供たち。

⑦完成品展示、材料セット

⑧完成品展示、材料セット



⑦海浜清掃に参加した子供たちと交換したブルーシートと工作セットを交換する。(⑦⑧⑨⑩)
⑧サポートセンターで海浜工作教室を開催(⑩⑪⑫⑬)

①ブルーシートと工作セットの交換

②海浜工作教室の様子

③ブルーシートと工作セットの交換

④ブルーシートと工作セットの交換

⑤海浜工作教室の様子

屋外での工作教室

- 1) 海辺にある施設を活用することで、海浜清掃活動と工作教室の開催が可能になる。
- 2) 屋外での工作教室の展示例。(①②)
- 3) 海浜清掃の様子。(③④)
- 4) 工作教室の様子。(⑤⑥⑦⑧)



①工作材料の展示

②工作材料の展示

③工作教室の様子

⑩午後のからは海岸で伊勢湾の地形や気象と漂着物の関係を学ぶ。(⑩⑪)
⑪海岸を観察しながら海岸清掃を行う。(⑫⑬⑭⑮)
⑫サポートセンターに集って、漂着物の説明を聞き、その後、工作教室が始まる。(⑯⑰)

①中津川から伊勢湾へ流す川の様子。

②海岸から漂着物の回収の様子。

③海岸清掃の様子

④海岸清掃の様子

⑤海岸清掃の様子

⑥海岸清掃の様子

1. 多層区630運動

1. 実施日:平成14年7月7日(日)
2. 時 間:7:30~12:00
3. 場 所:愛知県東海市多層海岸
4. 天 候:雨のち曇り
5. 参加者:多層区民 約160名
6. 実施状況



①11時集合

②海浜清掃の様子

③参加者への説明

④海岸清掃の様子

⑤海岸清掃の様子

⑥海岸清掃の様子

- 1) 当日は朝雨が降りましたが、多くの参加者が集まり、清掃活動が行われた。
- 2) 清掃活動に参加した子供たちは、こはな回収券をこはなと交換してSOFのブルーシートを配付した。
- 3) ブルーシートはサポートセンターで工作セットと交換して、工作教室に参加できる。清掃活動に参加した多くの子供たちが、海辺の工作教室へ来た。

⑦ブルーシートと工作セットの交換

⑧ブルーシートと工作セットの交換

⑨海浜工作教室の様子

5) 海浜工作教室に参加する参加者たち。(①②③④⑤⑥⑦⑧)










6. 実施状況

1) サポートセンター前の多層海軍で受付開始。子供の参加組にはブルーシートを配布。(①②③④)

2) 多層海軍でラジオ体操を行い、海岸ウォーキングする。(⑤⑥⑦⑧)

3) 多層海軍の清掃活動を実施。(⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱)

2) 海岸清掃で集めたゴミを回収する。(①②③)

4) 清掃活動に参加した子供たちに工作セットを配布。(④⑤⑥)

5) 親子で工作の準備をする。(⑦⑧)














1) 午前中は海岸清掃が行われた。(①②③④⑤)

2) 集めたゴミを回収。(⑥⑦⑧)






















3) 参加者には、サポートセンターで工作セットが配られた。(①②③④⑤⑥)

4) 工作用の材料セット。(⑦⑧)










知多半島日間賀島



日間賀島の位置



多幸(タコ)と福(ふぐ)



これまでの流れ

- 観光地として、観光協会を中心に海岸の清掃活動を行ってきた。
- 南知多町では、率先して下水処理事業に取りかかる。
- キッズアドベンチャー 夏休みの間、数人のインストラクターが常駐して、いかだ作りや、素潜り、キャンプファイヤーを実施。毎年、3000名以上の親子が参加。体験を通じて、親子のふれあいや、自然・生き物への好奇心を深める。

海岸清掃プロジェクトへのきっかけ

- 2003年～ 日間賀小学校の授業でライフセービング指導
救命活動だけではない
事故防止 仲間との絆 など
【子供達の習った海洋環境教育】
きれいな海の環境保全を島民とともに観光客にも考えてもらう。

海の日イベント

- サンライズビーチ H16. 7. 18



海の日 イベント



海の日イベント

- 海岸清掃
- ライフセービング



日間賀 環境チケット

日間賀島 環境チケット

海が好き



海の日イベント実行委員会

..... 日間賀島 環境チケット

日賀島の海の日イベント、これに生活する人々の貴重な財産です。それは訪れる人にとっても同じです。このイベントを通じて、水質を浄化することもできます。またこの島の環境を大切に守り続けたいと願っています。

★主催：海の日イベント実行委員会（日間賀島観光協会）
★協賛：S O 平海学芸館 長崎ライフセービングクラブ
★協力：レックナタ

環境チケットの使い方

●このチケットは日間賀島「海の日イベント」において、島民連帯（E-チケット）参加者にその活動の証として配布されます。
●このチケットは毎日開催される島のワークショップ等に使用されます。

海の日イベント



海の工作教室



海の工作教室



海の工作教室



今後の展望1

- 漁業と観光のタイアップで地産・地消、産業振興と人材育成を進めていきたい。

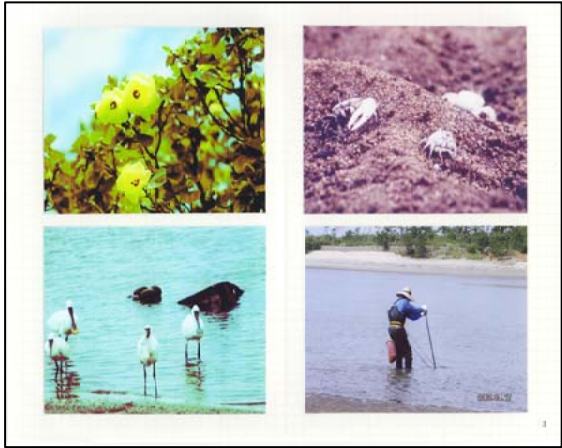
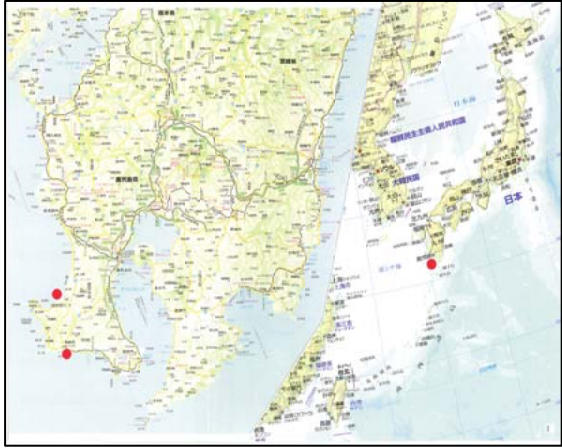
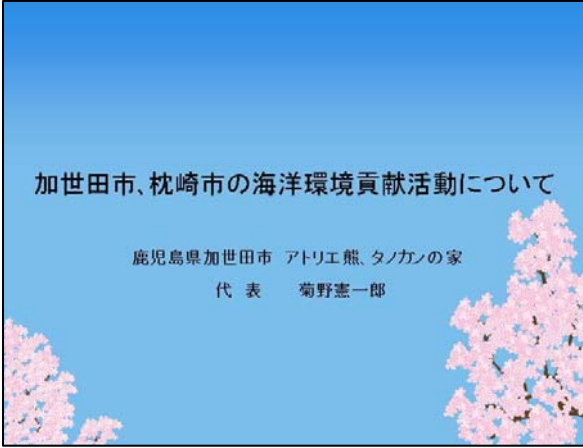
- ①料理開発
- ②地元産物の市場調査
- ③漁協主体の朝市
- ④自然体験漁業の見直し

今後の展望2

- ④自然体験漁業の見直し
 - 体験型プログラム
漁業体験
キッズアドベンチャー(自然学校の設立)
 - 島民のライフセーバー育成
島の自然や生き物、島の人間と触れ合う中で海に対する謙虚な気持ちを感じ取って欲しい。そのインターメディアリーとしてライフセーバーに期待したい。

レッツチタ







産児島クリーンアップキャン

海洋ゴミ問題改善の課題と方策の提言

産児島大学水産学部 産児島動物教授

●陸上起源ゴミが全体の60%を占める
 内90%以上が日常生活やレジャー、趣味などに起因するゴミ
 日常生活が最も多く海岸へ負荷をかけている
 ↳アイスクリーム包装の硬質容器
 海岸清掃活動、工作教室などを通じた啓蒙活動
 川の浄化、海の美化活動の必要性

●二次発生の破片が40%以上
 発破ゴミが更に多くの破片を生産させる
 意外性による発生、差別による発生
 自然発生のゴミではない
 目に触れない場所で発生し
 遺物の体内に取り込まれる
 世界の海に漂着量が増加
 ↳一人に届かない漂流物や汚染物のすみやかな回収
 ↳トナリボットなど回収機種の開発

●産児島屑ワースト1は発泡スチロール破片
 ↳2海面魚類生息の汚染力
 ↳船舶の危険物として規制
 ↳アイスクリーム包装の硬質容器
 ↳身体が丈夫で、一時期に大量の廃棄物となる
 ↳5%が浮力のため漂流物までの輸送コストが高い
 ↳廃棄物の処理に必要のコロリーが必須
 ↳マテリアルリサイクルには30年間の一時処理が必要
 ↳海岸ゴミの発生量の減少
 ↳発泡スチロール減容機の開発
 ↳発泡スチロールの付着防止剤の活用
 ↳マテリアルリサイクル

●屑ワースト1は産業起源が多い
 水中で沈没されるアイテムが多い
 海面上に漂着するゴミの浮力も不明
 海岸ゴミの回収困難

●海洋ゴミ問題は世界共通
 ワースト1アイテムは国産品
 日本企業や世界と取引している
 一環的な協力体制の強化
 各地域での積極的な回収活動と発生防止の努力

ゴミ種別	中核種	アイテム名	割合
●発破・生活ゴミ	数量	4	30%
	重量	21	62%
	体積	13	21%
●海上起源	数量	4	10%
	重量	4	10%
	体積	1	2%

順位	2002年	(%)
1	プラスチック類	17.7
2	発泡スチロール	12.3
3	ガラス類	8.3
4	繊維物	7.2
5	紙類	4.0
6	缶	3.5
7	発破品	2.8
8	発破品	2.8
9	発破品	2.5
10	発破品	2.5
その他		30.2
合計		57.7

子ども環境活動:「石灰〜むくむ〜でつづくり」

11月29日(土)、30日(日)、サンゴを焼いての石灰づくりを行いました。明治時代につくられた炭(ハヤシガマ)が壊されています。この炭に、海産から採れた「殻石灰」と呼ばれるサンゴを砕いて、タネと交互に積み重ねて焼きます。昭和40年代まで牧師市白沢でこの仕事に従事していた中後末幸さんに指導を受けながら行いました。その後、石灰にスチーマーを流してつくった真っ白い色を加えて、この絵(江戸時代の文化の一つで、しっくい職ここで絵を描く)を描きました。

宮古島

宮古島の場所



宮古島観光の実情

観光資源の侵食



百年大計の自立策
複合観光産業

観光客が
来れば来るほど
美しくなる

経済の車輪
環境の車輪
両輪を回す

エコバカンス
ECO VACANCE

2004年度活動報告

海浜清掃エコバカンス

2004年2月28日 80人

6月12日 60人

主催：エコガイド教育コンソーシアム

共催：シップ&オーシャン海洋政策研究所

伊良部島・渡口の浜



船で伊良部島に到着



裸足で海浜清掃



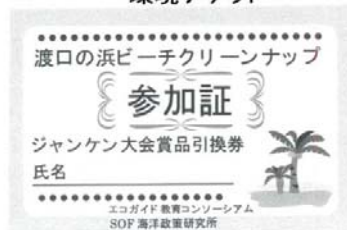
ゴミ一つ無い美ら浜



海辺を楽しむ



環境チケット



夢中になる子供たち



大人気の工作教室



サンゴ礁の定点観測

スノーケリング



サンゴ礁をデジカメ撮影



カヌーも体験



水中でも観察学習



水中ガイドブック



マングローブ植林



泥につかって汗まみれ



高輪ロータリークラブ



2005年度計画

自然再生事業

地域の和

科学の目

自然の力



自然再生推進法のあらまし



観光客
による

地域の和
科学の目
自然の力

自然再生
パイロット
プロジェクト

自然再生推進法のあらまし

企業&学校向け提案

- ボランティア休暇旅行
- 企業のCSR研修旅行
- 自然再生学習修学旅行
- 健康再生LOHASツアー

<http://webman.jp>

グーグルにて

『エコガイド』

で検索

九州地区 海洋環境貢献活動

—九州・海ネットワーク2004—

下津公一郎



背景

『日本ぐるっと一周・海交流』

- 日本の海をもっと活用したいと願う人
 - 海同士の交流を活発にしたいと願う人
 - 海の環境問題を解決したいと願う人
 - 海で子どもたちを遊ばせたいと願う人
- 等そんな志をもった人々が連携して、ヨットや漁船などで各地域をリレー形式で回り、2004年日本一周を実現しました。



日本ぐるっと一周・海交流



海洋のゴミ問題を考える —地域の継続的活動を目指して—

- 海の抱える課題や問題を共有し、共通な目的で解決するシステムづくりの一環として、ゴミ問題への取り組みを実施。



- ・海洋環境保全についての理解を深める
- ・具体的問題の解決を行う活動主体としての組織の育成・強化
- ・優れた中核となる人材の確保
- ・広く地域の関係者の合意の下での役割分担を明確化

地域ぐるみで取り組む体制づくりが重要



九州・海ネットワーク2004

「健康な海づくり」プロジェクトとしてSOF海洋政策研究所の協力を得て、九州沖縄各地の海に面した地域で、海浜清掃と海の工作教室を実施する。

○実施した地域

鹿児島県鹿屋市、鹿児島県枕崎市、熊本県宇土市、佐賀県伊万里市

○今後の実施予定地域

鹿児島県笠沙町、熊本県牛深市、熊本県水俣市、宮崎県日南市、宮崎県串間市、長崎県佐世保市、長崎市、佐賀県唐津市、大分県別府市、大分県日杵市、福岡県北九州市、福岡市、沖縄県金武町、沖縄県





宇土マリーナから雲仙を望む



みんなでゴミ拾い



海の工作教室



海の工作教室



循環型環境で育てる魚

九州・海ネットワークがめざすもの

海は人を鍛え、育て、元気にする。
海から日本を変え、日本を再生しよう。

- 共通の課題・問題を共有し、連携して問題の解決に当たる(環境問題、津波震災など)人のネットワークをつくる
- 人と人が交流を深める、人と海とが付き合うための海の交流拠点「海の駅」のネットワークをつくる
- 子どもたちに海を体験させ元気な子どもに育てる
- 海の町、山の町の交流を進める

新しい時代のはじまり(地域づくり読本より)

1. 地球時代

政治・社会・文化・環境・技術など、あらゆる分野で世界各国の相互関係が深まっている。経済活動から市民生活まで、地球的視野が欠かせない。

2. 自然再確認の時代

大量消費・大量廃棄型の生活の反省から、自然環境や歴史的遺産の価値がみなおされつつある。自然環境は保護だけでなく、回復・創出し、健全な姿で後世に継承していくべき資産。

3. 人口減少・高齢化時代

予想を上回る速さで高齢化社会を迎える。労働供給面や社会保障面に著しい影響が出る。今後、地域を越えた国内外との人的交流や地域間連携をいっそう強めていく必要がある。

4. 新地方の時代

地方分権が叫ばれて久しい。規制緩和や行財政改革と一体となって現代の世論を背景に本格化しつつある。

5. 本格的な高度情報化の時代

高速、大容量の情報通信技術の革新が顕著。地域づくりは、高度情報化の成果を大いに活用すべきである。

NPOの取り組み

吹上浜再生植林事業

鹿児島県薩摩半島の南西部に位置する、日本三大砂丘の吹上浜砂丘はなだらかな丘陵、飛砂防備保安林として以前は黒松が生い茂っていた。しかし、松くい虫の被害で全滅し、現在は低木の広葉樹がまばらに生えている状況。
対策: 抵抗性マツ、黒松を2002年より九州電力と協働で毎年1万本植樹

南さつま体験型エコ・ツアー事業

海・山の自然体験と海の幸・山の幸を満喫するエコ・ツアー
海の体験 ホエールウォッチング、リアス式海岸めぐり、砂丘に植樹、漁師鍋
山の体験 植林体験、間伐体験、そば打ち体験



植林事業

地元学の実践

地元学は、地元学ぶことです。自分たちが暮らす地域のことを、よそ者(外部者)の目を借りて、一緒に歩き調べます。地域資源カードや水の経路、人材マップなどを作成して、地域や環境の見直し作業を行い、地域活動の活性化と生活文化の継承、環境学習や体験型ツーリズムの促進し、自然と共生できる地域社会づくりを進める。

祖父母世代に学ぶ地域学

子どもたち自身が、いま失われつつある豊かな自然や祖父母世代の優れた技や知恵などの本来の姿を、祖父母世代との交流を通して「聞き書き」し、出版物にまとめる事業。

住んでいる地域の自然や伝統的な文化や言語を語るうえで貴重な記録として残されるとともに、子どもたちをはじめ地域の人々に、そこに住むことに大きな誇りと自信を育むことを目的として実施。

終

5. 海洋ゴミに関する技術的取り組み

5.1 海洋ゴミ集積技術について

海洋ゴミ集積技術に関しては、平成15年度に世界の海洋ゴミ集積機械に調査を実施した結果(平成15年度報告書参照)、海浜清掃装置としては、砂浜専用のビーチクリーナ又は、農耕用のトラクターに専用のアタッチメントを装備し流木等を回収する機械がほとんどで、清掃をする海岸は砂浜等の平坦な場所を対象としており、人は入れないような岩場や岩礁地帯を対応したゴミ回収機械は世界的に見ても見あたらない。

台風や荒天時に大量に漂着する海洋ゴミは、自治体が民間業者に委託して専用の海浜清掃機械やブルドーザー、ショベルカー等の機械により清掃を行っているレベルに限られ、岩場、崖等の岩礁地帯のゴミは、放置されているのが実情である。しかし、多くの岩場や岩礁地帯は、海岸線の中でも日本的な美しい風光明媚な景勝地にあり、陸から海を見下ろすと岩礁の隙間に大量のゴミが堆積・散乱している風景問題である。そこで、岩礁地帯の清掃用のロボットシステムの取りまとめを行った結果を記す。

5.1.1 岩礁域回収システムイメージ

岩礁地帯での問題点としては、①足場が不安定な不整地 ②機器の運搬が困難③回収したゴミの運搬も難しいという点である。そこで、そのような問題を解決する為、不整地走行が可能な多足マニピュレーターによりバキューム吸引ホースを移動させ、ゴミを吸引・回収するシステムについて検討する。バキューム車を利用する事により、運搬設備の整わない岩礁地帯でもスムーズなゴミ回収作業が可能であるが、バキューム車が入れない事も考慮し、減容装置という展開も含め検討した。

①システムイメージ(1) (図5.1.1 参照)

マニピュレーター式の回収車(不整地走行ロボット)にてゴミを回収し、バキューム車にて吸引し処理場まで搬送するシステム

②システムイメージ(2) (図5.1.2 参照)

クローラ式の回収車にてゴミを回収し、バキューム車にて吸引し処理場まで搬送するシステム

③システムイメージ(3) 図5.1.3 参照)

ベアラ又は、マニピュレーター式の回収車にてゴミを回収し、減容するシステム

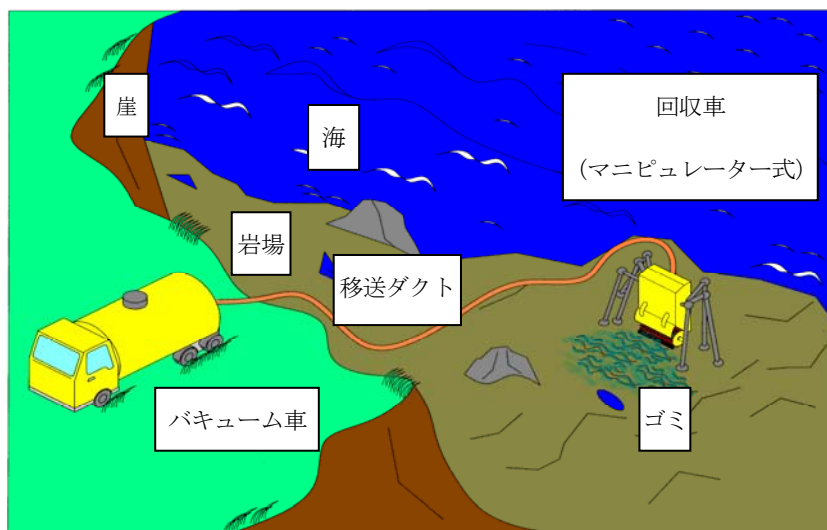


図 5.1.1 マニピュレーター式の回収車+バキューム



図 5.1.2 クローラ式の回収車+バキューム

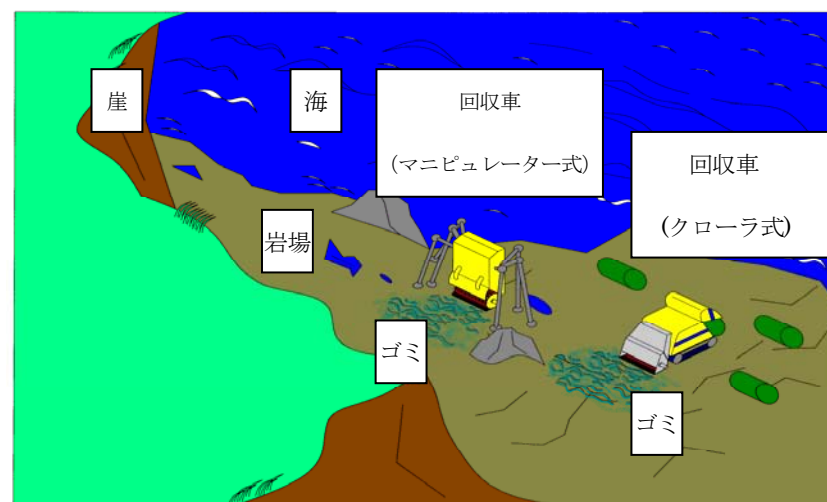


図 5.1.3 回収車+減容ロールベア

5. 1. 2 海洋ゴミ集積技術の今後の課題

多足マニピュレーター等を利用した岩礁地帯のゴミ回収システムに必要な技術、装置は既に研究・実用されているものが利用できるが、どの装置も海洋ゴミの回収を主目的としたものではなく、小型化、耐海水対策等の改造が必要である。

今後の課題を下記にまとめる。

【ゴミ回収装置のロボット開発】

不整地走行ロボットの開発及び試験

適応した採取部(マニピュレーター等)の開発及び試験

遠隔制御・監視部の開発及び試験

海水対策

【集積・輸送装置のシステム確立】

真空吸引の評価

不整地搬送車の開発及び試験

回収梱包の評価

遠隔制御・監視部の開発及び試験

海水対策

【システム全体検討】

操作方法(目視／自動、無線／有線等)

機材(機械)の運搬、搬入、撤収方法

機材(機械)の保管、管理

5.2 海洋ゴミ処理技術について

国内外の海洋ゴミ処理技術の開発状況、ゴミ処理関連技術に関し、平成15年度に調査(平成15年度報告書参照)を行なった結果、海洋ゴミのほとんどは、埋め立てや焼却を行っている。

本調査研究では、プラスチック、ビニル、発砲スチロール等の人工系海洋ゴミと、漂着海草・藻等の自然系海洋ゴミに分け、それぞれの処理技術について調査を行った。

人工系の海洋ゴミは、焼却か埋め立てが最も簡便な処理方法であるが、海岸から大量に集められる海洋ゴミは、普通はトラック等の機械力で焼却場、埋め立て場に運搬しているが、最近では、埋め立て場所の規制や、海洋ゴミに塩分や水分が含まれていることや、プラスチック等の人工系海洋ゴミや海草等の自然系ゴミが混在していることから、ゴミ焼却場での受け入れが難しくなっているのが現状である。そこで、プラスチック、ビニル等の人工系海洋ゴミは、海岸清掃を実施した海辺で小型焼却炉により焼却処理を行うシステムについて検討を行った。

また、海草・藻等の自然系海洋ゴミは、新鮮うちの海草・藻は、そのままでも肥料などにリサイクル利用が可能であるが、海岸に長期に亘り放置された海草・藻は、腐敗し、また、プラスチックや木材等が混在しているため、海岸管理者はその処理に苦慮している。

本調査研究では、海岸に漂着し腐敗した海草のリサイクル化について平成15年度から取り組み、実験室規模の基礎実験を実施した結果、その生成液は液体肥料としての可能性が高いことが分かり、今年度は数100kgの海草を用いた海草のリサイクル実験を実施した。

以下に、小型焼却炉の概念検討及び海草のリサイクル実験結果を示す。

5.2.1 人工系海洋ゴミの処理技術について

1) 海洋ゴミ焼却用小型焼却炉

海岸清掃において、一カ所の海岸からは、多くてもゴミ袋20～30個程度の海洋ゴミが集積されていると想定し、その焼却用のゴミ焼却炉の概念図を作成した。プラスチックやビニル等の自然系海洋ゴミを焼却すると、環境に有害な排気ガスが発生するため、できるだけ高温(800℃⇒約1400℃)で燃焼させることとし、排気ガスの処理も併せて行う小型焼却炉の概念図を作成した。その開発要素と焼却炉の概念図を図5.2.1に示す。

*開発要素

高温燃焼技術(800⇒1400 度)

排ガス処理技術(安価な触媒開発)

排気ガスの無害化:環境規制値のクリアー



図5. 2. 1 小型焼却炉の概念図

5. 2. 2 自然系海洋ゴミの処理技術について

1) 海草の微生物分解処理技術

海洋のゴミの内、海岸に漂着する海草・藻等の自然ゴミの占める割合が圧倒的に多く、海岸に放置しておく、腐敗し悪臭や虫等が発生するため環境破壊の主因ともなる。そこで、海岸に大量に漂着する海草・藻を回収し、有用な物質への変換技術について検討を行った。

海草・藻を肥料として利用する技術は、以前から世界各地の沿岸で行われてきた。日本では江戸時代、テングサ等を畑の肥料として使われた記録がある。欧州では、海藻を焼いた灰をカリウム肥料として使われた例がある。

海草・藻には、カリウムやミネラルが豊富に含まれ、粉末や液体にして畑の土壌や植物の葉に散布して使われている。

海草・藻が海岸に漂着した後、新鮮な内に回収することは難しく、かつ、プラスチック、ビニル、ビン、缶等の人工ゴミが混ざり、粉末や液体にすることが難しいことから、ある程度の分別は必要であるが、少々の人工ゴミが混入しても処理が可能な、腐敗菌や腐敗した後の微生物分解処理を行い、最終的には植物の肥料となる窒素やミネラル分が残留する微生物分解処理方法について検討を行った。

植物(海草・藻)が成長するには、太陽光、二酸化炭素、水が必要であるが、成長するに伴い養分が必要となる。海中では、窒素(硝酸塩)、リン(リン酸塩)、珪素(珪酸塩)等が必要で、特に必要な養分としては硝酸塩や珪酸塩がある。植物の光合成には硝酸塩と鉄分が深く関わり、葉緑素の生成に大きな役割をはたしている。

大自然の中では、森の落ち葉、草、木等の腐葉土の中では微生物の働きで、ある酸性の物質が作られ、土壌の中にある鉄分と結合し、雨が降ると腐葉土からその物質がしみ出して川の水に溶解大量に海に運ばれて植物プランクトンや海草・藻の栄養となっている。

本微生物分解処理技術の検討では、海草・藻が腐敗した後の生成物を取り出し、微生物で分解して植物プランクトンや海草・藻の栄養分になる硝酸塩や珪酸塩等のミネラルを含む液体を抽出し、海洋及び陸上植物の肥料としての利用の可能性について検討及び実験を行った。

2) 海草の微生物分解処理実験

(1) 目的

海岸にうち寄せる海草・海藻類の有効利用策として、塩分が含まれる腐食生成液を、好気性微生物(バチルス菌等)で分解処理を行い有機物やミネラルを含む液体の生成に関する基礎データを得る。本実験で使用する微生物分解処理フローと実験装置の概念図を図5. 2. 2に示す。

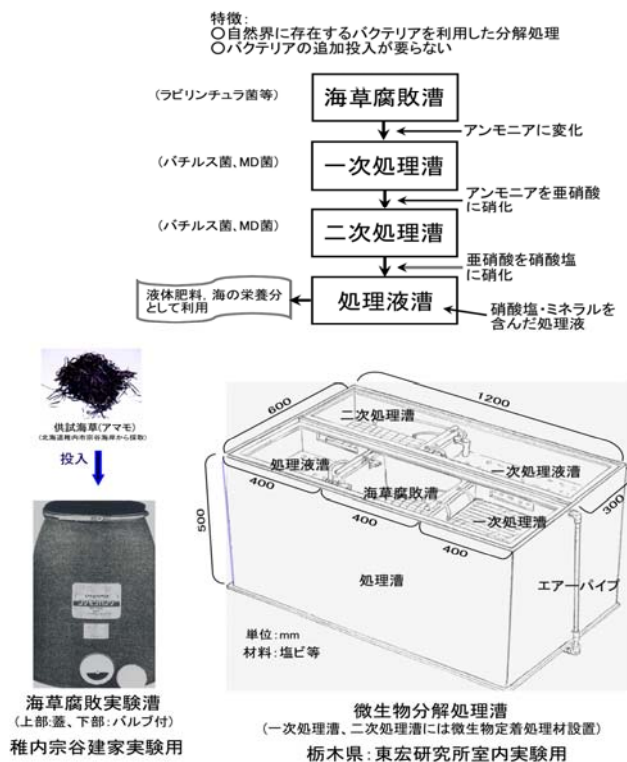


図5. 2. 2 海草の微生物分解処理フロー及び実験装置

(2) 実験方法

海岸に漂着している「アマモ」を採取し、腐敗槽に投入した後、アマモやマングローブ落葉の海生腐敗菌である「ラビリンチュラ属菌」及び水を混入し、アマモを腐敗(海草腐敗処理)させる計画であったが、他所からの微生物搬入は、土着生物の環境破壊を招く危険性があることから、採取地点の腐敗菌により海草を腐敗させることとした。

腐敗タンク内で腐敗した液体生成物を、微生物分解処理装置内に設置してある微生物(バチルス菌 A、B[Nitronbacter,Nitrosomonas 等]、MD 菌等:特許実施許諾)が定着したろ剤を通過させることにより有害成分を植物の生育に有効な成分に分解処理する。

(4) 実験期間

平成16年 9月 10日～平成17年2月28日

(5) 共同実験者

北海道稚内市経済部水産課、教育部、(株)東宏

(6) 供試海草

稚内市宗谷海岸に漂着したスガモ(写真1から2参照)

(7) 実験内容

a. 海草腐敗実験

北海道稚内市宗谷海岸で採取したアマモを、表5. 2. 1に示す実験条件で、稚内市宗谷実験
建家内と(株)東宏 研究所内に設置した。

表5. 2. 1に示す実験条件で約2ヶ月間自然放置により海草を腐食させ、腐敗液を微生物分解
処理装置に移動する。

表5. 2. 1 海草の微生物分解処理実験の実験条件

実験場所 実験条件	稚内市宗谷実験建家 (海草腐敗実験)	(株)東宏 研究所室内 (海草腐敗、微生物分解処理実験)
実験 A ・槽温度 ・水分比	アマモ+海水(合計 180 kg) (45 kg+135 kg) 自然放置 1:3	アマモ+海水(合計 40 kg) (10 kg+30 kg) 約 15～25℃ 1:3
実験 B ・槽温度 ・水分比	アマモ+牛糞+海水 (40 kg+ 5 kg+135 kg=180 kg) 自然放置 1:3	アマモ+牛糞+汽水 (9 kg+1 kg+30 kg= 40 kg) 約 15～25℃ 1:3
実験 C ・槽温度 ・水分比	アマモ+淡水 (28 kg+152 kg=180 kg) 自然放置 1:6.45	アマモ+淡水 (5.5 kg+30 kg=35.5 kg) 約 15～25℃ 1:6.45

北海道稚内市宗谷海岸に漂着している海草(アマモ)の写真を写真5. 2. 1に、腐敗タンクへの海草(アマモ)投入作業の写真を写真5. 2. 2に示す。



写真5. 2. 1 漂着した海草と人工系海洋ゴミ

写真5. 2. 2 海草(アマモ)の採取作業

b. 微生物分解処理実験

図5. 2. 1の海草の微生物分解処理フローを適用した実験装置【微生物(バチルス菌等)を定着させた天然ゼオライトで処理対象の液体を通過させる】で、腐敗液投入槽、第1次処理、2次処理を経過後、最終槽に滞留した処理液の成分を分析する。

・測定器

微生物分解処理液の経過を測定する測定器の種類を以下に、測定器の写真を写真5. 2. 3に示す。

○ アンモニア性窒素(NH₄-N) :

試薬(Tetratest:テトラベルケ社)、ユニメーター
(筑波総合科学研究所)

○ 亜硝酸性窒素(NO₂-N) :

試薬(Tetratest:テトラベルケ社)、ユニメーター
(")

○ pH : 試薬(Tetratest:テトラベルケ社)

○分析項目

腐敗菌や分解菌等の微生物を用いて効率良く処理を行い、最終処理液の成分を分析する。
最終処理液の分析は、専門機関に依頼した。

・分析項目 : 肥料取締法に基づく表示項目(槽内温度、窒素、銅、石灰、炭素、ミネラル成分等の全量%)、臭気、pH、塩類(CaO,MgO,K₂O,,Na₂O 等)他

微生物分解処理液検査測定器等



アンモニア(NH₃)測定試薬
(測定範囲: 0~5mg/L)



亜硝酸(NO₂)測定試薬
(測定範囲: 0~33mg/L)



ユニメーター測定器



pH測定試薬
(測定範囲: 5~10)

写真5. 2. 3 処理液の測定器等

北海道稚内市宗谷海岸の漂着海草(スガモ)を写真5. 2. 4に、宗谷海岸実験建家に設置した、海草腐敗タンク(180リッター、3個)を写真5. 3. 5に、実験条件A(アマモ+海水)の設置状況を写真5. 3. 6に、実験条件B(スガモ+牛糞+海水)の設置状況の写真を、写真5. 3. 7に示す。



写真5. 2. 4 宗谷海岸のアマモ



写真5. 2. 5 宗谷海岸建家の腐敗タンク



写真5. 2. 6 実験条件Aの腐敗タンク



写真5. 2. 7 実験条件Bの腐敗タンク

栃木県(株)東宏研究室内の海草の微生物分解処理実験装置の写真を写真5. 2. 8に、腐敗タンクの写真を写真5. 2. 9に、腐敗タンクA(アマモ+海水)の腐敗状況の写真を写真5. 2. 10に、腐敗タンクB(アマモ+牛糞;海水)の腐敗状況の写真を写真5. 2. 11に、腐敗タンクC(アマモ+淡水)の腐敗状況の写真を写真5. 2. 12に、腐敗タンク生成液の写真を写真5. 2. 13に示す。



写真5. 2. 8 海草の微生物分解処理実験装置



写真5. 2. 9 東宏研究室内の腐敗タンク

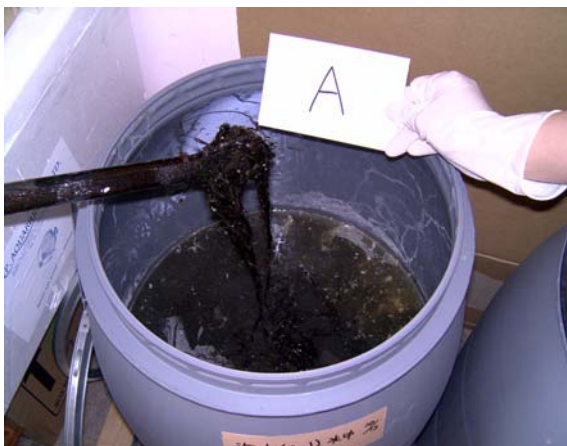


写真5. 2. 10 腐敗タンクA(アマモ+海水)

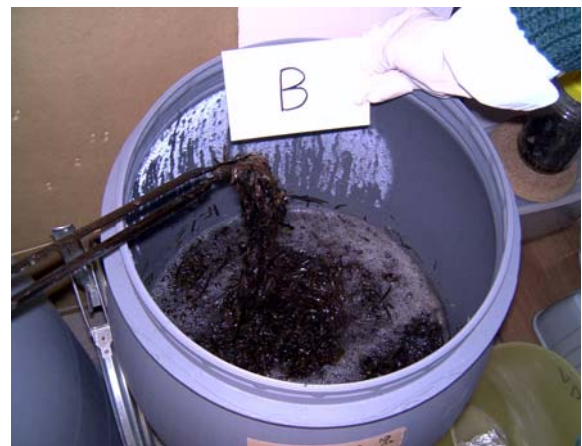


写真5. 2. 11 腐敗タンクB(アマモ+牛糞;海水)



写真5. 2. 12 腐敗タンクC (アマモ+淡水)

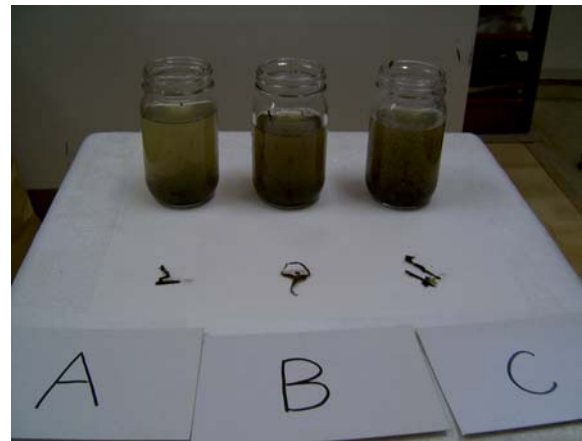
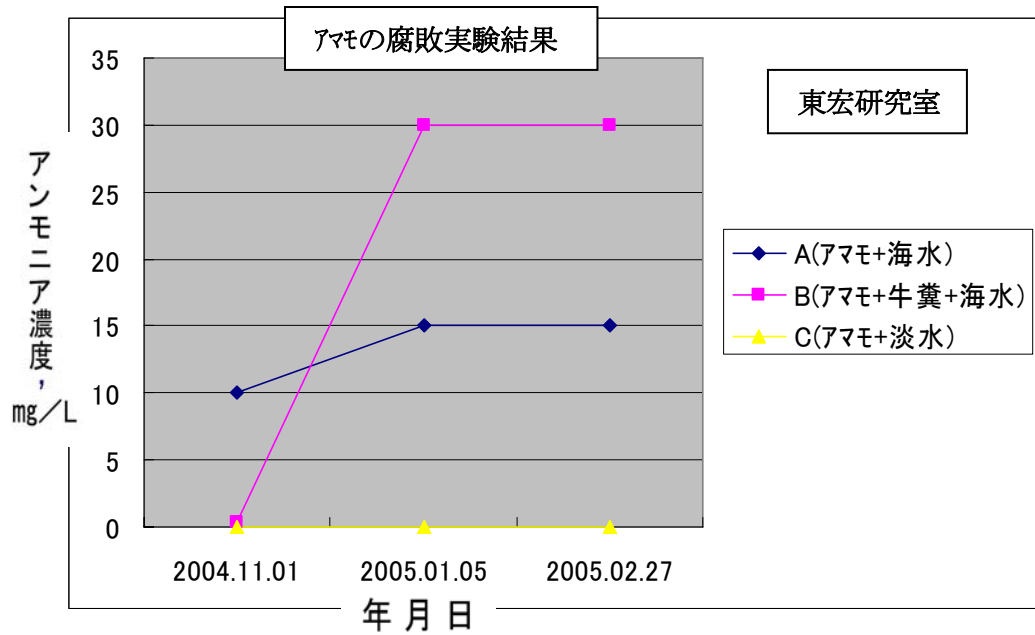
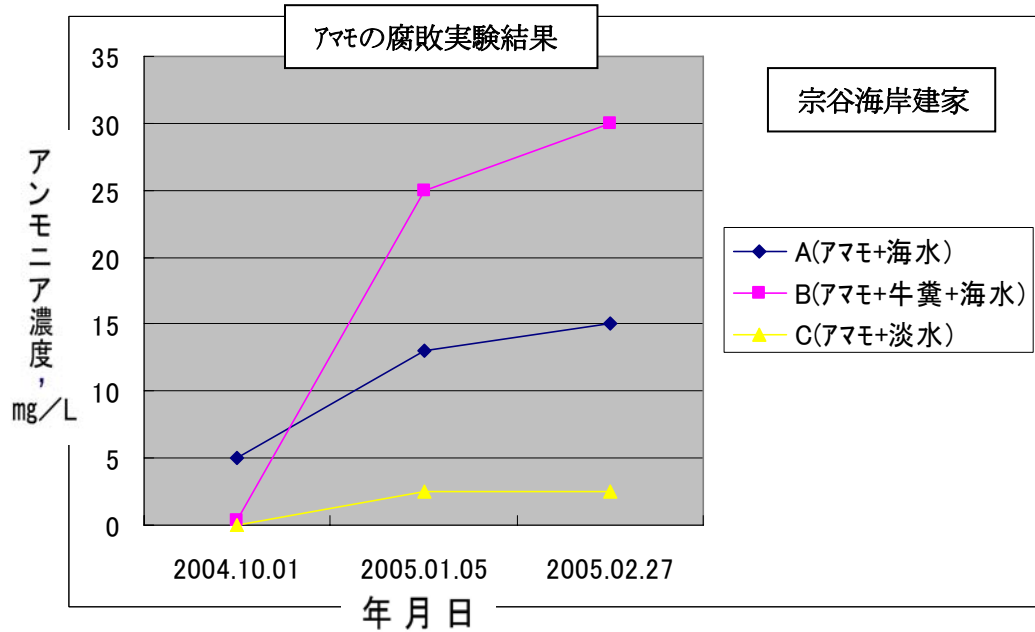


写真5. 2. 13 腐敗タンク生成液

(8) 実験結果

a. 海草(アマモ)腐敗実験結果

北海道稚内市宗谷海岸と(株)東宏研究室の海草腐敗実験結果を下図に示す。



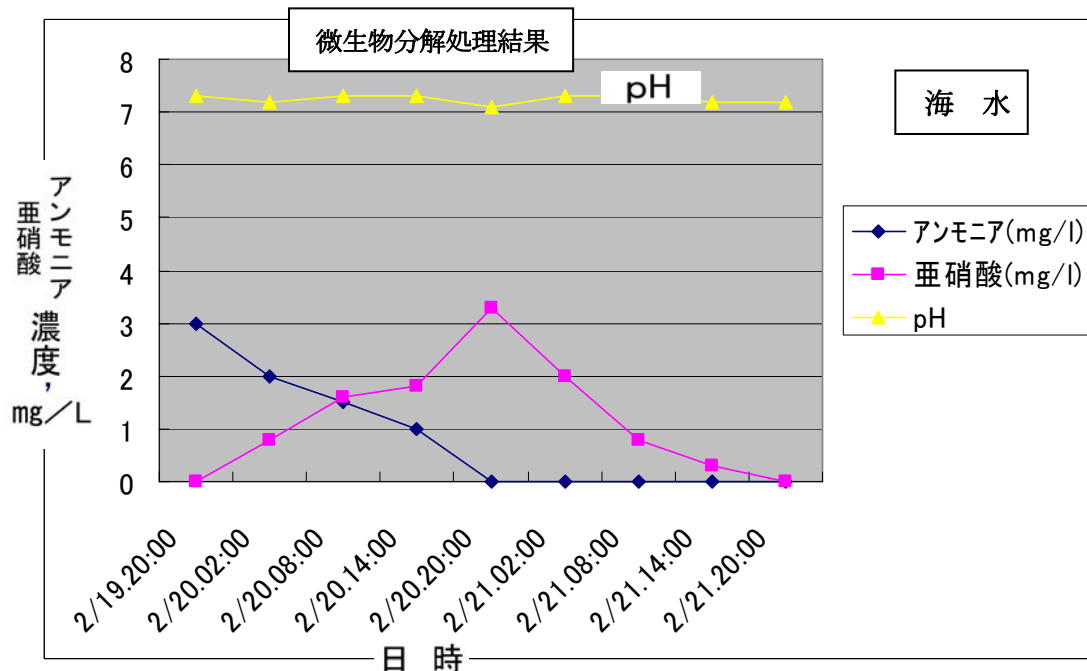
宗谷海岸建家の腐敗タンクと東宏研究室の腐敗タンクの腐敗速度は、初期段階では稚内宗谷建家の腐敗進行は遅いが、約4ヶ月後には、ほとんど同じ数値になった。

実験B(アマモ+牛糞+海水)のアンモニア濃度は、実験A(アマモ+海水)のアンモニア濃度の約2倍であった。実験Aと実験Bの腐敗速度は、ほぼ同じであるが、実験C(アマモ+淡水)の腐敗はほとんど進行が見られなかった。

参考として、上記実験の他、腐敗促進材として、海水にホタテ内蔵を投入した実験D(アマモ+ホタテ内蔵+海水)の腐敗実験を実施した結果、実験Dのアンモニア濃度は、約300mg/Lで、ホタテ内蔵の腐敗促進効果は大きかった。

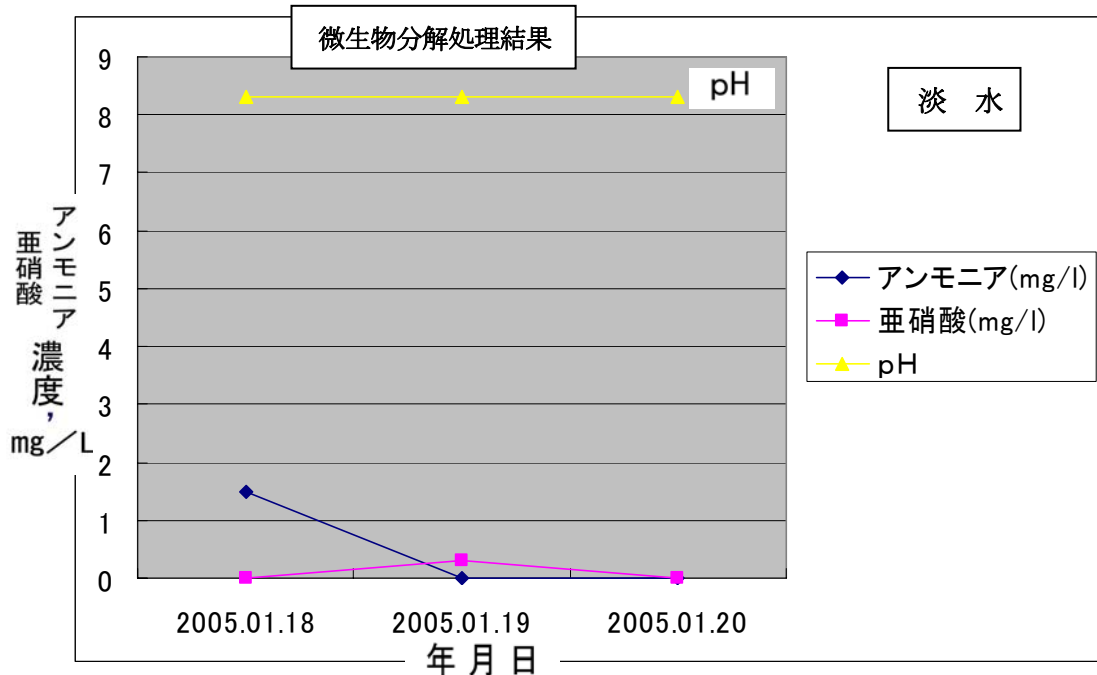
b. 腐敗液の微生物分解処理実験結果

稚内市宗谷海岸建家と東宏研究室の腐敗タンクで生成した海水と淡水の腐敗液を、塩水と水道水(淡水)で微生物分解可能な濃度まで希釈(希釈度:1/10)し、それぞれを微生物分解処理装置に投入して実験した。海水と淡水の分解処理結果を以下に示す。



微生物分解処理装置による海水腐敗液(アンモニア濃度:3 mg/L、処理液体量:1L)のアンモニア分解速度は、約24時間経過後、アンモニア濃度が0 mg/Lになり、アンモニア濃度が低下するに従い、亜硝酸が増加し、アンモニア濃度が0の時点で、亜硝酸濃度が最大(3.3 mg/L)であった。

その後、約24時間で亜硝酸濃度が0になった。



淡水腐敗液(アンモニア濃度:1.5 mg/L、処理液体量:1L)のアンモニア分解速度は、海水の分解速度とほぼ同じ24時間で0 mg/Lになっているが、淡水での計測間隔が24時間であったことから、実際はもっと早期にアンモニア分解処理が終了していたと思われる。

c. 微生物分解処理液の分析結果

海水の微生物分解処理が終了した(亜硝酸濃度が約 0 mg/L)時点での処理液の残留成分分析を行った。成分分析結果を下図に示す。

成分	窒素	炭素	リン	カリウム	マグネシウム	ナトリウム	硫黄	石灰	鉄
	N	C	P	K	Mg	Na	S		Fe
1L 当り重量	3.5g	16.5g	16.0g	8.7g	1.8g	0.9g	0.58g	16mg	13.3mg

*塩分濃度:0.3%(1/10 希釈)、その他の成分:銅、亜鉛、硼素、モリブデン等:1mg以下

(9) 考察

海草(アマモ)の腐敗と微生物分解処理による肥料化の可能性について調査した結果、アマモの腐敗速度が常温で約4ヶ月とかなり長時間を要することから、もっと短時間に腐敗させる腐敗促進剤と腐敗温度管理が必要と思われる。

腐敗後の微生物によるアンモニア分解能力は、その濃度にもよるが、3 mg/L では、ほぼ1日で分解し、亜硝酸から硝酸塩に分解される速度も約1日と、ほぼ2日で処理可能であり、アマモの腐敗速度を短時間にする事で、アマモの微生物分解処理が可能である。

また、動・植物性の原料から製造される肥料は、肥料取締法により表示票の添付が義務付けられているが、その表示項目は、肥料の名称、肥料の種類、届け出を受理した都道府県、表示者の氏名又は名称及び住所、正味重量、生産した年月日、原料名、主要な成分の含有量の8項目の表示が義務付けられている。本実験で微生物分解処理し最終処理液の成分分析を行った結果、肥料としての成分が含有していることが解った。

5.3 海岸清掃に関する社会的運用システムについて

「海洋ゴミの集積・処理に関する社会的運用システム」のフローを図5.3.1に示す。

ここでは、環境チケットを利用した運用システムについて記述した。

本事業で提案・実践した「地域の海洋環境貢献活動プロジェクト」(健康な海づくりプロジェクト)を基本に、海岸から集めた海洋ゴミの内、リサイクル可能な海草・藻等の腐食又は発酵処理を行い、処理後の生成物を肥料等に有効利用する方法を提案する。その際の、受け渡し手段としては環境チケットを適用する。

また、塩分や水分を含んだ人工系海洋ゴミは、海浜に設置した小型焼却炉で焼却処分し、自治体や産業廃棄物処理場には極力持ち込まない方法を提案する。

小型焼却炉の設置・使用は、排気ガスの環境基準をクリアすることが第一である。

このため、安価な触媒技術の開発等が必要であるが、5.2項で示した高温燃焼技術と貴金属ナノ粒子触媒技術を適用することで解決可能と考える。

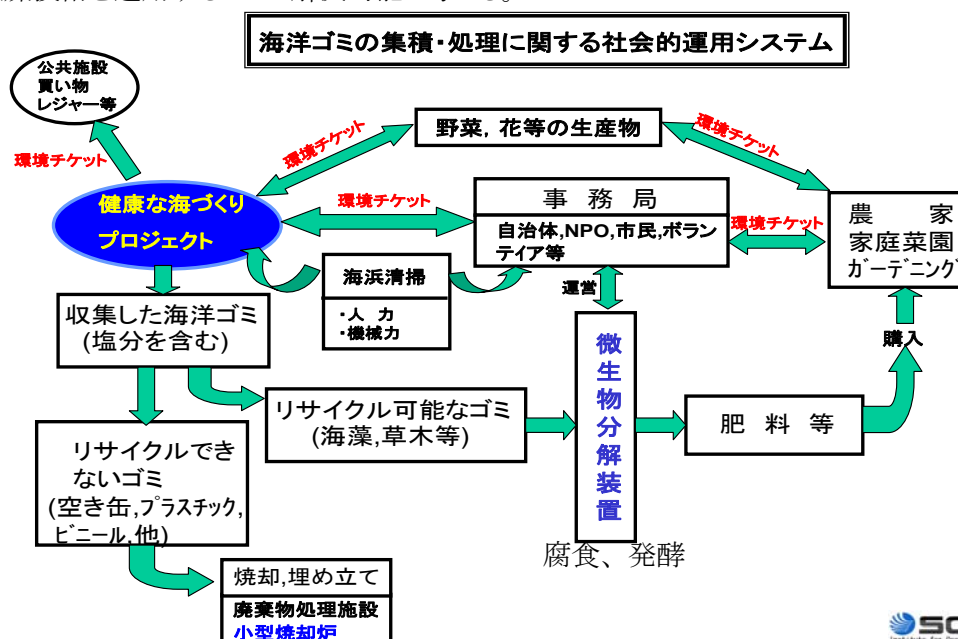


図5.3.1 「海洋ゴミの集積・処理に関する社会的運用システム」のフロー

6. まとめ

大量生産・大量消費・大量廃棄社会では、生産・消費のあとの捨てられるゴミの処理を考えてこなかった結果、生産物が大量のゴミとして残され、今や陸に限らず海洋もゴミで景観・環境・生態系の破壊など深刻な問題になっている。

海洋のゴミ問題は、一国・一地域の問題ではなく国、企業、個人のあらゆるレベルで取り組まなければならない社会問題にもなっている。

本調査研究事業では、海洋ゴミ問題について隣国の韓国との連携も視野に入れ、韓国政府関連部署や韓国の環境NPOとの情報交換等を積極的に行ってきた。

平成14年度から平成16年度までの3カ年にわたり、このような状況の下できれいな昔の海を取り戻すことを願い、地域の人々が海洋環境に係わり易い活動の場として、「地域の海洋環境貢献活動プロジェクト（SOFモデル）」を地域の海岸清掃組織、NPO、自治体等と協働で進めてきた。平成17年2月には全国の地域活動担当者が東京に集まり交流会議を開催し、活動事例の発表や情報交換等を行い、更に継続的な循環型活動の進め方等について討論を行った。

また、人工系や自然系の海洋ゴミの集積・処理問題についても調査・検討を行った。

本調査研究事業における主な成果は次のとおりである。

【海岸清掃等に係わる社会活動システムについて】

- (1) 平成14年度～平成16年度の3ヶ年の間、本事業にて立案した実践的循環型社会活動システムである「地域の海洋環境貢献活動プロジェクト」を、それぞれ特徴のある全国13カ所の市町村で実践し、四季を通じた継続的な活動の実施体制の基礎固めを行った。
- (2) その結果、稚内市、気仙沼市、常滑市、加世田市、沖縄宮古島平良市においては、自立した継続的活動組織が生まれ、SOFの支援がなくても独自に活動が進められている。
- (3) 平成16年度における活動地域は、酒田市、日間賀島、幡豆町、新島、鹿屋市、宇土市、伊万里市、枕崎市で、3ヶ年間に全国13カ所の活動拠点に地域活動の指導者と活動組織が構築できた。活動プロジェクトに約3,600人が参加したことにより、地域の海洋環境貢献活動プロジェクトが実証され、ほぼ活動プロジェクトのシステム構成ができたことにより、循環型の継続的な実施体制の基礎固めができた。また、10回の活動プロジェクト説明会を開催し、活動候補地が構築できた。
- (4) 海浜清掃と環境チケット、海の工作教室・海洋環境教室等を組み合わせたことで、海

に関心が低かった地域の人々に海の海洋環境に目を向ける機会を与えることができた。

- (5) 活動プロジェクトに地域通貨の一種である環境チケットを導入した事により、地域の海洋環境保全に対する市民、ボランティア、地域産業（商工会、観光協会等）、自治体等の積極的な参加を促すことができ、特に地域商店等での商品の割引や地域銀行での定期預金金利の上乗せ等が行われ、更に地域商工業者の協力の輪が拡大していることから、地域経済の活性化を図る効果もあることが分かった。
- (6) 本プロジェクトに携わってきた全国の地域の方々が集まり、交流会議を開催したことにより、関係者間のネットワーク化が促進され、海洋ゴミ問題ひいては海洋環境問題について、お互いの共通認識が得られると共に、地域と地域が切磋琢磨して地域の特徴を生かした活動形態の構築の可能性が見いだされた。

【海洋ゴミの集積・処理に関する社会的運用システム】

- (7) 内外の海岸清掃機械は、平坦な海浜を対象にした機械の開発が主である。海洋ゴミが最も多く堆積し清掃作業がし難い岩礁・岩場等の危険地帯の清掃機械の開発例は見あたらなかった。
- (8) 国内外の海洋ゴミ処理技術について、問題提示の例はあるが塩分を含んだ海洋ゴミ処理装置の開発例は見あたらなかった。
- (9) 岩礁・岩場等の清掃技術について概念設計を行った結果、既存のロボット技術を組み合わせる事で対応可能であることが分かった。
- (10) 海洋ゴミの70～80%を占める自然系海草ゴミが海岸に大量に漂着・堆積し、その処理に苦慮している現状で、海岸に漂着した塩分と水分を含む海草のリサイクル技術を開発し、生成物の有効利用を図るための基礎実験を実施した結果、低コストで海生・陸生植物の生育に利用可能な海草ゴミの肥料（液体）化が可能なが解った。
- (11) 海草ゴミのリサイクル技術は、本調査研究で進めてきた「地域の海洋環境貢献活動」と併せて人工系海洋ゴミと自然系海洋ゴミを収集し、その処理を自治体やNPO、地域住民が簡便に行える小規模海洋ゴミ処理施設を海岸近傍に設置して行い、その生成物を肥料等に有効利用する、海洋ゴミに関する地域の社会的運用システムの構築について検討を行った。

今後、ますます増えるであろう沿岸海域のゴミ問題に対し、地域住民による環境美化活動が大きな力となっている。

本調査研究事業は、地域の人々の環境美化活動に少しでも助力され、清掃費用が軽減される循環型の継続的社会活動システムが実現可能にならないかとの思いから始めたものである。

平成14年度から平成16年度までの3年の間、海浜清掃活動に環境チケットを取り入れ、環境教育プログラム等を組み合わせたSOFモデルの構築、そのモデルを全国13カ所の海浜を持つ自治体を初め、地域のNPO、商工会議所、観光協会、地元企業等の協力の下に、地域の人々と協働で「地域の海洋環境貢献活動プロジェクト（SOFモデル）」を実施してきた。

その結果、この活動に直接携わってきた地域の方々が集まり交流会議が開催された。

この会議では、今後、この活動が全国的に広がるためには、地域の人々が相互に情報交換等を行うサポート組織やネットワークの構築が必要との総意が得られる等、この活動の全国展開の芽が生まれた様に思われる。これらのことから、海洋ゴミ問題に関して循環型の継続的活動に対する財団の役目が一段落したと考える。

今後は、財団としても地域の人々の活動の拠点として、この活動に助力をすること、又、SOFモデルのより良い姿に向けての改善努力を行う等、活動推進のフォローアップが必要と考える。

そして継続的に海岸の環境美化活動が全国的規模に展開することとなれば、日本の海洋環境の向上に大いに寄与することとなるであろう。

又、これら活動と付随して人工系と自然系の海洋ゴミの集積・処理問題の解決も重要な課題であると考え、現在、技術的方策を検討中である。

本調査研究事業を進めるに当たり、事業の趣旨に賛同され活動を企画・実施して頂いた地域主催者・担当者の方々、季節を問わず活動へ参加・協力をして頂いた地域の方々、また、工作教室等の活動準備・実施等に協力して頂いた多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

Appendix

“健康な海づくり”プロジェクトについて

1) プロジェクトの概要

① 海岸清掃に係る社会活動システムの構築

「チャレンジ”健康な海づくり”プロジェクト」と名付け、地方を主体とした活動を進めております。

プロジェクトの具体的な取り組みとして海浜清掃と海洋環境教育、工作教室などと*地域通貨を組み合わせたパイロットプロジェクト（SOFモデル）を稚内市、気仙沼市、酒田市、新島村、常滑市、幡豆町、日間賀島、枕崎市、鹿屋市、宇土市、伊万里市、鹿児島加世田市、沖縄宮古島等で進めてきました。本プロジェクトには、平成14年7月から約3,600人の児童、父兄、地域住民が参加しました。

② 海洋ゴミの集積技術、処理技術の調査研究

海浜や磯、岩礁地帯に漂着するゴミを機械力で清掃する装置の開発やその運用システムの調査研究を行っております。

2) プロジェクトの特色

プロジェクトの構成を図1に示します。

海浜清掃等の「海洋環境貢献活動」と「地域通貨（以下”環境チケット”）」をリンクし、これによって地域社会における海洋環境保全活動の持続的展開および地域社会の活性化と官民の協働がより一層強化されることを目的としています。

本プロジェクトの大きな特色は、以下に示す3つにあります。

① “環境チケット”の導入による地域社会活動の活性化と官民の協働化

海洋ゴミ問題の解決のためには、市民の海洋環境に対する意識改革が必要です。

そこで、海浜清掃等の海洋環境保全に貢献した市民を対象にした地域通貨（“環境チケット”）を配布します。この地域通貨を用い

て海洋環境教室への参加、公共施設、レジャー施設、商店等を利用可能にすると共に、既に他の地域で活動している地域通貨グループとの連携も視野に入れたネットワークを展開しながら、市民の環境意識の改革を図ることにしております。



②海洋環境教室および海の漂流物等による海の工作教室の開催

海浜清掃などの海洋環境保全に貢献して"**環境チケット**"を入手にした子供達を対象として、海洋環境教室および海の漂流物等を用いた工作教室を開催し、それらを通じて子供達に海洋環境の尊さ、海の楽しさなどを伝えるものです。

③地域におけるパートナーシップの創出

このような具体的なプロジェクトを推進するためには地域社会における強力なパートナーシップの創出が必要です。パートナーシップとは、具体的には行政、企業、NPO、教育機関、市民等が連携した活動のことで、それらの各セクター間の密接なパートナーシップの創出を図っております。

3) 今後の展望

海洋のゴミ問題は、一地方のみならず全国的な展開が必要であり、かつ国際的な取り組みが必要であります。全国的な展開に当たっては、陸域・海域を一体化した「SOF モデル」の継続的な活動と全国的なネットワークづくりを目指し、平成17年2月25日（金）日本財団ビルにおいて、「ゴミ問題に取り組む地域社会—循環型の継続的活動を目指して—」と題して、地域活動を進めてきた担当者が集まり交流会議を開催しました。国際的な取り組みに当たっては、近隣諸国との情報交換などによる対外的な展開も視野に入れ、韓国の環境NPOや関係組織と話し合いを進めてきました。

なお、本事業は、競艇交付金による日本財団の支援を受けて、「海洋及び沿岸域のゴミ問題に関する調査研究」事業として実施しております。

***地域通貨**：環境保全や福祉・教育などのお金に換算しにくい活動・サービスなどに関して、地域社会が発行するチケットなどを、通常の貨幣に変わり活用する仕組み

平成16年度 海洋及び沿岸域のゴミ問題に関する調査研究報告書

平成17年3月発行

発行 財団法人 シップ・アンド・オーシャン財団 海洋政策研究所

〒105-0001 東京都港区虎ノ門 1-15-16 海洋船舶ビル

TEL 03-3502-1828 FAX 3502-2033

<http://www.sof.or.jp> E-mail: info@sof.or.jp

本書の無断掲載、複写、複製を禁じます。 ISBN4-88404-152-6